ナルトが馬鹿みたいに前向きじゃなかったら？

ビビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナルトが馬鹿みたいに前向きじゃなかったら？

【Ｎコード】
Ｎ９５５４Ｎ

【作者名】
ビビ

【あらすじ】
ナルトの性格改変ものです。
常にハードモードを目指しております。

忌み嫌われる少年（前書き）

・ナルトの語尾が「ってばよ」じゃなく、普通です。
・余裕でストーリー改変するかもしれません。
・アンチなどするつもりはありませんが、もしかしたらなっちゃうかもしれません。
・オリジナル技などは出す予定はありませんが、ナルトの使えるようになる忍術が変更になる恐れがあります。
・→サクラが魔改造によりオリジナル技を使うようになっちゃいましたｏｒｚ
・ハラワタぶちまけたりの残酷シーンが入ります。
・一番重要なことですが、ナルトの性格が結構変わる予定です。
・ちょこちょこと登場キャラの性格が変わっております。主にシリアス方面に。
・オリジナル設定、オリジナル展開がふんだんに詰め込まれております。
・本作にはＢＬ成分が含まれておりませんのであしからず。

以上の点を踏まえてお読み下さるようお願いします。

この作品はａｒｃａｄｉａとの二重投稿です。

忌み嫌われる少年

ボサボサの金髪に古びたゴーグル、そしてオレンジ色をしたぶかぶかのジャンパーを着ている少年――うずまきナルトは心から欲していた。

教室の中央。

大勢の生徒に見られながら、その視界に混じる負の念を感じながら、必ず見返すという決意を胸に、ナルトは試験に挑戦している。

試験課題は忍術の初歩で分身の術。

自分と同じ姿の幻影を三つ以上同時に展開すればいいという単純極まりない試験。

しかし、ナルトはこの試験に既に二回落ちている。

二度あることは三度ある。

周囲の生徒たちの視線は”落ちこぼれ”を見る目であり「できるわけねーよ」と揶揄されている。

聞こえないフリをして、ナルトは集中する。

両足を肩幅ほど広げ、指で印を切る。同時に、チャクラを――練り上げる。

己が身体を引き裂くほどの莫大な力が満たされていき、暴発しそうになるのを綱渡りをしていると錯覚するほどの拙い制御を施す。その程度では制御できない、身体から漏れ出していくチャクラは少年に報復活動を行う。

激痛。

視界が赤く染まる。眼球の毛細血管が破裂したのだろう。痛みに気が狂いそうになるが、なるべく不敵に見えるように祈りながら、歯を剥き出しにして笑う。

痛いのはいつものこと。慣れている。

何時までたっても慣れないのは馬鹿にされることだ。見下されることだ。自分という存在を認めないクソったれなゴミクズどもだ。

そいつらを黙らせるために必要なものがある。欲しくて欲しくてたまらない。それを――手に入れる。

（力が――欲しい）

練り上げたチャクラが皮膚から漏れ出していく。

クソッ、畜生ッ！　心の底から憤慨する。

いつだってそうだ。欲しいものは手に入らない。

今ほしいものは、チャクラを制する技術。分身の術などという初歩の忍術を使えるだけでいい、その程度の集中力。

祈りは言葉に変えられて「頼むよ」と掠れた声がナルトの口からこぼれていく。

その声は分身の術を行使したときの音にかき消され、誰の耳にも届くことはない。

涙が一滴零れ落ちる。

立派に立つ分身が一つと、出来損ないの潰れたカエルみたいな分身が一つ。合格条件は分身を三つ以上生み出すこと。つまり――

「うずまきナルト。お前は不合格だ」

崖から落とされるような感覚。

ナルトは三度目の試験を、落ちた。

認めたくない事実。自分には才能がないという劣等感。

何故、どうして、畜生、嘘だろ、クソ野郎、ふざけんな――そんな罵声が口から溢れ出そうになって、止める。

ぎゅっと唇を引き結び、扉に向かって歩き出し、外へ出る。

誰も止めてはくれない。

ナルトを案じるように試験官であり、担任の教師であるうみのイルカは手を伸ばしてきたのが目の端に写るが、関係ない。

今はただ、ひっそりと泣きたい気分だった。

◆

昼と夜の境目である夕闇の下、今日も今日とて誰もいない家に帰ることなく、公園のブランコを漕いでいる。

「分身の術――練習したんだけどなぁ……」

暁の空を見上げながら、ぎゅっと拳を握りしめる。

公園の中にはいろいろな遊具があり、楽しげに遊んでいる子供たちと、子供を温かく見守る母親たちがいる。

そのうちのいくらかはナルトのことを見ると顔を歪め、いそいそと視線をずらし、子供を連れて帰っていくのだ。

何か悪いことをしたわけでもないのに、この扱い。ここまで毛嫌いされるといっそ清々しい。

ナルトは引き攣った笑顔を浮かべて、地面に唾を吐き捨てた。

昔からこうなのだ。

物心つく前に両親はいなかった。顔など覚えていない。親戚もいないのだから両親の話も聞けない。

あれは初めて忍者アカデミーに通い始めたときのことだったか。

最初は仲良くできた。友達もいた。けれど、次第にナルトの周囲には人は寄りつかなくなったのだ。

「母ちゃんが言ってたぞ。ナルトは化物だって……」

未だに化物がどういう意味かはナルトは知らない。

化物という言葉は白眼や写輪眼などを継承する血継限界などの力を所有する日向家やうちは家などに相応しいとナルトは思う。だって、ナルトは分身の術すらまともに扱えないほどの才能すらないのだから。

努力はしたと思う。
教科書を何度も何度も読み返し、印を切る順番だって完璧に覚えた。チャクラという概念がいまいちわからないし、説明も教科書には記載されていないので適当にやっている部分はあるが、記載されていない程度の内容なのだろうから重要性は薄いと思う。
だから、練習できるのは印を切ること。次に分身を完全に再現するための記憶力と集中力だ。
どちらも自信がある。鏡の前で何時間と立ち、素っ裸の自分を凝視した。最初はまるで自分がナルシストになったみたいで気持ち悪いと思ったが、次第に慣れていき、だんだんと細部を注目するようになった。今では何も見ないでも自分の身体を絵に描けるほどに記憶している。
実に不思議である。
記憶力や想像力に関してはナルトは普通よりも上だという自信がある。この修行のおかげで更に磨きがかかったという確信もある。変化の術は格段に上手くなっているのだ。それなのに、分身の術だけ上手くいかない。キィキィと耳障りな音を立てるブランコを支える錆びた鎖を眺めながら、思う。なんでできないのだろう、と。
理由がわからないから努力する道順が浮かばない。どうすればいいのかわからない。そんなことは長くはないけれど、短くもなかった人生においてよくあることではあったが、試験の合格をするための努力のやり方がわからないなどお話にならない。これも才能の問題なのか。
知れず、溜め息が漏れる。
外気に晒された呼気は白い靄となり、空気の中に溶け込んでいく。なんとなくそれが面白くて、何度も何度も息を吐き出して――何となくむかついたので自分の頬を思いっきり殴った。
自傷癖があるわけではない。ただ、あまり悔しさを感じていない自分が腹立たしかったのだ。
自分以外は合格した。一度目なのに、合格した。自分は三度目で

不合格。才能の違いなのか。努力の違いなのか。環境の違いなのか。それはわからない。
わかっているのは――見下されているということだけだ。
教室を出るときに眼に写ったのは自分を心配するイルカの姿だけでなく、蔑みの視線を向けてくる同級生の姿。にやにやと嘲る同級生の姿だった。
思い出しただけでむかつく。
立ち上がり、ブランコを思い切り蹴りあげてみる。
勢いよくブランコは飛んでいき、そのままの勢いでナルトにぶつかった。
額に直撃したそれはナルトを一メートル近く吹き飛ばし、地面を何度もバウンドして、止まった。

「何やってんだ、俺……馬鹿か？」

阿呆、と聞こえた方向を見上げると数羽の鴉が木の上で群れながら「あほー、あほー」とナルトを見下しながら鳴いている。
知れず、苦笑する。被害妄想も甚だしい。これはただの鳴き声だ。鴉の鳴き声なんだよ。だから、頬を濡らす体液など流れてなんかいない。
悔しさがあった。
考えないようにしていたけれど、今日、思い知った。
自分には忍術の才能がない。人脈もない。何もない。

（じゃあ、俺には何があるんだろう）

歪んだ視界に写る自分の小さな拳を見る。
ぼろぼろの拳骨だ。何度も何度も木偶人形を相手に拳を振り上げ、鍛えぬいた拳。

立ち上がり、足を見る。
鍛え上げられた骨太の脛。これも木偶人形に何度叩きつけ、痛みのあまり絶叫した回数など数えきれない。
取り柄は酷使したこの身体。イジメぬいたこの肉体。
けれど、それだけじゃ忍者アカデミーを卒業できない。必要なのは忍術を使えるという絶対条件をクリアできること。ナルトは才能に恵まれなかった。

「やぁ、何してるの？」

夕焼けが沈み、夜に切り替わる一歩手前のとき。
呆けたまま立ちつくしているナルトに声をかけてきたのは教師であるミズキだった。
教師らしくない長く伸ばした髪が印象的な、どちらかというと整っている顔立ち。いつだって柔和な笑みを浮かべている。そんなミズキが、ナルトは嫌いだった。

「何の用だよ？」

険のある、いつもより低く響く声音。
嫌われているということを自覚しているであろうミズキはそんなことを無視して、笑いながらナルトに近づいていく。
厭うようにナルトは後ろに飛んで距離を取るが、それを見て、ミズキはより一層笑みを深くする。

「良い話があるんだ。アカデミー、卒業したいだろ？」

話が聞き終わる頃には、真円の月が夜空を照らしていた。

◆

バレないように慎重を期した。
服は闇に溶け込むために夜色のジャンパーに着替え、靴は靴底がゴム製のものに履き替えた。
見つかったときのために準備は入念に重ね、里から支給される孤児のためのお金で貯蓄したものを奮発し、忍具も一新した。
これほどまでの用意をして、火影の住む家へと入り込んだのだが、案外バレないものであり、あっさりと侵入劇は開始される。
最初は心臓が破裂しそうなほどに脈打ち、呼気も少しばかり荒くなっていたのだが、今は冷静そのもの。夜目を利かせながら目的のものがありそうな部屋を探す。
それは呆気ないほどに簡単に見つかった。
書物がたくさん貯蔵されている倉庫のようなところ。忍者アカデミーなどとは違う、古い紙独特の鼻につくような匂いで満たされているそこは、ナルトの知らない奇怪な文字が表紙の巻物が数多く本棚に並べられていた。

（ミズキの言った通りだ。嘘じゃなかったんだな）

『禁』と大きく書かれたそれは厳重に縄で縛られており、分厚い埃で穢されていることからも、長い年月の間、誰にも読まれていないことがわかる。

『その中にはとても凄い忍術が書かれていてね。それを使えるようになれば、間違いなく卒業できるよ』

甘い言葉だった。
その言葉に翻弄されて、ここまで来た。
だが――『禁』と書かれている意味を考えてしまったの。
ナルトは不思議に思う。題名からしてこれは封じられているもの

のはずだ。それほどまでに凄い忍術が記載されているのなら、もっと広く伝えられていてもおかしくないはず。何故なら、強い忍術――便利な忍術と言い換えてもいい――は多くの忍者に浸透させたほうが里の利に繋がるし、禁じられるならばそれ相応の理由があるはずだ。

馬鹿みたいにはしゃいで巻物を取り出してみたが、中へと仕舞う。

そして、最もリラックスできる立ち姿をとる。

手を胸の前に置き、印を切る。

澱みなく指は動き、試験のときとは違う感触を覚える。

静かに、静かに、静かに、統一された精神の下、チャクラが自分の中で制御されていることが理解できた。身体中を駆け巡るチャクラは。試験中や今までの練習中では何時だってナルトに激痛を与えてきたが、今は違う。満たされるような――力が溢れてくるような感覚を覚えさせる。

印を切り終え、目を閉じて、祈る。

分身が生まれる音が、耳に伝う。

確かな存在を近くから感じるが、怖くて、目を閉じていて、それでも勇気を出して、目を開いた。

「ははっ、できちまった」

そこにあったのは立派な分身だった。

ナルトと同じポーズをとった、ナルトそっくりの分身が五つ。

足から力が抜けていって、へたり込む。ぺたん、と床に尻餅をつき、乾いた笑いが漏れ出てくる。

そんな時――

「使えないな」

聞き覚えのある声が耳に届き、首筋に鋭い痛みが走り、ナルトは

気を失った。

◆

夜のこと。

ベッドに倒れ込むように飛び込んだ後、イルカは虚ろな表情で惰眠を貪っていた。

眠りを妨げるように出てくる夢は、昔の記憶。最悪という言葉では生ぬるい――父と母との別れの記憶。

この世の終わりかと思った。

突如現れた九尾に襲われた木の葉の里が窮地に陥った事件。

あの時、イルカは無力だった。

絶対悪である強大な力の根源――九尾の狐に勇敢に立ち向かう父と母の背中。手助けすることが許されない、幼かった無力な自分。

全てが全て、忌まわしい。

（けど、それだけじゃない。あれで俺は不幸になった。けれど、もっと不幸になった奴が――）

夢に沈み込んでいくイルカが考える事は――

思考を邪魔するように扉がノックされ、イルカは現実へと戻ってきた。

マナー違反なんていうレベルではないノックの嵐は止むことなく、急いで起き上がると、イルカは扉を開く。そこにいたのは常ならば笑みを浮かべているはずのなのに、随分と切羽詰った表情のミズキである。

息せき切るように話し出した言葉。

それは火影からの召集の伝令であり、その次の言葉が信じられないものであった。

「ナルト君がいたずらで封印の書を持ち出したようで……っ！」

すぐに火影の家へと向かってイルカはミズキと立ち並ぶ家の屋根を飛ぶように移動する。

そんな馬鹿な――心はそんな思いで満たされている。

ナルトは馬鹿ではない。勉強熱心で、努力家で、致命的にチャクラコントロールが下手なだけの勤勉な生徒だ。悪戯だってするような性格ではないし、自己主張が下手ではあるが、いつだって愚直なまでに突き進んできた。イルカはそのことをよく知っている。

『俺に大それた夢なんてないけど、いつかさ。イルカ先生みたいな立派な教師になりたいんだ。俺、先生のこと尊敬してるから……』

ナルトが好きな一楽のラーメンを奢ったとき、イルカが聞いた言葉だ。

恥ずかし気に、しかし、真摯に語るその言葉に胸を打たれ、涙が零れそうになるのを堪えることに必死だった。

その後の言葉も、忘れられない。

『自分みたいに友達ができない奴を励まして、俺が友達になってやるんだ。イルカ先生みたいにさっ！』

堪えることは不可能だと思い知った。

顔を真っ赤にしてそっぽを向いてくれたナルトのおかげで涙は見られずにすんだ。ラーメンを啜ることすらできず、目元を押さえて嗚咽をもらしてしまったのだ。教師をやってて良かった、と何度も思ったことはあるが、あれ以上に自分の心に突き刺さる言葉はない。

イルカはナルトを信じていた。

だが、火影の家の前で巻き起こる騒動は現実としてイルカの考えを否定しに来る。

「悪戯では済まされませんぞ！」
「あんな者を生かしておくから……ッ！」
「火影様ッ！　決断をッ！」

火影の周囲を囲む多くの忍者たち。
必死に形相で火影を攻め立てるように言葉を吐く姿がイルカの視線に入ってくる。

「うむ……初代火影様が封印した危険な書物じゃ。使い方によっては恐ろしいことになりかねん……」

月明かりに照らされた皺だらけの渋面は、辛そうに言葉を吐き出していく。
違うだろ。そうじゃないだろ。あんたまでナルトを疑うのか？
イルカは願うように思うが、その言葉は届かない。一個人よりも優先すべきは里の仲間の連帯。そのためには、時に仮面を被らなければならないときもある。

「書が盗まれて二時間以上経つ。急いでナルトを探すのじゃ」

非常な言葉とともに、ナルトの捕縛を命じられる。
まずは自分が探し出し、事情を聞きだす。きっとナルトではないと証明してみせる。
そばで汚い笑みを浮かべるミズキに気づかず、イルカは夜の森へと飛び込んだ。

◆

目を開いたときに真っ先に視界に飛び込んできたのは満月だ。

なんで外で寝ていたのか、靄がかかったようにまとまらない思考は答えを出せない。
何故、月の見える森の中で寝ているのか。何故、縛られて動けないのか。何故、隣に『禁』と書かれた巻物が置かれているのか。全く持って答えが出ない。
とりあえず、身体の関節を外して縄を抜ける。無理そうだったものはジャンパーの袖の中に仕込んである苦無で切り落とし、自由の身となる。杜撰な縄の縛り方にタメ息すら出る。初心者だろうか。それとも焦っていたのか。それとも自分を侮っていたのか。
動き出した脳は簡単に答えを弾き出す。
部屋の中、分身の術が成功し、『禁』の書を持ち帰ることを止めて帰ろうとしたとき、不意打ちを喰らったのだ。聞き覚えのある――ミズキとそっくりな声とともに。
そこから出る結論は、『自分を侮っていた』からだろう。忍術もろくに使えない生徒に対してそこまで真面目に縄縛りをする気が起こらなかったのかもしれない。推測の域を出ないが、たぶん合っているだろうとナルトはあたりをつける。
しかし、次に出る疑問は――『禁』の書だ。

「何で俺を利用しようとした？　失敗したから短絡的に強奪か？」

理由がわからない。そして、何故それが今なのか。利用したのが自分なのか。それらの理由がはっきりとしない。
いつも悪戯をしている悪ガキなら理解できるが、ナルトはそういう下らない遊びに興じたことは一度もない。自分を高めることにすべての時間を注いできた。忍術の成績はいまいちだったが、それ以外は全て優等生だったと言っていい。授業態度だって間違いなく一番良いはずだ。
はてと首を傾げる。あまりにも不明点が多すぎる。
だが、このままここで居座るわけにも行かない。おそらくミズキ

は自分に対して良からぬことをするつもりなのだろう。身の安全を確保するためにも移動すべきだ。冷静な思考がナルトにそう提示する。確かに、と納得し、ナルトは『禁』の書を背に担ぎ、移動を開始した。ミズキに対してのせめてもの復讐である。書物は渡さない。

「見つけたぞ、コラッ！」

そんな決意を胸にして動き出そうとしたナルトの前に、突如、人影が舞い降りた。

木の上から音もなく着地した影はナルトの尊敬する先生――うみのイルカその人である。

逃げ出そうとした瞬間にイルカと出会えたのは運が良い、とナルトは思う。

「イルカ先生。俺、ちょっと困ったことになってる」

何故か機嫌が悪そうなイルカが不思議ではあるが、それは無視だ。手を見せる。そこにはキツく縛られた縄の痕が見える。鬱血したそれは痛々しくもあり、長時間縛り上げられていた証明にもなる。

それを見たイルカの表情の変化はわかりやすく、「どうしたんだ」と心配そうに語りかけてくる。

簡潔に説明するために数秒考え込み、ナルトはこれまでの経緯をかいつまんで説明する。

ミズキにそそのかされたこと。火影の家へと侵入したこと。結局盗まずに帰ろうとしたら気づかない内に背後にいたミズキに気絶させられたこと。縄を抜けて逃げ出そうとしていたこと。

「……ミズキ――！？」

信じられない。あいつが？　呆気にとられたイルカは鮮烈な殺気

を感じ取り、無意識のうちに身体が反応してしまう。その殺気が向かうはナルトの方であった。考える間なく、イルカはナルトを突き飛ばす。
雨のように水平に降り注ぐ苦無の群れ。
入れ替わりのようにナルトの場所に立ったイルカは、すぐさま腕を交差して急所だけは守る体勢をとる。そのおかげで死ぬことだけは免れたが、身体全身に襲い来る膨大な数の苦無を相手に、ダメージがないのはありえない。
苦無を全身に受けたイルカは踏ん張ることができずに近くにあった小屋に激突する。
痛みに視界が眩むが、歯を食いしばって耐え抜いて、前を見る。
そこにいるのは悠然と笑うミズキの姿だった。木の枝からイルカとナルトを睥睨するように見下ろしている。

「よくここがわかったな」
「なるほど……そーいうことか！」

睨み合う二人をよそに、ナルトは腰に吊るしたホルスターから苦無を取り出すと、いつでも投擲できるように狙いを定めている。しかし、濃厚な殺気を宿したナルトの視線を感じ取りながらも、ミズキは全く緊張する素振りなく、イルカのほうを警戒している。
ミズキは理解しているのだ。満身創痍のイルカよりもナルトは劣る、と。警戒する意味などないということを。
悔しさに歯軋りをし、勢いのままナルトは苦無を投げつけた。修練を怠ったことのないソレは正しくミズキに飛来し、苦無を目で追うことなく、ミズキは受け取る。キャッチボールのように危なげなく、だ。

「巻物を渡せ」
「ナルト！　巻物は死んでも渡すなっ！」

ミズキの言葉を遮るように、イルカは身体を蝕む苦無を引き抜く。どろりと粘ついた血液が流れ出てくるが、そんなものは無視だ。

「それは禁じ手の忍術を記して封印した危険な書物だっ！　ミズキはそれを手に入れるためにお前を利用したんだっ！」

吐き出される言葉はナルトの予想通りのものだった。

背に担ぐ『禁』の書を狙うために、ミズキは自分に近づいたのか。自然と苦無を握る利き手に力が入るが、武器もタダではない。先ほど投擲して無意味に終わったことは記憶に残っている。浪費はあまりよろしくない。

隙を窺いながら、ナルトはじりじりと後ろ足で後退していく。

そんなナルトを見下ろしながら、ミズキは何が可笑しいのか。笑い出した。

「くっくっくっ、利用も何もコイツは全く役に立たなかったけどな。何でか知らないが、巻物を収められた部屋で分身の術をして、成功して、勝手に満足して帰ろうとしたんだからなっ！　本当に役立たずだぜ」

次々と湧き出てくる罵倒に何の感慨も覚えず、ナルトは終始無表情だ。そもそもミズキは嫌いだし、嫌いな相手に何を言われても困らない。

唯一思うことは、自分の直感を信じずにミズキの甘言に少しでも耳を貸してしまったこと。聞いたとき、それは悪いことだとわかっていたのに、けれどその提案を断ることができなかった。惰弱な自分。そのせいで傷を負ったイルカの姿。

俺のせいだ、そう思うだけで怒りが湧いてくる。

そんなとき、ミズキが高笑いを治めたかと思うと、にやにやと不

気味に笑いながらナルトを見下ろす。
「そうだ、良い事を教えてやるよ」
「バカ、よせっ！」
らしくもなく、必死に声を荒げるイルカの姿。何をそんなに焦っているのか、ナルトは首を傾げる。
ミズキの話などに興味はなく、欲しいものはミズキが慢心して隙を出すことだけ。
集中しているナルトの姿に気づいているだろうに、ミズキはおしゃべりな口を開く。馬鹿みたいに。顔を歪めながら。
「十二年前……化け狐を封印した事件を知っているな？　あの事件以来、里では徹底したある掟が作られた」
「ある掟……だと？」
「しかし、ナルト……お前にだけは絶対に知らされることのない掟だ」
「俺だけ？」
意味が――わからない。
堪えきれなくなったように肩を揺らすミズキに怒りを覚え、手に持つ苦無を投げつけるが、それはあっさりと受け止められる。何個も何個も投げつける。ここから先は聞いてはいけない、と第六感が忠告してくるのだ。
無意味に終わる。
「気味悪く笑ってんじゃねぇ！　うぜぇっ！　黙れっ！」
ナルトは声を張り上げる。
森中に聞こえ渡っているのではないかというほどの怒声。それは

ミズキを喜ばせるだけに終わり、醜く笑いながら――

「……ナルトの正体が化け狐だと口にしない掟だ」

身体が、硬直する。

「やめろ！」と叫ぶイルカの声も耳に入らず、ミズキの言葉だけが木霊する。

（俺が――化け狐？）

意味が、わからない。

意味がわからないが、だが――必死に声を張り上げるイルカの姿が――ミズキの言葉を肯定している。

胸にぽっかりと空いていた穴があった。

すとんとその中に真実が落としこまれる。

「つまり、里を壊滅させた九尾の妖狐なんだよっ！！　あげくにお前は――」

「やめろぉぉぉ！！」

「イルカの両親を殺した張本人なんだよっ！　笑えるだろっ！？　イルカ先生だってよ！　憧れてるんだってよ！　おかしいとは思わなかったのか？　あんなに里の人間に毛嫌いされて！」

ミズキは背に担いでいた巨大な手裏剣を取り出して――

「イルカも本当はな！　お前が憎いんだよっ！！」

「……なわけねーだろ！　先生は……イルカ先生は……ッ！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

動揺するナルトに投擲した。

風を切る音。
旋回しながら空を走るソレはナルトに当たれば――死ぬ。しかし、ナルトは目の前が見えないほどに、混乱していた。

（俺が、先生の両親を――？）

信じられない。信じたくない。
けれど、何故だからわからないけれど、化け狐だと納得する自分がいる。それが怖い。確信に近いソレがとても怖い。
染まる。視界が染まる。頭の中が焼け落ちそうで、今までの人生が否定されたみたいで。
それに、イルカに嫌われたのなら生きる意味もないのではないか。ナルトはそんなことを思う。
迫り来る巨大な手裏剣は確実に自分を殺してくれそうで。首元に正確に飛んできて。
迎え入れるように目を閉じる。
衝撃が身体を襲う。

「ぐっ……」

だが、痛くはなく、むしろそれは優しくて。おそるおそる目を開くと、そこにはイルカの姿があって――血を口の端から滴らせながら、笑う。
憎んでなんかいない。憎まれてなんかいない。その笑顔を見ただけで、ナルトの混乱は治まった。
だが、少し視線を変えてみると――信じたくない光景が目に入る。

「せん……せい……？」
「……俺なぁ……」

イルカの背中には、深々と巨大な手裏剣が突き刺さり、背中を大きく抉っていた。

◆

意識の底に沈めている幼き日の思い出。

「ただいま」「おかえり」という何気ない日常から失われてからの日々。

家に誰もいないという事実は、イルカの幼少時代においてとてつもない傷となった。

「両親が死んだからよ……誰も俺を褒めてくれたり、認めてくれる人がいなくなった。寂しくてよぉ……」

せめて友達には認められたいと思った。

「クラスでよく馬鹿やった。人の気をひきつけたかったからさ。優秀な方で気を引けなかったからよ」

忍術の修行中、池に飛び込んだりもした。

そうすれば、そのときだけは自分のことを見てもらえるから。そのときだけは独りじゃないと思えるから。

「全く自分ってものがないよりもマシだから、ずっとずっとバカやってたんだ」

馬鹿なやつ。

周囲にはそういう烙印を押されるが、誰にも見てもらえない『空気のような存在』になるよりはマシだと思えたから。

そういうポジションを手に入れるために、馬鹿を繰り返し、何度

も繰り返し――おかげで友達はできた。
けれど、それは素の自分を認めてもらえたわけではない。
結局のところ、それは自分を認めてもらっているわけではなく――道化を演じていることに対して、苦笑混じりの認識を覚えられていただけだから。

「苦しかった」

媚びへつらう日々に対して、大人になったからこそ、イルカは思う。
間違っていた。ガキっぽい行動だった。気を引くための努力を違う方向に向けるべきだった。
学校で馬鹿みたいに騒いで、家の中ではしんみりと部屋の隅で座り込んで――涙を流していたんだ。
甘える相手もおらず、恨める相手もおらず、何もかもがないない尽くし。生産性のない日々を送っていた。
けれど、ナルトは違う。
毎日、家にも帰らずに夜遅くまで勉強していたこと、忍具の修練を積み重ねていたこと、苦手な忍術に何度も挑戦していたことも知っている。
その努力が実らずに、へばって倒れ込んで、少しだけ休んで、また立ち上がって修練を再開していたことも知っている。分身の術だってそうだ。最初は分身を一つすら作れなかった。それなのに、試験では一つではあるが、立派な分身を生みだして見せた。合格条件に達していなかったので「不合格」と言わざるを得なかったが、本当ならば「合格」と言ってやりたかった。
周囲に疎まれても努力を重ねて、「いつか見返してやるんだ」と笑っていたことが懐かしい。「それは違う。間違ってる」と教えてやれなかった自分の無力が酷く辛い。

「お前は……頑張ってるよ。努力してる。けど、相手にされないんだよな。寂しいよな。苦しかったよなぁ……ごめんなぁ。俺がもっとしっかりしてりゃ、こんな思いさせずにすんだのによぉ……」

自分だけは認めているから。イルカはそれだけを言いたくて、血の混じる言葉を吐き出した。

ナルトはイルカの命を奪い続けている巨大な手裏剣を見て、瞳孔が開いた。

イルカの腕の隙間から抜け出ると、押し倒されたときに飛んで行った巻物を担ぎ上げ、ナルトは潤んだ瞳でイルカの顔を一瞬見つめた後、森の中へ走り出す。その瞳は、揺れていた。

「ナルトォ！！」

振り返りすらしないナルトに呼び掛けるイルカを嘲笑する。

そして、断言する。

「ククククク、あの目を見たか？　絶望した奴の目だ。あの巻物を利用し、この里に復讐する気だ」

「ナルトは――そんな奴じゃない」

「まっ！　そんなのはどうだっていい。ナルトを殺して……あの巻物が手に入ればそれでいい！　お前は後だっ！！」

心底どうでもよさそうにミズキは言い捨てると、イルカのことを放っておいて、ナルトの後を追いかけ始める。

ナルトがミズキから逃げられるはずもない。自分が動かなければ、ナルトは死ぬ。

身体に突き刺さった苦無が何だ。背中を穿つ手裏剣が何だ。

両手を使って、全て引き抜く。

視界が焼けるほどの苦痛。

生命の雫が身体を伝って滴り落ちるが関係ない。

（させるか……！）

すべきことはナルトと巻物の保護。

そこにイルカの命の保障など、関係ない。

喉を逆流する血反吐を思い切り飲み込むと、イルカも森の中へ飛び込んだ。

◆

イルカは森の中を疾走してた。

林立する木々の間をすり抜けるように走り抜ける様は熟練の技巧を窺わせる。

ふと、イルカの表情が変化した。

月明かりに照らされた闇の中、一際目立つ金髪の髪。

イルカとは比べるべくもないほどの拙い走りで森の中を駆けている姿を見間違えるはずがない。背中に担いだ『禁』の書も見間違えるはずがない。

見つけたのは、ナルトの後ろ姿だ。

更に速度を上げてナルトに近づくと、「ナルトッ！！」と呼ぶ。

そして、手を差し出しながら叫ぶ。

「早く巻物をこっちによこすんだっ！　ミズキが巻物を狙ってるっ！」

伸ばした手は打ち払われる。

「え？」と困惑するイルカを睨みつけながら、一気に方向転換すると、ナルトはイルカの腹に飛び込んだ。

鳩尾を抉るような蹴り足。

鈍い衝撃が腹部に与えられ、小さな身体から生み出されたとは思えないほどの力で吹き飛ばされる。
受け流すことができず、吹き飛んだ勢いのまま地面に叩きつけられると、信じられないものを見るような目で、ナルトを見た。

「どうしてだ……ナルト」

震える声は動揺を表しているのか。
背からぶつかったおかげで汚れた服を払いながら、イルカは立ち上がると――

「どうしてイルカじゃないとわかった！？」

変化の術がかき消される音ともに、イルカはミズキの姿になった。
それを見て、ナルトはにへらと笑っていて、余裕の姿。ミズキは不思議に思うが、何てことはない。

「イルカは俺だ」
「なるほど……」

お互い、不敵に笑う。
ナルトは少し離れた木の幹の裏から、その様子を緊張した面持ちで覗き見ていた。
手には開封された『禁』の書がある。
膝の上に乗せて、目を皿のようにしながら見つめていたのだが、ミズキとイルカが現れたので視線を外したのだ。

「ククク……親の仇に化けてまで、あいつをかばって何になる？」

聞こえてくる声は、酷く腹立たしい内容を含んでいる。

真実かどうかはわからない。けれど、もし自分がイルカの親を殺したのなら……どうすればいいのだろうか。どの面さげてイルカに会えばいいのだろうか。

考えただけで身体が震える。

まるで体温が下がったみたいに、身体が震えるのだ。

否定してほしい。心からそう思う。だけど、どこかで認めている自分がいるのだ。「俺が化物なんだ」と。

だが――

「お前みたいな馬鹿野郎に巻物は渡さない」

断定するように言いきってくれるイルカは、自分のことを信じてくれているようで。

少しだけ、勇気が出た。

震える身体を無理やり押さえこみ、手に持つ『禁』の書に視線を戻す。

「馬鹿はお前だ。ナルトも俺と同じなんだよ」

「……同じ？」

「あの巻物の術を使えば、何だって思いのままだ。あの化け狐が利用しないわけがない。あいつはお前が思っているような……」

ミズキの言葉に、ナルトは知れず、苦笑が漏れる。

（そうさ。何だって利用してやる。力が欲しい。力がいるんだ。俺は……）

そのためには、禁忌だって破ってやる。

「あぁ……」と頷いたイルカの声が、酷く心に突き刺さる。ごめん、

と思う。自分は化け狐だから。きっとそのせいで、力を欲するのかもしれない。

「化け狐ならな。けど、ナルトは違う。あいつは……あいつは」

けれど。

「努力家で、一途で、そのくせ不器用で、おかげで周囲にいらない溝を作って……馬鹿だよな。力をつけて認めさせるんじゃなく、友達になってくれ、の一言で友達なんてできただろうに。あいつは……イイ奴だからできただろうに……それを教えられなかった俺が馬鹿なんだろうけどな」

涙が、流れる。

「あいつはな。この俺が認めた優秀な生徒――うずまきナルトだ。化け狐なんかと一緒にするなっ！」

満身創痍の身体に鞭を打ち、腹の底から出された怒声は、ナルトの心に響いた。

ナルトは今、禁忌を破って書を手にしている。その中にある力を欲している。だけど、イルカはそんなことをしないと断定する。

ごめん、ごめん、ごめん。謝罪の言葉が溢れてくる。信じてくれるイルカの想いを裏切った。それだけが、それだけが心残りだ。しかし、嫌われてもいい。

ぎゅっと拳を握りしめる。『禁』の書に封を施す。もう、力はいらない。これだけで、十分。

「めでてー野郎だな。イルカ、お前を後にするっつったが、やめだ。さっさと死ね」

（これまでか……）

ミズキを倒すには、これだけで十分だ。

踏み込む。

力を加える。

反動で、弾丸と化す。

飛来した黒色の人影は、ミズキに飛来したかと思うと、思い切り米神にぶつかった。

米神に与えられたのは全体重を込めたオーバーヘッド気味の蹴り。小さな身体全てをぶつけた、渾身の一撃だ。

反応できなかったミズキは痛みに眼が眩むのを堪え、必死に現状把握を試みる。

簡単だ。

馬鹿なアカデミー劣等生が、教官である自分に、無謀にも特攻してきた。

イルカを守るように立ち塞がるナルトは、巻物をイルカのほうに放り投げると、ミズキのことを射殺すように睨みつける。

「イルカ先生に手ェ出すな。殺すぞ」

気炎を吐き出すかのようなナルトに「馬鹿野郎！　何で出てきた！！　早く逃げろ！」とイルカは叫ぶ。だが、ナルトは小揺るぎすらしない。ただ、敵であるミズキだけを見ている。

その瞳は『必勝』の意志を宿しており、負けることなど一切考えてない。酷くイラつく目つきだった。

格下の、下忍にすらなれないアカデミー生に、自分が殺される？

ありえない。ミズキは即断する。

「ほざくな！　てめぇみたいなガキ、一発で殴り殺してやるよ！」

本気の殺意。
実戦に参加したことのないようなひよっ子では耐えられないような、濃密な殺気。
感じただけで死の幻覚を見るであろうそれを感じても、いや、感じていないのか。ナルトは一切反応しない。
「……ぶっつけ本番だ。成功するかどうかはわかんねぇ。けど、俺は優秀な生徒だからな。負けるはずがねぇだろ？」
ぼそりと呟かれた言葉は何なのか。
妙にリラックスした体勢で、静かに、流麗に、試験ですらできなかったような複雑な印を澱みなく切っていく。
見覚えのない印。
それは――まさかっ！
「な、なんだとぉっ！？」
組み終えた印とともに巻き起こった事態は、ミズキの想像を超えていた。
森の中、木の上や地上、関係なく溢れ返ったナルトの姿。
その数は数えることすら億劫になるほどの膨大な数。視界全てを埋め尽くすかのようなそれは――アカデミー生が使えていいレベルの忍術ではない。
くくく、と唇を歪めながら、憎らしいまでにミズキを睨みつけるナルトの姿が――化物に見えた。
「成功するもんだな」
「さすがは俺だな」
「要は分身の術を少し難しくした感じか？」
「チャクラの消費量が異常に多いだけだな」

簡単に言ってのけるその言葉。
だが、ミズキ以上にイルカのほうが驚いていた。
つい先日までは分身の術すらまともに使えないと言っていた生徒が、急に成長している。

（ナルト……お前……）

よく見ると、ナルトの瞳は縦に裂けていて、金色に染まっている。
それは――人間と言っていいのだろうか。
今から獲物を狩るかのように四本脚に近いほどの前傾姿勢になるのは、本当に化け狐ではないと言い切れるのだろうか。

「それじゃあ、行くぜ？」

宣言ととに、縦横無尽に埋め尽くされたナルトの分身がミズキに襲いかかる。
必死に抵抗するも、圧倒的な数の暴力に晒されたミズキは、次第に押され始めて行く。
おかしい。
分身が、実体のないはずの分身が、ミズキを殴っている。傷を負わせている。

（俺が時間を稼いでる間に覚えたのか。残像ではなく、実体そのものを生み出す高等忍術”影分身”。こいつ――ひょっとすると……）

多重影分身。
禁術指定のそれは、おそらく『禁』の書を読んで覚えたものなのだろう。
そんなすぐに覚えられるほどの難易度の低いものではない。だが、

イルカは何となく納得している。
ナルトは潜在するチャクラの量が人より多い。とても、多い。そのせいでコントロールが難しいのだ。しかし、影分身のような多くのチャクラを要する術は、コントロールはそこまで難しくない。拙いチャクラコントロールでも、蛇口を開きっぱなしにするようにチャクラを垂れ流せば術は完成する。分身の場合は、注ぎ込むチャクラが多すぎたのだ。
思考に埋没している間に勝負は終わっていた。
ボロボロの姿になって倒れ伏すミズキ。
その様を酷く冷たい目で見下ろすナルト。手に持つ苦無が月に照らされて、鈍く光っているのが印象的だった。

「……まだ、死んでないのか」

トドメだ、と呟いて首を掻っ切ろうとする。躊躇なく、命を奪い取ろうとする。
殺させるわけにはいかない。イルカは身体に鞭打って、ナルトを羽交い締めにした。

「やめろっ！　ナルトッ！！」
「止めんな！　こいつはイルカ先生を殺そうとしたんだぞっ！」
「ダメだ。ミズキはきっちりと尋問にかけなきゃならない。他の里と結びついている可能性があるからな」
「……わかった」

必死に暴れるナルトだが、理由を聞いて多少気持ちの整理はついたのか。苦無をホルスターに戻すと、思い切り足を振り上げて、ミズキの顔を蹴り飛ばした。
ミズキの美形といえる整った顔立ちは、見る陰もない。歯すら、残っていない。

当然の報いなので何も思いはしないが、これをしたのがナルトだと思うと、複雑な気持ちになる。
だが、どうだろうか。ナルトはイルカが殺されかけたのを見て、キレた。そのために命を懸けた。だから、責めるべきではない。
少しだけしょぼくれたように地面を蹴るナルトを見て、イルカはにっこりとほほ笑んだ。

「それに、ナルト。ちょっと来い。お前に渡したいものがある！」

不思議そうにイルカのことを見上げながら、とてとてとナルトは近づいてくる。
「目、閉じてろ」と言うと、素直にナルトは眼を閉じる。何をされるのだろう、と考えているのが見え見えだ。そわそわとした態度が手に取るようにわかる。
イルカは苦笑しながら、自分の額に手をかける。そして、額につけていたものをナルトの額につけた。

「先生、まだか？」
「もういいぞ」

違和感。
いつもあるものがない感触。
それもそうだろう。イルカが『木の葉の額当て』をつけていないところなど、ナルトは見たことがないのだから。

「卒業……おめでとう」

笑いながらイルカはそう言う。
意味がわからず、自分の額に触れてみた。
再び、違和感。

いつもつけているゴーグルではない。
もぞもぞと触れて行くと、凹んでいる部分があった。そこを指でなぞると……それは……。
「今日は卒業祝いだ。ラーメンおごってやる！」
「……ッ！」
思わず、涙が零れ出た。
しかし……。
「ごめん。先生――俺は受け取る資格なんかねぇよ。先生の期待を裏切って、『禁』の書の力に頼っちまった……」
懺悔するように吐き出された言葉――それを聞いてイルカは、笑みを深くする。
「いいさ。状況が状況だ。仕方ない。それに、お前に助けてもらったのも事実だしな。でも、書を読んだのはバレたら大変だから……二人だけの内緒にしよう」
それなら大丈夫だろ？　と笑いながらイルカは言う。
緩んだ涙腺は決壊し、滂沱の涙が溢れ出てくる。
擦っても擦っても止まらずに、ナルトは顔を隠すようにナルトはイルカの胸元に飛びついた。
「痛い。痛いって！」冗談混じりに言うイルカに遠慮などせず、抱きついた。離れたら泣いているのがバレるから。
「俺、頑張るから！　絶対、先生みたいになるから！　期待しててくれよっ！」

嗚咽混じりの声。震える肩。
全部が全部、イルカにとってはお見通しだ。だが、抱きつかれているのは、ある意味ではイルカにとっても都合が良い。
優秀な生徒が卒業する。そのせいで涙腺が緩んでいる。それが見られなくて済むから。

「あぁ……あぁ、頑張れ。お前なら俺なんか軽く越えられるさ」
「おうっ！」

二人の師弟は眼を擦って、お互いの顔を見る。
目元が真っ赤で、恥ずかしそうににかっと笑う。とてもそっくりだった。

友達

1.

忍者アカデミーの卒業式の日。

卒業生に与えられる木の葉の額当てをつけて、堂々と着席しているナルトは、かなり浮いていた。

気になる。当然、気になっている者もいる。けれど、聞けない。ぴりぴりとした空気を発散しているナルトに気安く声を掛けられるものなどいなかったのだ。机に教本を置いて熟読しているのだ。そこに書かれているのは忍びの在り方について書かれたものだ。“忍はどのような状況においても感情を表に出すべからず。任務を第一とし何ごとにも涙を見せぬ心を持つべし”等の心得が書かれている。

そんなナルトに熱い視線を向ける少女がいた。

絹のような烏の濡れ羽色の髪をオカッパにまとめた、優しさを全面に押し出した内気そうな女の子である。着込んだ白いコートの袖をもじもじといじりながら、ナルトのことを盗み見ている。

ふと、ナルトが女の子の方を見た。女の子は顔を真っ赤にして顔を背けるが、ナルトはじっと見つめている。

異性が苦手だ。あまり触れ合ったことなどない。それなのに、顔を見つめてくるナルトがいる。ドキドキと心臓が脈動し、顔は沸騰するかのように熱い。ぱたぱたと手で顔を扇いでみてもマシにはならない。恥ずかしい。死にたい。そんなことを思いながら、切なげに笑っていると――ナルトが口を開いた。

「ずっと俺のこと見てたみたいだけど、何か用か？」

横顔に突き刺さる熱っぽい視線を気にしないように心がけていたが、いつまでもじろじろと見られていると我慢の限界というものが

出てくる。
声をかけるだけで袖から指だけ出している儚げな女の子が、あたふたと首を振る。口をぱくぱくと開閉して、声を出そうとしているのか。緊張しすぎてか呼吸気味になり、出ているのは息だけである。
落ち着けよ、と呆れたように女の子の肩をぽんと叩くが、ビクゥと女の子は痙攣し、怯えたように慌てて距離を離される。ナルトの繊細な心は少しだけ傷ついた。

「よ、用なんて、別にナルトくんに用があったわけじゃ……っ！」

ぶんぶんと手を振って思い切り否定する。
用がないのに何で見ていたのだろう、とナルトは思うが、それよりも気になることがある。

「何で俺の名前を知ってるんだ。初対面だろ？」

ナルトは女の子のことを知らない。
これには女の子もびっくりして「えっ！？　同じクラスだったよ……？」と言うが、ナルトは首を傾げるばかりだ。いつも授業中などは先生の話に集中していたし、教室内では居心地が悪かったから、休み時間はいつも外でとっていたのだ。昼食などもそうである。

「ごめん、人の顔と名前って覚えられなくてよ。名前、何？」
「え、えと、ヒナタ。日向ヒナタですっ……」

ナルトの顔をじっと見つめながら、ヒナタは尻すぼみになりながらも自己紹介をする。ヒナタの視線に応えるように、ナルトも遠慮なくじろじろとヒナタの顔――だけでなく全身を嘗め回すように見つめる。ちょっと、恥ずかしい。
そんな初心な気持ちはナルトの一言で消えることになるわけだが。

「あぁ日向か。通りで変な目してるわけだ」
「変な目っ！？」

そんなこと初めて言われたよっ！？　とヒナタはかなり傷つく。
確かに白い目は変だと思う。けど、目の前で変と言うのはいかがなものか。生まれつきだから仕方ないではないか。
むくむくと怒りや悲しみなどの負の感情が沸きあがってくるが、にこりとナルトが笑っただけでソレも無くなる。この男、悪気はないのだ。笑顔を見ればわかる。

「俺はうずまきナルト。で、何の用だったんだ？」
「……その、試験落ちたのに何でここにいるのかなぁって」

おずおずと言い出すヒナタは至極申し訳なさそうだ。
対するナルトはひまわりのような元気いっぱいの笑顔。胸を張り、親指で額当てを指して、自信満々だ。

「いろいろあって合格にしてもらえたんだよ。ほら、この額当てを見ろ。これこそが合格の証だろ？」

多少どもりながらも「う、うん」とヒナタは頷く。
沈黙。
話題が尽きたと言わんばかりにヒナタは黙り込み、もう用はないのかな、とナルトは本に視線を落とす。
『忍びの心得　大全』――忍びたるものの心構えを説いたものである。これから自分はプロの下忍になるのだから、そういうものはきっちりは覚えておかねばならない。
集中しながらページをめくっていく。だが、いい加減鬱陶しくなってきた。

まだ用があるのか、ヒナタは俯き気味にナルトのことをガン見しており、本とナルトの顔を往復している。何をそこまで真剣になれるのかがわからないが、とても鬼気迫った顔で自分のことを見てくるヒナタはナルトにとって未知の存在だ。脅威ですらある。

「……何だよ？」と多少震えた声で聞いたしまったのは仕方がないのかもしれない。未知とは恐ろしいものだ。人間関係が希薄どころか、ほとんど皆無のナルトにとっては経験したことがないのである。それなりに可愛らしい女の子に見つめられるなどということは。

「な、何もっ！？」

ヒナタはナルトの顔を見ていた顔を真正面に向きなおし、あたふたと礼儀正しく座ろうと試みる。ちらちらと視線だけを向けてくるのは変わりないが。

「まぁいいけどよ。見られて減るモンもねぇし」

タメ息が出る。

そのとき、教室の扉が大きく音を立てて開かれた。

入ってきたのはイルカである。

「静かにー。こっちを見ろー」と多少間延びした声を発しながらイルカは教壇へと登った。ナルトは本を閉じると、机の下に置いてある鞄に詰め込んで、イルカのほうを見る。

「ごほん」と咳払いをするイルカを着席している卒業生たちは緊張した面持ちで見る。当然だ。これから下忍生活が始まる。そのための説明が始まるのだ。もし大事なことを言われて、それを聞き逃したら？　ただの馬鹿である。

イルカは集中した視線を送ってくる卒業生たちを満足そうに見ると、唐突に厳しい表情を浮かべた。

「今日からめでたく君たちは一人前の忍者になったわけだが……しかし、まだまだ新米の下忍！　本当に大変なのはこれからだっ！」

まだ始まってすらいないのだ。

アカデミーで習うことは本当に基礎の基礎だけ。

体術の基本、忍具の基本、忍術の基本、後は植物などの生態系の基本やサバイバル生活の基本などである。先生たちに守られて、大切に大切に育てられてきた。だが、これからは違う。

もう”一人前”なのだ。

「これからの君たちには里から任務が与えられるわけだが、今後は三人一組（スリーマンセル）の班を作り、各班ごとに一人ずつ上忍の先生がつき、その先生の指導のもとで任務をこなしていくことになる班は、力のバランスが均等になるようこっちで決めた」

「えー！！」と多くの卒業生が抗議の声を漏らすが、ナルトだけは「三人一組か。友達なんかいねぇし、誰でもいいや」と小さく呟いた。隣で聞いていたヒナタは悲しげに顔を伏せるが、ナルトは決して気づかない。

それから生徒たちの名前が呼ばれ、それぞれの班が決まっていく。決まった班のものたちは順番に席を移動する。

まだかな、と自分の名前が呼ばれないことをナルトは心配し始めるが――

「……じゃぁ、七班。春野サクラ、うずまきナルト、うちはサスケ」

呼ばれた！　喜んで立ち上がる。

下では「ナルトかよー！」と悲しむサクラと、「サスケくんだー！」と喜ぶサクラがいた。どちらも同一人物である。

班の決定で一喜一憂する卒業生たちを笑顔でイルカは見ていて教

室を出ようとするが、最後に「午後から上忍の先生たちを紹介するから、それまで解散！」とだけ言って出て行った。
邪魔者がいなくなった瞬間、教室はがやがやと騒ぎ出す。
班が決定されて移動した際、ナルトの隣はサクラとサスケになった。

「一緒の班は――うちはの奴か」
「フン、せいぜい足を引っ張るなよ」
「……善処させてもらいますよ」

桃色の髪を横に分けたデコ丸出しの女の子が春野サクラで、逆立つ黒髪に整った顔立ちのうちはサスケだ。何故かはわからないが、サクラは終始ナルトのことを睨みつけており、ナルトは心底辟易としていた。

「ナルトー！　あんたサスケくんに対して偉そうなのよ！」

烈火のごとく怒り狂う乙女は恐ろしい。
思わず本音が出てしまったのも無理はないというもの。
ナルトは皮肉気に口角を吊り上げながら、顔を近づけて叫んでくるサクラの額を指で突くと、耳元で優しく囁いた。

「うるせぇから黙ってろ、デコッパゲ」

一瞬何を言われたのか理解できず、距離を離したナルトのことを呆けた顔で見てしまった。
うるせぇから黙ってろ……デコッパゲ。デコ――パゲ。ハゲ。
ハゲッ！？
理解したときには怒りが限界を超えて噴き上がる。
机に拳を叩きつけて、ナルトのジャンパーの襟元へと手を伸ばす。

「デコッパゲ！？　喧嘩売ってんの！？」
「買ってくれるならいくらでも売るぜ？　大安売りのバーゲンセールだ」

襟元に向かった手は簡単に掴まれて、ぎりぎりと力を加えられていく。
凄まじい力だ。
サクラの細い腕は引き千切れそうなほどの苦痛に襲われる。顔を顰め、腰から力が抜けていき、罵声を吐く力も消えていく。
呻くように息を吐き出しながら、懇願するようにナルトのことを見上げた。恐ろしく、冷たい目だった。敵を見るような、そんな視線。
「つまんねぇの」と吐き捨てると、ナルトはサクラの手を離し、教室の扉へと向かって歩き出す。

「チキンのくせに喧嘩売ってくんなよ。馬鹿が」

そんな言葉を残して、部屋から出る。
強引に閉じられた扉は大きな音をたてて、耳障りなそれは気分を害するもの。
イライラする。
この気持ちを伝えようと意中の人であるサスケに向き直って――

「何よっ！　あいつ……偉そうにっ！　サスケくんどう思う！？って、いないー！」

気づけば教室には一人きりだった。

◆

晴れ渡る空の中、太陽は無駄に元気そうだ。
さんさんと照りつける陽光が暑い。とても、暑い。だから失敗してしまうのだろう。湯だった頭だから仕方ない。
そんな言い訳をしながら、ナルトはアカデミーの屋上で身悶えていた。

「馬鹿だろ、俺……喧嘩売ってどうすんだ。これから仲間になるってのによ……」

友達が欲しかったら相手がして欲しいことを考えろ、とイルカに言われたばかりだ。それなのにナルトはつまらぬ失敗を犯してしまった。
喧嘩を売られる。あげく買う。女に対して力を行使する。考えうる限りで最悪だと言っていい。
これからサクラとギスギスとした関係を送らなければならないのかと思うと逃げ出したくなる。もう、一人は嫌だ。誰でもいいから友達がほしい。

「くそっ、墓穴掘ってよ。イルカ先生に言われたろ。『友達になってください』だ」

呟いた言葉は誰にも届くはずのないものだった。

「何ぼやいてんだ？」

それなのに何故か返答が来た。
急いで飛び起きると――

「うちはサスケ！？」

「いきなり人のことフルネームで呼ぶんじゃねぇよ。ウスラトンカチ」

いきなりウスラトンカチなどと罵倒してくるサスケの姿があった。
それが激しくナルトをむかつかせた。
サスケは優等生だ。才能に溢れている。
それが妬ましい――いや、関係ない。ただ、羨ましいのだ。才能などではなく、常に人に囲まれているという環境が。
自覚はある。けれども、嫉妬はなくならない。
制御できない感情が心の防波堤をあっさりと決壊させる。

「んだよ、喧嘩売ってんのか？　俺は非常に虫の居所が悪いんだ。大特価で買い取ってやるよ」
「別に、そんなつもりはねぇよ」

サスケは手にサンドイッチを持ち、頬張りながら近づいてくる。
座り込んでいるナルトの隣へ勢いよく座り込むと、サンドイッチを大きく齧った。

「勝手に座るな」
「別にお前の家ってわけでもないのに命令するな」

事実だ。けれど、神経が逆撫でされたような気分に陥る。
むかつく。とにかくむかつく。殴りたい。そんな気持ちがふつふつと湧いてくる。
ちらりとサスケのほうを見た。
サスケはサンドイッチを食べ終わっており、空を見上げていた。
ナルトに関心を示すわけでもなく、ただ空を――

「友達、いないのか？」

唐突に、そんなことを言われる。
心臓が爆発するかと思った。
「……っ！　いきなり核心つくんじゃねーよ！　お前はエスパーか！？」
「聞こえたんだよ」
聞こえたとは何だろう……考える意味もない。
間違いなく『友達がほしい』発言だろう。屋上で寝転んでいたせいか、それとも陽気にやられたのか、油断していたからこそ漏れ出た本音を、不覚にも聞かれてしまった。しかも、内容が幼稚と来たものだ。
恥ずかしさがこみ上げてくる。
「……いねぇよ。悪いか！」
だから、声を張り上げて。
「気分悪ぃ。俺は行くぜ」
「あ、おい。そろそろ時間……」
引き止める声も無視して、ナルトは屋上から飛び降りた。
（時間なんて――知るかっ！）
とにかくこの場から離れたかったのだ。
◆

アカデミーの広場にあるベンチに座り込みながら、桃色の髪をわしゃわしゃと掻き毟って、乙女は憤慨していた。

「あのクソナルトォォォッ！　人の気にしてることを――デコッパゲだって！？　デコ……ハゲ？　ハゲてないわよ！　畜生！！」

サクラはデコの面積が広いことを気にしている。とても、気にしている。

思春期真っ盛りのこの年齢では、やはり見た目は気にしてしまうものなのだ。しかも、意中の人であるサスケの目の前での罵倒である。信じられない。ナルトがいくら鈍感だからって、あれほどサスケにアピールしているサクラの姿を見たことがあるはずだ。それなのに、それなのに、それなのに――

「ムキャーーッッ！」

思い出しただけでもイラつく。

忍術以外の成績が良いのも知っているし、授業態度だって真面目、他のアカデミー生よりもよほど好感が持てる。格好イイ奴、と思っていた。それなのに、サスケに対してあの口ぶり。嫌味な笑顔を浮かべて、あの言葉遣い。ありえない。サスケくんに対してっ！

と、いったことでサクラはとてもとても怒っていた。

ベンチに座って、ダンダンと地団太を踏んでいる。端から見れば、清楚な女とはかけ離れた――百年の恋も冷めるような醜態でしかないのだが……

「――ナルト見なかったか？」

声変わりの終わりきっていない、耳心地の良い声。

地団太を踏むのをやめ、苛立った顰めた顔を即座に修正し、笑顔

を浮かべる。完璧だ、と考えてから振り向くとそこには王子様がいた。
切れ長の黒瞳はサクラの心を掴んで話さない。あらゆる授業でトップの――まさにエリートという言葉が相応しい少年、うちはサスケ。ナルトとは比較にならないほどの格好良さだ。心臓が、高鳴る。ナルトのことじゃなければもっと嬉しかったのに……。

「あ、サスケくん……ナルトなら見てないけど」

ってか、あんなやつ興味ないしー、というのがサクラの本音である。

「そろそろ集合の時間だ。ナルトのヤローを教室に連れていかないと」
「あんな奴、放っておけばいいじゃない！　いつも授業の進行遅らせるしさ。忍術なんかてんで使えなくて、本当に迷惑！　あげくに、あげくにデコッパゲって！　ふざけんなってのよ！」

苛立っているせいか、腹の中に押し込めた怒りが口から吐き出される。
そうだ。
ナルトは忍術の授業のとき、いつも失敗して授業を遅らせた。いっそいなければいいのに、と何度思ったことか数え切れない。態度はでかいし、よくクラスメートと喧嘩していた。なんだかんだで勝っていたが、たまに大勢にやられてボコボコにされていた気もする。
協調性がないのだ。致命的に。だから、目の敵にされる。それを自覚していないこともわかる。
つまり――

「やっぱりまともな育ち方してないからよ、アイツ……ホラ、あい

つ両親いないじゃない！？」

常識を教えてくれる厳しい親がいない。なんと羨ましいことか。

「いつも一人でワガママし放題！　私なんかそんなことしたら親に怒られちゃうけどさ。いーわねー、ホラ！　一人ってさ！　ガミガミ親に言われることもないしさ！　だからあんなふうに人の気にしてることを言うのよ。本当サイアク！！」

夜中にお菓子を食べても怒られない。

宿題などをしろと言われないし、風呂の時間を決められたりも、門限などもないのだろう。羨ましいっ！

そんな奔放な生活をしているから、あんなに思いやりのない子なのだ。

サクラの舌鋒は止まらない。黙って聞いているサスケが、機嫌が悪くなっていくのにも気付かず、ただただ罵倒を続ける。

「……孤独」

ぽつり、と吐き出された言葉。

何を言ったのか聞き取れず「え？」とサクラは聞き返してしまう。

「親に叱られて悲しいなんてレベルじゃねーぞ」

怒っている。

サスケは正しく、サクラを睨みつけて、怒っていた。

何故怒られているのかわからない。何が逆鱗に触れたのか――あぁ、ナルトのことか。そして、サスケも両親がいないことを思い出す。地雷を踏んだ。

「お前、うざいよ」

好きな人に言われたら、とても傷つく。

確かにうざかったかもしれない。私が悪かったかもしれない。

肩を怒らせながら歩いていくサスケの背中を追いながら、サクラは少し反省した。

◆

教室の中、うずまきナルトは目的もなくうろついていた。

周囲にいる卒業生たちが鬱陶しげにナルトのことを見ているが、気にした素振りもなく、時計と扉を交互に見ながら、深い深いため息をついていた。

「ど、どうしたの？」

おずおずと聞いてくるヒナタのことなど眼中に入れず、再び溜め息。

無視された！　と悲しみに打ち震えるヒナタは自分の席へと戻って行くと、突っ伏した。後ろに座るポニーテールの金髪の少女――山中イノが「あんた頑張ったわよ」と慰めるも、突っ伏したまま悲しげに肩を震わせている。こりゃだめだ、と周囲の卒業生たちも嘆息した。

本当のところは、ナルトは考え事をしていて、ヒナタに気付かなかったのだ。

考えていた内容は稚拙ではあるが、ナルトにとってはとても重要なことであり、経験したことのない無理難題に等しきことである。

（デコッパゲは言いすぎだよな。いやでも、突っかかられたのは俺だし。なんで俺が謝らなきゃいけねーんだ？）

サクラに悪口を言ったことを、とても後悔しているのだ。
けれど、自分が悪いとも思わない。悪口を言ったのは確かに悪いが突っかかってきたのはサクラが先だ。それならばサクラから謝るのが筋ではなかろうか。しかし、女性の外見を馬鹿にするのは男としてどうなのだろうか。かなり最低なことではないのだろうか。ナルトが今まで読んだ小説の中でそういうことが書かれていた気がする。
しかし――プライドが許さない。
何故、頭を下げねばならない。強要される理由もない。
それでも、本音は違う。
ナルトは謝りたい、と思っていた。
時計の針が集合時間の五分前を指したとき、事態は激変する。
扉が開く音とともに、サクラとサスケが教室に入ってきたのだ。
ナルトとサクラの目が合う。サクラは申し訳なさそうに顔を伏せる。これは罪悪感から来る行動であったが、ナルトは”嫌われた”と考えた。
それからの行動は実に速い。即座に頭を下げる――どころか床に膝をつけ、更には額もつけてしまった。
「ごめん、春野サクラ！　さすがに言い過ぎた！　謝る、許せ！！」
心からの謝罪である。これから仲間になる女の子に嫌われるなど、プライドを捨てるよりも嫌だ。
その行動にサクラは飛びあがりそうになるほど驚き「ナ、ナルト？　なんで土下座？」と呟いてしまう。予想外すぎる。そもそも謝ってくるなどとは思ってなかったし、これから気まずいなぁ、とひそかにサクラは考えていたのだ。それなのに、土下座。誠心誠意の謝罪。どう対応すればいいのかわからず、混乱してしまう。
サスケも同じのようで、むしろ教室にいる卒業生の大半が同じの

ようで、みんな目が点になっていた。「ナルトはサクラに何をしたのだろう」と小声で話しあっている。「土下座するほどだし……」と誰かが呟いた瞬間、「とりあえず土下座やめて！」と叫んでしまった。

しかし、ナルトは首を振る。

「考えてみたんだけど、俺が悪かった。女の子の外見を罵るなんて最低だ。本当に悪かった。ごめんな」

「い、いいわよ。私も言いすぎたし……だから、土下座やめてっ！」

「許してくれるのか？」

初めて顔を上げたナルトは、懇願するようにサクラのことを見上げている。

さっきまで怒ったり、罪悪感を感じたりしていたことが馬鹿らしくなる。こいつ、馬鹿だ。馬鹿のことを真面目に考えることほど時間の無駄はない。それに、馬鹿だけどイイ奴だ。

うん、とサクラは許すことを伝えると、ナルトは飛び起きて、サクラの前に立った。　ひとしきり咳払いをして、深呼吸を始める。何がやりたいのだろう、と教室のみんながナルトを注目するが、その行動は斜め上を行くものだった。

「じゃぁ、ごほん。『友達になってください』」

「……はぁ！？」

漫才のように見えるこの光景。

サスケはとうとう吹き出した。

「――プ、ハハ、アハハハハッッ！」

「な、なんで笑ってるのよ、サスケくん！」

「で、どうなんだ」

「わ、わけわかんないんだけど、何で友達？」
「欲しいからに決まってるだろ」
決まっているのか、とサクラは疑問を持つが――ナルトのアカデミー時代を思い出すと、納得する。
（そういえば、アカデミーで誰かと一緒に笑ってる姿って見たことないわね……）
ずっと、一人だった。もしかして――
「友達、いないの？」
「……恥ずかしながら、いない」
胸を張りながら言う言葉ではない。
「仕方ないわね。じゃあ、このサクラちゃんがなってあげるわよっ！　サスケくんは？」
「遠慮しとく」と苦笑しながら答えるサスケに「笑うだけ笑って遠慮かよっ！」とナルトはツッコミを入れる。
いきなり喧嘩もしたけれど、なんとか上手くやっていけそうだ、とサクラは思う。サスケはどうなのか――
「そのうちな」
笑いながら言うその言葉に、嫌そうな雰囲気はなかった。

下忍試験・その壱

2.

秒針が時を刻む音が教室にこだまする。それがたまらなくストレスを溜める原因となることを、ナルトはこの日、初めて知った。

集合時間は午後一時――だったはずなのだが、時計の針が指しているのは三時二十五分。遅れているなんていう生易しいものではなく、もはや放置されているのではないかと疑うほどの遅延ぶりだ。

いらいらが止まらない。ナルトはいつだってきっちりやることを重んじる。規律を守れない奴が一番嫌いだ。それなのに、それなのに、それなのに！

机の下で小刻みに震える脚は貧乏ゆすり。不機嫌な顔で脚を揺らすその様は見ていて不愉快だ。サクラは顔を顰めて、ナルトを睨む。

「苛立ってるのはわかるけど、うざいから止めて」

ぴくりと反応すると、ナルトは申し訳なさそうな顔になって脚を止める。

再び秒針の音。

いらいらいらいらいらいらいらいら。

ナルトの堪忍袋は限界をとうに超えていた。

「あー！　いつまで待たせるんだ！　忍者とかなんとかいう以前に！　人として！　時間を守れないのはどういうことなんだ！　最低限のルールだろがっ！？」

「他の班はみんな行っちゃったしね。遅刻かな？　教師ともあろうものが初日から？」

ガタンと椅子を倒して立ち上がるなり、叫んだ言葉はこれだ。
サクラとサスケは大きく頷く。そんなことも守れないやつの下に付くことになるのかと思うと心底うんざりしてくる。
「忘れられてるとかないよね……」と怯えるようにサクラは言うが、「フン、黙って待ってろ」とサスケが吐き捨てる。腕を組んで、机に脚を乗せながらのその言葉は多分に怒りを含んでいた。
こっそりとサスケも貧乏ゆすりをしているのだが、それを指摘するものは誰もいない。

――チクタク、チクタク

場を沈黙が満たすたびに、耳に入ってくる秒針の雑音。
後何時間待てばいいのだろう。太陽がそろそろ傾きかけている。本当に忘れ去られているのではないだろうか。
三人とも妙に焦りながら、時計を極力見ないように、ひたすら机の上を見つめていたとき、扉の開く音が聞こえた。

「いやぁ、ごめんごめん。来る前に腹痛がすごくてねー」

入ってきたのは白髪の男。黒で統一された忍衣装の上に、迷彩色のジャケットを着た、片目を額当てで隠していて、さらには鼻から下もマスクで覆っていて顔のほとんどが見えない――いかにも怪しげな男だ。
盛大に遅刻したにも関わらず、全く悪びれた様子はない。あげくに言い訳をしながら入ってくる様は、三人の神経を逆撫でするには十分だ。
自然と表情が引き攣るというもの。ナルトにいたっては吊り上がった口角がひくひくと痙攣している。
しかし、一応先生になる相手に失礼を働くわけにはいかない。三人とも大きく深呼吸をすると、少しだけ嫌味をするだけに留めるこ

とを視線で確認しあった。
「先生……凄く健康そうに見えるんですけど」
「顔色はいいな」
「これで本当に上忍か？　頼りなさそうな奴だな」
小さく呟く。だが、きっちりと相手の耳に届くように計算された小声。
聞き取った上忍は思い切り良い笑顔を浮かべると――といっても片目しか見えないのだが――とても爽やかな声で言い放った。
「んー……なんて言うのかな。お前らの第一印象は――嫌いだ！」
こっちの台詞だよ、と思ったのは誰だろう。
下忍の引き攣った笑みはどんよりと沈んでいく。

◆

「そうだな。まずは自己紹介をしてもらおう」
七班を引き連れてアカデミーの屋上に着いたときに発した怪しげな男の第一声はこれである。
初対面なのだから自己紹介をするのは当然と言えば当然だが、何を言えばいいのかわからない。
サクラは手を上げると「うん、桃色の髪の君。質問ならどうぞ」と言われ、怪訝そうな表情を浮かべながら、おずおずと言葉を紡いだ。
「……どんなこと言えばいいの？」
「そりゃあ好きなもの、嫌いなもの。将来の夢とか趣味とか……ま

！　そんなのだ」

当たり前のこと聞くなよ、と言った風情の怪しげな男。

もともと苛立っているナルトは、さらに怒りとなる要素を贈呈されて、抗議をする。

「まずは自分からやるのが筋だろ？」

「そうね。見た目ちょっとあやしいし」

「かなり、だろ……」

七班は結成されたばかりとは思えないほどのチームワークを持って、怪しげな男の評価を言う。

顔は見えないし、名前もわからないし、遅刻はしてくるし、はっきり言って評価はかなり最低だ。できるものなら別の上忍に変わってほしいと全員が思っていた。

その意味を的確に把握しているのか、それともとことんまでに空気が読めないのか。怪しげな男は気分を害した様子はなく、「あぁ、俺か？」と自己紹介を始める。

「俺は”はたけカカシ”って名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！　将来の夢って言われてもなぁ……ま！　趣味は色々だ」

「ねぇ、結局わかったのって名前だけじゃない……？」

サクラの言葉に強く頷く二人。はたけカカシは自分を全く紹介していなかった。自分の情報は決して他人に与えない。情報を大事に扱う忍者の鏡だ、とナルトは無理やり納得した。

「じゃ、次はお前らだ。右から順に……」

座っている順番は右からナルト、サクラ、サスケだ。

「俺か。俺はうずまきナルト。好きなものは――何だろうな。思いつかない。嫌いなもの――というより嫌いなことは見下されること。将来の夢はイルカ先生みたいに立派な教師になることだ」

特に隠す理由もないので全て正直に答えたところ、サクラとサスケが驚いたふうにナルトのことを見ている。「何かおかしいのかよ」とじろりと見返すが、「へぇ、ナルトって教師になりたいんだ？意外～」「確かに意外だな」と両名に言われ、不思議に思う。

「そうか？　教え育てるってのは人生において最大の娯楽だと思うぞ」

「へぇ、きっとなれるわよ。頑張りなさいよ」

へへへ、と恥ずかしそうに照れるナルト。

何だかんだで生徒に言ったことはなかったので、こういう夢を語るのは初体験である。ちょっと恥ずかしいな、と少し顔を伏せる。

「趣味は――修行かな。できないことをできるようになるってのは楽しい」

「勤勉な奴……」

カカシの吐いた言葉は意図的に無視して、ナルトは自己紹介を終了した。

はい次、と指名されたのはサスケ。フン、と鼻息を鳴らすと、表情を隠すように顔の前で手を組んだ。

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが、好きなものは別にない。それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが――野望はある！　一族の復興と……」

瞳に宿るのは漆黒の焔。

「――ある男を必ず殺すことだ」

どれほどの憎しみを湛えているのか。堪えきれない憤怒は殺気として発散される。

先日にミズキの本物の殺気を受けた身であるナルトからすればそよ風のようなものではあるが、それでも、自分と同年代のサスケがそれほどの怒りを孕んでいることに驚きを覚える。

何を奪われたらここまで恨めるのか、わからない。

「よし。じゃ、最後は女の子」

気軽なカカシの声に殺気は霧散する。

すると――

「私は春野サクラ。好きなものはぁ……てゆーかぁ……好きな人は……えーとぉ、将来の夢も言っちゃおうかなぁ。キャー！！」

終始ちらちらとサスケのことを見るサクラ。ほんのりと頬を染めるサスケが可愛らしい。照れているのか、とナルトは冷静に分析する。ポーカーフェイスを装おうとしているのに、できていないあたりが面白い。

くつくつと笑うナルトのことをサスケは睨みつけるが、それがより一層笑える。

「嫌いなものは特にないです。あ、強いて言えば空気読めない奴です」

サクラがちらっと見たのはナルトだ。サスケのことを馬鹿にして笑っていることが許せないのだろう。
「俺？」と少し動揺しているナルトを見て、サスケは少しだけ溜飲が下がったのか……「このウスラトンカチが」と馬鹿にしている。下らないことで張り合っているあたり、精神年齢は同じなのかもしれない。

「趣味はぁ……」

まだサスケに視線を向け続けるサクラ。いい加減鬱陶しくなってきたのか、サスケはぱたぱたと自分の顔を扇ぎ始める。

（この年齢の女の子は忍術より恋愛だな……）

呆れたようにカカシはタメ息を吐くと、ぱんぱんと手を叩く。

「よし！　自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ」

『任務』という言葉に、七班の新米たちは敏感に反応した。
一人は目を光らせて、一人は歪んだ笑みを浮かべて、一人は緊張した面持ちだ。
その光景を見下ろすカカシは、にやりと笑う。

「まずはこの四人だけである任務をやる。サバイバル演習だ」

サバイバル演習――要するに森や山などで生き残るための練習だ。
気配を消すことから始め、敵を見つけるための索敵、または敵から逃げ切る遁術の修練、果てには食べられる植物の学習などいろいろある。それらは全てアカデミーで習うものだが――

「何で任務で演習やんのよ？　演習なら忍者学校でさんざんやったわよ！」

当然、文句は出る。

仮にもアカデミーを卒業する実力はあるのだ。それなのに、また授業の復習みたいなことをさせられる。舐められている、侮られている、そう思っても仕方のないこと。

だが、カカシは淡々と言う。

「相手は俺だが、ただの演習じゃない」

「どんな演習なんだ？」

ナルトは手を上げて聞くが、カカシは答えない。

くつくつと笑うだけで、口を開こうとはしない。不気味なことこの上なかった。

我慢できなくなったのか――サクラが「ちょっと！　何がおかしいのよ、先生」と言うが、笑い声は途切れない。

「いや……ま！　ただな、俺がこれ言ったらお前ら絶対引くから」

「引かねーよ。そこらのヘタレと一緒にすんな」

ナルトの言葉に答えるように、カカシは言う。

「卒業生二十七名中、下忍と認められるのはわずか九名。残り十八名はアカデミーへ戻される。この演習は脱落率六十六パーセントの超難関テストだ」

驚きのあまり硬直する二人。

だが、ナルトだけはのほほんと聞いていた。

それも当然である。この中で二度留年したナルトは、そういう末

路を辿った人間を何人も見ている。

「あー、だから卒業したのに離れの教習所で修行してる人が多かったのか。下忍になれなかったわけね」

「……君、引かないね」

「先生！　じゃあなんで卒業試験なんかするんですか！？」

湧き上がる疑問の声に対するは端的な答え。

曰く、下忍になる可能性のあるものを選抜するだけ。

ふざけんな！　とサクラは思うだけに留めず、叫んでしまうが、カカシはどこ吹く風。

「とにかく、明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。それと朝飯は抜いて来い……吐くぞ」

七班の鋭い視線を受け流しながら、腰に吊るしたポーチの中からプリントを取り出すと、全員に配っていく。

ナルトは思う。

サクラは思う。

サスケは思う。

（落ちてたまるか）

最後まで飄々とした態度をとるカカシに対しての反発心もある。だが、それ以上に――下忍になると決めた以上、それ以外の道は選べないのだ。

まぁ、「この試験に落ちたらサスケくんと離れ離れになっちゃう。これは愛の試験だわ！」と考えている女の子は一人いるが――

「詳しいことはプリントに書いておいたから。明日遅れて来ないよーに」
「どの口が言うんだよ」
こうしてサバイバル演習という課題を与えられた七班は、解散した。
ナルトはこの日、忍具の手入れに余念がなかったのは言うまでもない。

◆

サバイバル演習場は数多くあるが、集合の場所とされたところは『森』と言う他ない場所であった。
危険な動物などがあまりいない、基礎的な――初心者用の演習場である。毒物などはあまりなく、食料を判別するのもあまり苦労しないところ。
そこの入り口の開けた場所で七班に所属するナルト、サスケ、サクラの三人は集合していたのだが、前回と同じく、教師の姿は一向に現れない。
ナルトはポケットの中で綺麗に折り畳まれたプリントを取り出すと、集合時間を再確認した。
八時、と書かれている。
腕時計を確認した。デジタルの数字で表示されるそれは朝のニュース番組に表示される標準時間に合わせたばかりのもの。それなのに、『ＡＭ０９：４８』と表示されている。
遅刻だ。正しく遅刻だ。
うんざりとしたようにナルトはタメ息を吐く。残り二人も同様に、深い深いため息を吐いた。
怒る気力も残っていない。
人間というのは怒りすぎると無気力になるものなのだ。

うなだれて座り込むナルトにかけられる言葉はなく、サスケはぼんやりと空を見ていて、サクラは木にもたれ掛かりながら小説を読んでいた。
朝の陽光が世界を照らし、実に日向ぼっこ日和である。ナルトは地面に生えている草など気にせずに寝転がった。それを嫌そうに見つめるサクラの視線があるが、全く気にしない。
朝日に眩む目を細めながら、ぼけっとしていた。
それから数分後――

「やー諸君、おはよう！」

悪びれることなく、はたけカカシは現れた。

「やっぱり遅刻かよ……」
「早く来るんじゃなかった……」

ナルトとサクラは嫌味を漏らすが、カカシには届かないようだ。にこにこと機嫌が良さそうに片目だけで笑顔を表現しながら、ポーチから目覚まし時計を取り出す。
「よし、十二時セット」と切り株の上に置かれた。意味がわからず、七班の三人は全員疑問符を浮かべる。
すると、カカシがごそごそとポーチから新たにものを取り出した。それは鈴だ。風に揺られて凛と鳴る音は綺麗なもの。風流ですらある。カカシが持っていなかったとすればその音色に眠気を誘われていたであろう、とナルトはこっそり考えた。

「ここに鈴が二つある。これを俺から昼までに奪い取ることが課題だ。もし昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き！　あの丸太に縛り付けた上で、目の前で俺が弁当食うから」

沈黙。
このとき、三人は全く同じことを考えていた。
（朝飯食うなってそういうことだったのね……）
腹が鳴る。
育ち盛りの年齢であるナルトやサスケ、サクラにとって空腹とは大敵だ。力が、入らなくなる。そんな過酷なことを要求するカカシが鬼のように見えた。胡散臭い鬼、絵にならない。
「鈴は一人一つでいい。二つしかないから――必然的に一人が丸太行きになる」
カカシはサバイバル演習の説明を続ける。
「で！　鈴を取れない奴は任務失敗ってことで失格だ。つまり、この中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ。手裏剣を使ってもいいぞ。俺を殺すつもりで来ないと取れないからな」
「でも、危ないわよ。先生！」
「仮にも上忍なんだから下忍の手裏剣なんか喰らわないだろ。喰らったらそいつはそこまでのことだったってことだ。そうだろ、先生？」
「その通り！　よくわかってるねぇ」
ナルトの言葉をカカシは肯定する。
そもそも下忍に殺されるような上忍がいるわけがないのだ。仮にいたとしても、そんな奴に上忍の任務がこなせるはずがない。死んだほうが里のためだ。
「ところで、質問いいか？」

いいよ、とカカシは言う。
ナルトはこの時点で不思議に思っていたことがあったのだ。
スリーマンセルということで組まれた卒業生。それなのに必ず一人は落ちるという。それは、おかしい。上忍と合わせて、木の葉の基本スタイルであるフォーマンセルが組めない。この課題は致命的に矛盾している。
それに、仲間割れを起こさせるために作られたような課題を疑問に思える。得をすることがないのだ。
だが、それは保留する。それは試験中に考えればいいこと。まず確認すべきことは一つだ。

「他の班でも同じような課題をしてるとすれば、他の班で合格した奴が新たに七班に加わるってことか？」
「……そうなるね」

なるほど、とナルトは頷く。
そして、少しだけ困ったような表情を浮かべる。

「せっかく二人と友達になれたんだ。できれば一緒の班になりたいんだが……」

素直すぎる言葉にサスケとサクラは少しだけ、笑う。
ナルトにとって『友達』という言葉はとても大事なものだ。他のなにものにも変えられない。やっと手に入れられたもの。それを手放す気はない。しかし、試験では絶対に引き剥がされる。
納得できない。
その言葉を気にいらないのか、カカシは笑う。

「友達失いたくないから任務できないよーってか？　けっこうなこ

とで。そんなんじゃ教師にすらなれないだろうな」

笑うと言っても、それは嘲笑の類だ。

「安い挑発だな」とナルトは言い返すが、拳に力が入っているのがわかる。怒っている。

お互いに満面の笑顔のやり取り。

サクラは内心ドキドキしながら経緯を見守っていた。

「アカデミーで習ったのか？　その下らない受け答えは。授業を担当した教師の力量が知れるな。随分と、つまらない。程度が知れる」

ナルトの顔が、鬼のような形相に変わる。

地雷だ。

それは恩師であるイルカに対する侮辱。ナルトの目標を穢す言葉。

看過できるほど――ナルトは大人ではないし、冷めてもいない。

殺気を撒き散らす。

太腿につけられたホルスターから苦無を引き抜き、振り上げる。

一連の動作は無駄のない、流麗そのもの。教本に載ってもおかしくないほどの、日々の鍛錬による賜物。

だが、肝心の投擲に入ったとき、その動きは止められた。

「そうあわてんなよ。まだスタートは言ってないだろ」

「うそ……！　まるで見えなかった」

「これが……上忍か」

サクラとサスケが驚くのも無理はない。

目に写らない圧倒的な速度。

それはまさに――疾風。

気づけばナルトの後ろに立ち、苦無を握る手を押さえていた。それほどまでの神業。

だが、驚いていない奴が一人いる。
ナルトだ。
口の端を吊り上げながら、好戦的に笑っている。
「悪いな。俺の中ではもうスタートだ」
このとき、カカシは気づく。苦無の柄に巻きついているものに――
（起爆札ッ……！？）
耳を劈くほどの轟音。
近くで爆発した余波でサクラとサスケの視界は白く染まる。
見えない視界の中では爆煙が巻き起こり、状況がわからない。
カカシはどうなった。
「ナルト！？」
サクラは叫ぶ。
そんなとき、地面を踏みしめる音が確かに聞こえた。
「どうだ。つまらない教師に育てられた補欠合格の卒業生の実力は？」
吐く言葉は挑発的なもの。不敵な笑み。
現れたのはナルトだった。
どうやったのかはわからないが、汚れ一つない綺麗な格好で、草陰から歩き出してくる姿は、サクラの女心をくすぐった。
かっこいい、と思ってしまった。
だが――

「もう一度言う。スタートはまだ言ってないだろ？」
「なっ……！？」
ナルトの後ろには、胡散臭い男が欠伸混じりに立っていた。
学習能力の低い子供に対し、呆れるように注意する様は、余裕を窺わせる。
「でも、ま！　俺を殺るつもりで来る気になったようだな。やっと俺を認めてくれたかな？」
さきほどまでのふざけた態度ではない。
「ククク……なんだかな。やっとお前らを好きになれそうだ」
飄々とした昼行灯の姿から、ようやく本当の姿を出してきた。
上忍。
木の葉を支える――選りすぐりのエリート。
下忍などとは比べることもおこがましいほどの戦力差を保有している。
サクラは彼我の力の差に怯える。
サスケは強者に挑戦できる幸運を笑う。
「俺は、嫌いだ。イルカ先生を馬鹿にしたこと、絶対に撤回させてやる……ッ！」
ナルトは侮辱された恨みをぶつけるため、怒る。
「じゃ、始めるぞ。よーい」
風が、吹いた。

「スタート！！」

こうして木の葉の忍は試験に挑む。

”一人前”と認められるために……。

下忍試験・その弐

3.

サバイバル演習が始まって十分。
ナルトは森の中に身を隠した後、分析していた。
カカシの戦闘能力は未知数。
わかっていることは、少なくとも真正面から戦ったら負けるということ。
遠距離戦はどうだろうか。
忍具の扱いなら多少の自信はある。だが、目に写らない速度で動くことができるカカシに当てることができるか？　答えは『ＮＯ』だ。突然カカシの足元で地割れが起こって身動きとれなくなるような状況にでもならない限り当てることはできない。かなり楽観的に見積もっても、それくらいの実力差はある。
近距離を交えての中距離戦闘によるヒットアンドアウェイ。
答えはやはり『ＮＯ』だ。近距離になった瞬間にあっさりとくたばる自分の姿しか思いつかない。そもそも中距離だとあっさりと距離を詰められる恐れがある。あまりにもリスクが高い。
反則だ。
考えれば考えるほどに”一人では”勝ち目がないことがわかる。
自分には才能がない。忍術に置いても、体術においても、天稟といえるものはない。
サスケのように体術や忍術に秀でてはいない。
サクラのように座学などの知識があるわけではない。
ならば、何がある。
自分の持ち駒を考える。
圧倒的優位に立っているものといえば【多重影分身】くらいだ。
それと、忍具の扱い。その習熟度。それだけは誰にも負ける気がし

ない。
嗤う。
視線の先にいるのは『イチャイチャバラダイス』などという十八禁指定されている如何わしい冊子を読むカカシの姿。にやにやと口元を緩ませているのであろうマスクの下を想像するだけで吐き気がする。こんな奴に、夢を否定され、イルカを侮辱された。
許せるものか。

（絶対に、潰してやる）

そのための戦術は練った。伏線も張った。
けれど、成功率はかなり低い。だけど、このまま無為に時間を過ごしていても、決定的な隙を見せてくれるとは思えない。あんなナリでもカカシは上忍だ。下忍にすらなれていない自分では、きっと隙を見つけたとしても上手く攻撃を加えることはできないだろう。
ならば、意外性。
絶対にしないであろう、と敵に思われるほどの愚策を敢えて使う。

「クソ教師――勝負だ」

だからこそ、ナルトは隠れていた木の上から飛び降りて、カカシの前に降り立った。

◆

「あのさァ。お前ちっとズレとるのぉ」

その言葉にサスケは激しく同意した。
少し離れた草むらに隠れながらカカシの動向を観察していたのだが、突然ナルトがカカシに対して勝負を挑んだのだ。

手には苦無を持ち、さっきと同じように起爆札が巻かれている。
二度目。通じるはずがない。
アカデミー内でのナルトの行動を思い出す限り、どうしてもそんな馬鹿なことをするとは思えない。しかし、さきほど怒っていた。イルカを侮辱されて怒っていたのは本気のもの。憎悪に近いものがあった。だからこそ、冷静さを欠いているとも考えられる。
だが――

（本当に――ただの馬鹿なのか？）

疑問符がつく。
そんなとき、背に何かが触れた。
振り返ると、そこには眼下でカカシに挑んでいるはずの奴がいる。
何故自分が隠れている場所を察知できたのか、それに何故そいつが複数いるのかがわからないが、小声で話された言葉は承服しかねること。

「俺は、一人でやる」

そうか、とだけ言うと人影は森の中へ身を隠す。
どういう原理で複数いるのかわからない。おそらく高等忍術の――サスケの知らない類のものだろう。

「面白くなってきやがった」

拳に力が入る。
サスケは心から歓喜していた。
強敵の出現に、何よりも――未知の忍術を扱う仲間の姿に。

◆

風が吹き荒れる。
対峙するのは長身の男と小柄の少年。
障害物のない、開けた場所ではお互いに視界を遮るものはなく、ナルトの眼光はカカシをきっちりと捉えていた。

「ズレてるのはお前の体内時計だ。時間すら守れないクソ野郎ッ！」
「ま！　否定はしないけどね。じゃあ、そうだなぁ。忍戦術の心得。体術！！　を教えてやる」

否定しろよ、と苛立ちながらナルトは思う。
それに、体術――？　他の技術は使わないということだろうか。
舐めやがって！

「ふざけた本を持ったままか？」
「気にすんな。お前らとじゃ本読んでても関係ないから」

さらにはカカシの右手は如何わしい冊子で塞がっている。それなのに、体術。それだけのハンデを負っていて、体術だけで戦うという。
ナルトは思った。絶対に使わせてやる、と。
殺気を込めた視線を送っても、カカシはにやにやとだらしなく笑いながら、ナルトのことを見ようともしない。その事実がナルトを激しく苛立たせた。目で見て警戒する脅威すらないということか。

「後悔するなよ」

低い声で言い放つと、ナルトは地を這うが如く疾走する。
苦無を逆手に構えたまま、大きく振りかぶり――懐に潜り込んだ瞬間、薙いだ。

あっさりとカカシの左手で押さえられたが、これで相手はもう自由になる手はない。苦無を持つカカシに掴まれた右手を基点に跳躍し、カカシの頭上へと飛ぶ。
そこから繰り出されるのは全体重を乗せた、踵落し。
衝撃。
脳天を貫いた踵には十分な手応えがあり、目の前にはふらつくカカシが――なかった。
あるのは変わり身の術に使われたと推測される丸太。
舌打ち。
仮にも上忍なのに、こんなフェイントも何もない安易な攻撃を放った自分に腹が立つ。

「忍者が何度も後ろ取られんな。馬鹿」

そして、聞こえたのはそんな声。
首を回して後ろを見れば、しゃがみ込みながら自分のケツに狙いを定めるカカシがいた。
計算通り。
カカシの足元の地面から突然、何かが隆起する。
それは小さな手だった。
カカシの右足首をがっちりと掴んだそれは、カカシを地中へと誘う。

「土遁・心中斬首の術！！」
「なにぃっ！？」

驚くカカシと入れ替わるように出てきたのはナルトだ。
影分身を地中で掘り進ませたポイントにカカシを誘導したのだ。
舌打ちなども全て演技。
かかった！　とナルトは内心狂喜乱舞だ。

地面から出てきたナルトと、囮のナルトは二人とも足を大きく振りかぶり、首から上しか見えていないカカシの頭を――蹴り飛ばす。

「くたばれ、クソ野郎」

遠慮も何もないそれはカカシの頭を振りぬいた――わけではなく、空を切る。

「変わり身かっ！？」

そこにあるのは『ハズレ』と書かれた一枚の紙札。要するに、逃げられた上に馬鹿にされたのだ。

「正解」

小さく答えた言葉は、もともと地上にいたナルトの後ろから聞こえた。

「気づけ！　カカシは後ろだぁっ！」

焦るように地中から出てきたナルトは声をかける。

「は？」

だが、遅い。

既に準備は整っている。

ナルトの尻を見つめるカカシは、両手を握り、人差し指だけを伸ばしている。

虎の印。

火遁に用いられるその印が意味するものは忍術――ではなく。

「木の葉隠れ秘伝体術奥義！！　千年殺し！！」

浣腸だった。

しかし、それはただの浣腸ではない。

上忍の鍛え抜かれた身体で放たれるそれはまさに必殺。肛門を突き破り、ナルトの純潔を奪った。

苦痛のあまり、ナルトは顔を歪める。

それを見守るもう一人のナルトも顔を顰める。

あまりな攻撃に涙が出そうになる――わけもなく、ナルトは二人とも笑っていた。

「ダミーだよ。馬鹿。本体は地中にいた奴だよ。黄泉路へ旅立て！！」

笑うナルトの背中からはバチバチと不吉な音が鳴る。

さきほど味わった嫌な思い出が、カカシの脳裏を過ぎる。

「起爆札か！！」

予想外。

地響きが起こるような爆発音がカカシを襲う。

一気に後方へ跳躍して辛うじて範囲外に逃れられたが、そこには残ったナルトが待ち構えていた。

手には苦無を持っている。そこには起爆札が貼られていない。それだけはきっちりと確認する。

無理な回避により体勢は崩れているが、問題ない。所詮は下忍にすらなりきれていない。

振り上げられる苦無を左手で右手で止める。そこにはもう、本はなかった。

ナルトは本がないことに気づいたのか、にやりと笑うと、苦無を手放して徒手空拳に切り替える。
連打。
拳。蹴足。水面蹴り。裏拳。肘鉄。多彩な連撃がカカシを襲う。
全て余裕の体で受け止められてしまうのだが。

「くそっ！」

罵声を上げる。
そして、何を思ったのか――ナルトは猪のように突撃をした。
下っ腹を抉るように放たれたそれはカカシの拳で止められたが、やはり、おかしい。カカシは違和感に気づく。
ナルトは自分に攻撃を加えるためではなく、自分の動きを止めるために体当たりをしてきた。
何故なら、殴られた頬を首の力で固定して、無理やりカカシの身体に抱きついているのだから。

（また起爆札か！？）

そう思うのも無理はない。しかし、音はしない。起爆札が爆発する寸前の耳障りな音がしない。
ならば、狙いは何だ――そう思っているとき、事態は進む。

「土遁・土流槍！！！」

大地が牙を剥いて、カカシとナルトを襲う。
勢いよく幾数もの槍のような土の塊が生えてくる。

（馬鹿な！？　下忍にすらなれていない奴が使える術じゃないぞ……っ！　それに……どこからっ！？）

カカシは戦慄する。
影分身と起爆札ばかり使ってそれしかできないように思わせたナルトの策略に。術を有効に使おうと試みるその姿勢に。何よりも自分は絶対に安全な場所から勝負を窺う戦い方に。
無駄な思考。
その間に、勝負は決まる。
ナルトの影分身と、それに掴まれていたカカシは――土の槍に穿たれる。

「これで終わりだろ。串刺しになって死んでおけ」

隠れていた術者は顔を出す。
そこには勝負が決まったことに対する安堵の笑みを浮かべるナルトがいた。
気づく。土の槍に突き刺さったものの残骸を。
影分身の姿がないのはいい。当たり前だ。だが、カカシの姿がないのはおかしい。
勝負はまだ、決まっていなかった。
激痛。
下を見ると、足首が屈強な掌に握られていた。

「土遁・心中斬首の術」
「ぬおっ！？」

先ほどやったことを、やられ返した。
ナルトは素っ頓狂な悲鳴とともに、カカシに地面へと引きずり込まれた。実に惨めな姿である。
「さりげなく偽情報を掴ませたのは褒めてやる。だが、甘いな。こ

れが忍術の使い方だ」

首だけ状態になったナルトを、カカシはうんこ座りをして、にこにこと笑いながら見下している。

褒めてはいるが――明らかに、挑発している。同じ忍術を使うことによる意趣返し。実力差を教えるためには最も適している。

苛立つナルトは抵抗しようとするが、地中に身体が埋まっているので身体が動かない。動かせるのは口くらいだ。

「体術を教えてくれるんじゃなかったのか？　本もないようだけど……俺を相手するくらいなら読んでいても大丈夫じゃなかったのか？」

「そんなこと言ったっけ？　覚えてないなぁ」

わざとらしく首を傾げるカカシ。にやにやと笑っているあたり確実に性格が悪い、とナルトは思った。

「記憶力の無い奴だ。あぁ、教えておいてやる」

ナルトは、言う。

「悪いが、これも”ダミー”だ」

「なっ！？」

ボンッ、と煙と何かを残してナルトは消えた。

宙を舞うのは『ハズレ』と書かれた紙札。先ほどカカシが変わり身で使ったものだ。

「最初から本体は出てきてなかったわけね……」

意趣返し。
下忍に舐められた行動をとられたことにより、カカシは少し落ち込んだ。

◆

（何なの！？　あれがナルトなの？　忍術の授業で最低点数だった奴なの！？）

サクラは森の中を疾走しながら、先ほど眺めていた戦闘を思い出していた。
自立稼動する実体のある分身。
それを本体と思わせるための立ち名乗り。
さらには会話での応酬により相手の油断を誘い、罠へと誘導。そこで出てくる新たな分身。
それらは全て伏線で、最後には【土遁・土流槍】などという殺傷力の高い忍術の行使。
結局はカカシに全て回避されたが、ナルトも本体を出していない。
凄い、と思った。けれども、同時に思う。

（無駄な戦闘。何のためにチャクラを無駄遣いするようなことを……？）

わからない。
無理やり思いつくとすれば――時間稼ぎ。もしくは陽動。
それこそ何のために、だ。

「おい、サクラ」

聞き覚えのあるボーイソプラノが耳に入り込んだとき、自然と足

が止まった。
声変わり前の少年特有の声。
サスケのようにキレのある声ではなく、少しだけ尖った声は――友達になったばかりの奴の声。
「あいつには勝てない、と俺はさっきの戦闘をやらかして思ったんだ。お前はどう思う？」
当たり前のようにそこにいるのはナルトだ。
あれほどの戦闘をやらかしたのは、このためか。おそらく、サスケと自分にカカシの実力を見せるために戦ったのだろう。
サクラは納得する。
そして、答える言葉は一つだけ。
「えぇ、一人では勝ち目はないわ」
そう、一人では勝ち目がない。
反則地味た実力を持つカカシに、一対一で勝てるはずがない。直で見て、知った。あれは住む世界が違う。比べることすらアホらしい。
この課題は――一人では勝てないことを前提に作られた試験なのだ。
「さすがはサクラ。座学で毎回俺の上を行ってただけはある。俺の言いたいことはわかるよな？」
「わかるわ」
サクラは頷き、ナルトに手を差し出す。
「協力しましょう。けど、悔しい話だけど――私とあんたが協力し

ても勝ち目はないわ」

サクラ自身は自分の能力を客観視できる。

卒業生の中では平凡な実力。少なくとも、ナルトのように立ち回る戦いはできないだろう。まず、あんなに増殖する術をサクラは持っていない。

その事実をナルトもわかっているのだろう。冷静に頷いてくれる。

「だろうな。サスケの協力もいる。断られたけどな。当然だ。二人しか合格できないなんて言われちゃな……それにあいつは俺より強い。俺が負けたくらいじゃ協力する気にはならんだろ」

「あんたより強い？」

サスケが弱いとは思えない。

ナルトが弱いとも思えない。

サクラの中では二人は同格として扱われ始めていた。

だが、ナルトはサクラの考えを否定するかのように首を振る。

「正面から戦ったら負けるよ。あいつは別格だ」

断言する。

その言葉は裏を返せば『手段を選ばなければ勝てる』とも聞き取れる。

サクラは正しく理解し、笑った。こいつ自信家だ、と。

「あいつが戦って、負けるのを待つ。勝ったら勝ったでそれでいいしな。それまでは身を隠すぞ」

「その前に教えて。あんたの持ち札を」

隠れる場所を探すために移動しようとするナルトに聞く。

返ってきた視線は胡乱げなものだ。
それも当然と言える。忍からすれば自分の保有する術や道具などを教えるなどというのは自殺行為だ。奥の手は隠しているからこそ奥の手足りうる。それを教えろ、とサクラは言ったのだ。
ナルトはサクラの目を見つめる。
揺らがない瞳ははっきりと勝利を欲している。

「いいけど……勝算はあるのか？」

だからこそ、ナルトは口を開いた。

「ない。けど、それは隠れながら考える。だから、情報をちょうだい」

はっきりと勝算が無いと告げるサクラ。胸を張りながら堂々と言うその姿が、ナルトには面白かった。
ないのか、としきりに呟いてしまう。
決して不機嫌ではなく、機嫌が良さそうに、だ。とても楽しそうに、笑っている。
その姿にサクラは真摯な瞳を向け続けていた。

「頼りないのか、頼りになるのか。よくわからん答えだな……」

苦笑混じりのその言葉に、サクラも全面的に同意する。
私なら教えないかも、と少しだけ思うのだ。しかし、ナルトは違った。
まぁいいか。
確かにそう言ったのだ。サクラの耳は仕事をサボらない。

「情報は共有するもんだ。教えるぜ、我が友達」

「馬鹿ね。こういうときは友達じゃないわ」

チッチッチッ、とサクラは人差し指を振る。少しだけ腰を屈めて、お気に入りの映画の女優が言っていた言葉を紡ぐ。

「仲間よ」

◆

空がよく見える場所に出たとき、後ろに気配を感じた。

いや、わざと感じさせたと言うべきか。突然に、気配が出現したのだ。

背筋が凍る。同時に、心臓が高鳴る。

ドベのナルトですらあれだけの大立ち回りをした。燃えないか、と言われれば嘘だ。

間違いなくサスケは高揚している。

手には大粒の汗が滲むが、それすらも娯楽。これから行うのは究極の遊び。絶対上位にいる実力者とのやり取り。

ここで退けば――男が廃る。

「俺はナルトとは違うぜ？」

「そういうのは鈴を取ってからにしろ、サスケ君」

振り返ると、そこにはだらしなく笑いながらエロ本を読むカカシがいた。

頬が痙攣するほどにむかつく光景だが、ナルトは冷静に対処していた。自分が熱くなるわけにはならない。

冷静になれ。冷静になれ。そして、身体は熱く保て。

「里一番のエリート――うちは一族の力……楽しみだなぁ」

楽しみにしてるとは思えない不真面目な態度。
惑わされるな。これはフェイク。
サスケは腰につけたポーチから両手で手裏剣を取り出すと、左右対称の構えから、一気に投擲した。
ナルトと比べてもなお早い投擲の動作はカカシに止められることはなく、飛翔する。

「バカ正直に攻撃しても無駄だよ！」

カカシはあっさりと避ける。
それこそがサスケの狙い。
馬鹿みたいに様子見ばかりしていたわけではない。備えあれば憂いなし。
手裏剣はカカシの後方で方向を変えて飛んでいき、草むらの中に仕込んでいた縄を切った。
プツン、とという音とともに、多量のナイフがカカシへと向かう。

（トラップか！？）

基本的な罠。
敵にわざと回避できる攻撃を放つ。もちろん避ける方向も誘導する。そして、そこへと飛んでいく多量のナイフ。アカデミーで習うサバイバル演習の基本中の基本だ。
そして、罠に気づいて、ナイフを避けたカカシが飛ぶ場所も予測済み。
ナイフが木々にぶち当たる音を背景に、サスケはカカシへと直進する。

（なにっ！）

放つのは、跳躍からの左足による後ろ回し蹴り。身体の関節を余すことなく利用された鞭のような打撃は、カカシがガードに用いた腕を痺れさせるほどのものだ。
それだけで攻撃は終わらない。
受け止められた足をそのままに、サスケは思い切り身体を捻って右拳を叩きつける。
それすらも簡単に受け止められてしまうが、残った右足での蹴足を叩き込む。
通らない。
それらの攻撃すらも織り込み済みのこと。ガードされるのが前提の攻撃。
サスケの狙いはただ一つ。
相手の両手をガードに使わせて、自分の左手の自由を確保すること。残った手で鈴を奪い取ること。
掠め取るように動いた左手にカカシは気づき、一気に距離を取られてしまう結果となるが――カカシはサスケのポテンシャルに心底驚いていた。

（こいつ……！　何て奴だ。イチャイチャパラダイスを読む暇がない）

本は地面に打ち捨てられている。余裕がない。
ナルトとは違う。
奇策も用いず、真正面からの体術による突破攻撃。下忍とは思えないほどの身のこなし。
さすがは木の葉に君臨する最強の一族――うちはの末裔。
カカシは本を拾い上げると、ポーチの中へと仕舞った。

「ま！　あの二人とは違うってのは認めてやるよ」

当然だ、というようにサスケは鼻を鳴らす。
そして、印を切る。
澱みなく切られた印は虎の印で終息し、サスケは大きく息を吸う。
再び、カカシは戦慄する。
ナルトもそうだが、サスケも同じだ。
下忍に使えていい類の忍術ではない！

（火遁！　豪火球の術！！）

サスケは大きく息を吐き出した。
それは獄炎というべきもの。
身の丈を大きく越えた火の塊は、前方にある息の届くもの全てを焼き尽くす灼熱の焔。
喰らって生きていられる人間などいるはずもなく、間違いなく黒コゲになる代物だ。
ひとしきり息を吐き終わると、術を終了する。
炎によって遮られていた視界は鮮明になり、そこには――何もなかった。
黒コゲ死体はなかったのだ。

（いない！　後方！　いや、上か！　どこだ！）

避けられることを予想していなかったサスケは身の回りを見渡す。
それが仇となった。
サスケがすべきことは周囲を探ることではなく、逃げることだった。

「土遁・心中斬首の術……」

だからこそ、地中にいるカカシに気づかない。
ナルトの分身と同じく、地中へと無理やり潜らされる。晒し首状態だ。

「この術見てただろぉ？　ちゃんと対策しなきゃ。ま！　お前は早く頭角を現してきたか。それに……ナルトもな」

ナルトと同じくサスケもにやにやと下卑た笑みを浮かべるカカシに見下ろされることに終わった。
あいつと同レベルか……と思うと、サスケは少し悲しくなる。一応トップで卒業したはずなのに。
悔しさで顔が顰めるサスケを見て何が面白いのか、カカシはひとしきりにこやかに微笑むと、その場から立ち去った。

「でも、ま！　出る杭は打たれるっていうしな！」

そんな言葉を残して。
くそっ、とサスケが舌打ちしてしまうのも無理からぬことだろう。
相手との差が、見えない。戦力差が全く掴めないほどの絶望的な差。
どうすれば勝てる。どうやったら鈴を奪える。
わからない。
考えれば考えるほどにわからない。
地面に埋められて数分。
身体を動かすことなどできないので、サスケは思考の波を漂っていた。
そんなとき、近くの草むらを掻き分ける音がする。

「よぉ、サスケ。やっぱお前も負けたか」
「ナルトにサクラか……」

出てきたのはナルトとサクラだった。
ナルトはてくてくとサスケの方へ近づいていくと、地面に腰を下ろす。サクラはおどおどとしながらサスケのことを見るばかりだ。わぁ生首だ、と漏らしているのをサスケはきっちりと聞き届けたが、あえて無視する。少なくとも頬を朱に染めながら言う言葉ではないだろ、とも思うが、無視しきった。驚嘆すべき精神力である。

「さっきの話、考え直してくれたか？」

さっきの話――つまり、サスケに協力を持ちかけたことだ。
あのときは失敗に終わったが、敗北した今では協力してくれるとナルトは判断していたし、サクラも協力に関しては楽観ししていた。

「フン、断る」

だが、あっさりと断られることになる。
拒絶の言葉に反応するかのように立ち上がり、ナルトはごそごそとポーチからあるものを取り出した。

「あっそ、じゃあそこで虫に噛まれてろ」
「お前、手に持ってる奴は何だ」
「飴と蟻」

怪訝な表情を浮かべるサスケに対して、ナルトは言った。サスケの顔がかなり引き攣る。
頬の隣で元気に飴の上を歩き回っている蟻を見せ付けられたのだ。もし断ったらどうなるか――考えるまでもない。やられる。屈辱的なことを強要される。
さすがに見かねたサクラが「ナルト……それは脅しじゃ？」と諌

めるが、ナルトは無視。
計画通りに動かないサスケに対し、悪戯をすることを楽しみにしている悪餓鬼のような笑みを浮かべている――わけではなく、表情は冷静そのものだ。多分に怒りを孕んではいるが……。
「俺は心底むかついてんだ。あいつには一人じゃ勝てない。だからさ」
紡がれる言葉はナルトの本音。
一人では勝てない。ならどうする？
「合格度外視で協力しようぜ？　このまま負けるのはむかつくだろ」
簡単な答えだ。協力すればいい。それでも勝てなかった場合はそのとき考えればいい。まずはやれることをやるべきだ。
対するサスケの答えは、しかめっ面のままに放たれる。
「……まずは助けろ」
「交渉成立だな？」
「あぁ」
おっけー、と答えるとナルトはサスケを一気に引き上げる。
地中から助けられたサスケは解放されると同時に、ぺたんと地面に座り込んだ。そして、複雑な視線をナルトに向ける。
ナルトが差し出している手に疑問を持っているのだ。どういう意味だ、と。
「じゃ、頼むぜ。うちはのエリート」
「嫌味だな」
「いやいや、本音だよ。戦闘見てたけど、お前は俺より強い。まぁ

成績トップの卒業生に補欠合格の俺が勝てるはずないんだけどな」
「謙遜だな。お前も結構やるじゃねぇか」
「奇策を使っただけだ。お前みたいに正面からあんなに戦えねぇよ……頼りにしてる」

フン、とサスケは鼻息を鳴らす。照れ隠しだ。
ナルトはそのままサクラを見ると、にっと笑った。

「サクラのことも頼りにしてるぜ。座学トップさん？　作戦はばっちりなんだろ？」
「不合格確定の作戦でいいのね？」

確認の合図。
つまり、ルールを侵した作戦だということ。
それでもいいのか、とサクラは聞く。そこまでして勝ちたいか、と。

「俺は構わない。サスケは？」
「それは嫌だ。けど、このままやっても勝てる気がしねぇ。とりあえず、サクラ。お前の作戦――勝算はあるのか？」

同意の言葉。
この二人、結局は負けず嫌いの男の子でしかない。やられっ放しは気に食わない。
そんな二人がおかしくて、ちょっとだけ笑いそうになる。
おかしくなったのかもしれない。
サバイバル演習などの授業では得られなかった緊張感が、今はたまらなく嬉しい。自分のこれからの人生が決まる大事な試験だというのに、それを楽しみ始めている自分に対し、サクラは驚く。
それは何故か……一人ではないからだろう。

だからこそ、サクラは強く頷いた。

「任せてよ。あのクソ――ん、んー、ふざけた教師……ぼっこぼこにしてやるわ。作戦はこうよ……」

数分に及ぶ作戦概要。

それは正しく奇策と言うべきものだった。

しかし、反応は上々。

「……不合格確実だな」

「けど、かなり良い不意打ちだ」

ナルトは口の端を吊り上げている。

サスケは何度も頷いている。

きっと成功する。この二人はそう信じているのだ。

「それにこんな言い訳をすれば合格になるかもしれないわよ？　時間遅れて試験時間短くしたのは先生のせいだし」

ここまで来たら合格などは関係ない。

とりあえず、カカシに一泡吹かせてやる。三人の見解は一致していた。

ナルトはイルカを侮辱されたことを訂正させるために、カカシをぶっ飛ばしたい。

サスケはカカシに負けた屈辱を晴らしたい。

サクラはナルトとサスケの役に立ちたい。

持てる想いは違うが、目指すものは同じ。

「……乗った。俺はやるぜ」

「サスケと同じく。俺もやる」

「じゃあ、決行ね！！」

こういうものを――仲間と言うのだろう。

「クハハ、こういうの――いいなぁ。できればお前らと七班をやりてぇよ。ここで終わらせたくねぇよ」

「私もよ」

「俺はどうでもいい」

サスケだけが首を振った。

だが、少しだけ恥ずかしそうに俯いているのは何故だろうか。

ナルトとサクラは苦笑し、三人は円陣を組む。

利き手を三人の中心にかざし、手を重ねていく。

決意の言葉。

「……勝つぞ！」

こうして七班のメンバーは初めて、仲間となった。

下忍試験・その参

4.

午後十二時――昼真っ盛りだ。
頭上では太陽が元気そうに輝いており、日陰にいてもなお暑い。
さらには耳に届く目覚まし時計の不協和音が暑さとあいまって不快感を加速度的に増していく。もう試験の時間は終わり。集合時間だ。
大樹の幹に寄りかかり、七班の三人は汗ばんだ顔をハンカチで拭いながら、作戦会議をしていた。
作戦立案はサクラ。
サスケとナルトは相槌を打ちながら、作戦の穴を指摘し、穴を塞ぐように三人で頭を悩ませながら構築していく。
既にその過程は終了し、作戦の最終確認をしていたのだ。

「作戦はもう――確認する必要もないわね？」
「大丈夫だ」
「問題ない」

サクラの言葉に頷く二人。

「要(かなめ)はナルトよ」
「ミスんなよ、ウスラトンカチ」
「……任せとけって。足は引っ張らねぇよ。その代わり、サスケ。お前もしくじんなよ？」
「誰に言ってる？」

実力に裏打ちされた自信をあますことなく発揮し、サスケは言う。

男同士のくだらない掛け合い。意地の張り合いとも言う。
馬鹿だなぁ、とサクラは思うが、それでも――その感覚すら心地良い。
いざとなれば頼りになるというのは戦闘を見ていてわかっている。
忍術と忍具を駆使し、相手の裏をとる戦術を好むナルト。真正面から上忍に挑んで、体術で押し切ったサスケ。
頼もしい。
ならば、自分には何がある。
それは簡単だ。
この二人にはない頭脳。アカデミーで終始トップだった座学の実績。
誇りはある。自信もある。最後に必要なのは結果だけだ。

「行くわよ」
「おう」

負けるはずがない。
間違いなく、勝つ。
必勝の意志を宿し、三人は集合場所へと移動を開始した。

◆

時計が『ＰＭ　１２：１０』を指す時刻。
七班の三人は集合場所であるサバイバル演習場の入り口にいるカカシの前で座り込んでいた。
三人とも朝食を抜いているせいで腹の虫が盛んに騒ぎ立てている。
サクラにいたっては「ダイエット中だから」という理由で昨晩のご飯も抜いているということで、座ることすら億劫なのか。ほとんど前屈みに項垂れていた。

「おーおー、腹の虫が鳴っとるね。ところで、この演習についてだが……」

間。

少しだけ考え込むように、カカシは空を見上げている。

そして、視線を三人へと戻した。表情はとてもにこやかなものだ。

「ま！　お前らは忍者学校に戻る必要もないな」

合格――つまりはそういうことだろうか。

呆けたように三人は間抜けな顔になった後、三者三様の歓びを表現する。

ナルトは「当然だな」と言い捨てて、サスケは「フン」と鼻を鳴らすだけ、サクラは「ってことは、私たち三人とも！？」全員が合格ということを喜んだ。

だが、世の中そんなに甘くはない。

カカシは思い切り良い笑顔から一転――

「うん、三人とも……忍者をやめろ」

冷めた視線で、三人を見下ろした。

ずっと笑ったままのカカシ――戦闘のときですらどこか飄々とした態度だったカカシが、初めて怒気を見せる。

冗談を欠片すら含んでいない、本気の声音。

「確かに私たちは三人とも鈴を取れなかったわよ！　けど、やめろってのは言いすぎじゃないのっ！？」

「……どいつもこいつも忍者になる資格のないガキだってことだよ」

サクラの抗議を一蹴する言葉に反応したのはサスケだった。

残像すら残さずに立ち上がると、突風となり、カカシを襲う。
会話の間を狙った、絶妙な不意打ち。
だが――

「サスケ君！」

サクラがあげた悲鳴は――サスケが踏みつけられるという醜態を見てのもの。
サスケはカカシに特攻し、太股につけたホルスターから澱みなく苦無を取り出して、斬りつけた。その速さはナルトの斬撃とは比べるまでもないほどの速度。
それでもなおカカシからすれば止まっていると感じられるほどの遅さなのだろうか。
気づけば、サスケはカカシに背中を踏みつけられていた。

「だからガキだってんだ」

ぐりぐりと靴底をサスケの頬に押しつける。
「サスケ君を踏むなんてダメー！！」とサクラは叫ぶが、何の意味もなく、サスケは恥辱に塗れさせられる。
カカシは心底呆れ果てたような、何も期待していない、色のない視線を七班のメンバーに向けた。

「お前ら忍者舐めてんのかっ！？　何のために班ごとのチームに分けて演習やってると思ってる」
「え？　どーゆーこと……？」

サクラの問いに、カカシは首を振る。
だから不合格なのだ、と暗に言っているようなものだ。

「つまり、お前らはこの試験の答えをまるで理解していない」
「答えだと？」
ナルトの言葉にも同様だ。鋭い視線を向けるだけ。
「そうだ。この試験の合否を判断する答えだ」
「だから、さっきからそれが聞きたいんです！」
抗議。
合格基準が不鮮明な試験に対する文句のようなもの。
何故最初から提示しないのか。してくれればその通りに結果を出すのに！
そう思うのは悪いことなのだろうか。アカデミーではずっとそうだったのに。
サクラの言葉にはそんな意味が込められていた。
だからガキなんだ、とカカシは嘆息する。
「それはチームワークだ」
不可解。
「三人で来れば鈴を取れたかもな」
確かにそうかもしれない。
だが、それは不可能なことのように思える。
何故なら――
「なんで鈴二つしかないのにチームワークなわけェ！？　三人で鈴取ったとして、一人我慢しなきゃならないなんて……チームワークどころか仲間割れよ！」

仮に、だ。
報酬は二人にしか払いませんけど、三人じゃないとこなせない任務です。
そう言われて受ける奴がいるだろうか？
おそらくはいないだろう。いたとしてもそれは極少数のことだろう。
「当たり前だ！　これはわざと仲間割れをするように仕組んだ試験だ」
それなのに、なお、カカシは怒る。
「この仕組まれた試験内容の状況下でもなお自分の利害に関係なくチームワークを優先できるものを選抜するのが目的だった」
これこそがカカシの求める人材だ。
「それなのにお前らと来たら……」
しかし――三人はカカシの思う通りに動かなかった。
「サクラ！　お前はナルトが戦っているにも関わらず、それを見過ごした。最後まで俺に挑むことなく、な」
助けられる場面はあった。
何度も何度も見過ごした。それはサクラの失態だ。
「ナルト！　お前は一人で独走するだけ」

仲間に頼らずにカカシに挑んだ。
感情任せの特攻は無意味に終わる。
「サスケ！　お前は二人を足手まといと決め付けて個人プレイ」
三人の中で最強だという自負があるからこその連携放棄。
そんなことをするならばそもそも班を組む意味がない。
「任務は班で行う！　確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。が、それ以上に重要視されるのは”チームワーク”――これを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、殺すことになる。たとえばだ……」
カカシは、少し考えたふうに――
「サクラ！　ナルトを殺せ。さもないとサスケが死ぬぞ」
サスケの自由を奪ったまま、首筋に苦無を突き付ける。いわゆる人質というものだ。
「え！？」とサクラは動揺し、ナルトも苦虫を噛み潰したような顔になる。ようやく――カカシの言っている意味を理解し始めた。
「と……こうなる。人質をとられた挙句、無理な二択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ」
カカシはサスケを解放し、入口の近くにある”モノ”へと近づいていく。
「これを見ろ。この石に刻まれている無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者たちだ」

磨かれた四角柱の全面に描かれた名前。
敏いものならこの時点で気付く。
これは――

「が、ただの英雄じゃない。任務中に殉職した英雄たちだ……これは慰霊碑。この中には俺の親友の名も刻まれている」

そう、慰霊碑だ。
任務の果てに死に絶えた忍者たちの末路を記したもの。
寂しげな色を濃く宿したカカシの瞳に映るものは何なのか。どのような想いが去来しているのか。
少しだけ黙り込むと、泣きそうに、懺悔するかのように――慰霊碑に触れている。

「へぇ、つまり――カカシ先生。あんたは自分勝手な個人プレイをしたあげくに仲間を死なせるハメになったわけだ？　自分ができなかったからってまだ過ちを犯していないガキにそれを強要する。浅はかだな」
「否定はしないよ」

ナルトの罵倒をカカシは潔く認める。
古傷を穿つ言葉は心を抉るが、全て真実。愚かな自分を戒めるための悲劇。
だからこそ、自分と同じような経験を――子供たちにさせたくないと思うのは押しつけがましいことなのだろうか。自己満足なのだろうか。

「だからって俺たちの可能性を摘み取るわけか？」

迷惑な自己満足だ、とナルトは断じる。
沈黙。
それは言いすぎじゃないの、とサクラは少しだけ焦り始めるが、カカシは違うようだ。

「……いいだろう。最後にもう一度だけチャンスをやる。ただし、昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。挑戦したい奴だけ飯を食え。ただし、ナルトには食わせるな。上官である俺に敵対した罰だ。もしそいつに食わせたりしたら、そいつをその時点で不合格とする」
「てめぇっ……！」
「ここでは俺がルールだ。分かったな」

殺気混じりの視線が反逆を許さないことを教えてくる。
それなのに、サクラは立ち上がり、叫ぶ。

「いいえ、ルールには従いません。ナルト！」

待ってたぜっ！　とナルトは指を口につけ、口笛を鳴らす。
攻撃の合図。
地面が盛り上がり、人影が飛び出してきた。

「多重影分身か……地中で待機していただと！？」

それはナルトの影分身。
総勢で八人のナルトはカカシに襲いかかる。
四方八方からの攻めをカカシは難なく受け流していくが、そこへサクラとサスケも加勢する。

「サスケェ！」
「おう！」

ナルトたちの合間を掻い潜って、サスケは踏み込む。
震脚。
大地に踏み込んだ足から膝へ、腰へと連動し、肩から放つ正拳突き。
カカシの片手に受け止められるが、その隙に大勢のナルトが攻め立てる。
頭への蹴り、膝を狙った下段蹴り、鳩尾を狙った拳、肩の関節を外すために掴みかかる、などなど連携の取れた攻撃。
だが、カカシは違和感を覚える。
（何かがおかしい。サスケはこんなに弱かったか……？）
修行の背景が見える。何度も何度も繰り返した型通りの連続攻撃は及第点を与えてもいいものだ。
だが、サスケ独特の苛烈さがなく、癖も消えている。
あくまで教本通りの攻撃なので、至極読みやすい。
違和感が拭いきれない。
そのとき、サスケが攻撃をしたままに、ナルトたちが一斉に引いた。
「今よっ！」
サクラの号令の下、一気に苦無が投擲される。カカシと攻防を繰り広げるサスケの安否などお構いなしの攻撃で、やっと理解する。
（これはダミーか！）
サスケを突き飛ばし、カカシは苦無を全て避けきる。
身体全身どころか、弾幕攻撃にも近いそれは狙いなどなく、避け

るのは難しくなかった。
難しくはなかったのだが――カカシは舌打ちする。
何かに絡まって身体が動かない。
「ぬっ、苦無にワイヤーを巻き付けていたか……っ！」
いや、違う。
苦無についていたワイヤーは確かに動きを阻害するほどに木々に絡まっているが、何一つとして自分の身体を束縛するものはない。
身体に巻きついているワイヤーは先程突き飛ばしたサスケに化けた影分身から放たれたもの。
僅かの間にホルスターから苦無を早撃ちするなどナルトにはできない。つまり、ナルトではないということ。
「サスケは本物だったか！　俺が助けることを前提に……危険なことを！」
「ふん、ウスラトンカチが。ナルトの体術は俺も見ていた。それくらい、真似できる」
そう、サスケもナルトの戦闘を見ていたのだ。
だからこそ、ナルトがサスケに化けていると思わせるための演技をすることができる。
さて、この時点で気付かないだろうか。
カカシは動けない。
ナルトはいっぱいいる。
それなのに、攻撃する為に近づかない。
それは何故か。実に簡単な解答だ。
近づけば危ないからだ。
ワイヤーからは何かが滴っている。ぽとぽとと地面を湿らしていく。それは水ではなく――巷では黒い水と言われるもの。つまり、

油だ。
サスケはにやりと笑う。そして、ナルトがサスケの持つワイヤーに近づいていく。
手にもつのは火打ち石。
かつん。

「火遁・龍火の術！！」

小さな火種は炎となり、ワイヤーを伝ってカカシへと迫り行く。
【火遁・豪火球】を受けたときとは違う。身動きが取れない状態。

「ぬぅっ！」

カカシは身体が傷つくのも構わずにワイヤーを無理やりに引っ張る。
腕の自由が利かないものだから身体で引っ張ることになり、食い込んでくるワイヤーが身体を蝕むが、燃えるよりマシだ。
力負けし、「くそっ」と吐き捨ててサスケはワイヤーを放り捨てる。このまま握っていたら炎の中に飛び込むことになるから。

「影分身たち――突っ込めぇ！！」

ナルトの号令とともに影分身たちが炎の中へと飛び込んで行く。
炎が吹き荒れる。森の木々へ飛び火するのも時間の問題。
ここまでやるか、とカカシは内心呆れ果てる。
炎の中で息を止めながらナルトの影分身をあしらい続ける。
（チッ、数が多い。変わり身をするにも丸太とかがないぞ……）
考える。

そのとき、目の端に写った光景のせいか、カカシは硬直した。サクラが炎に巻き込まれかけているのだ。

「サクラァッ！」

サスケがサクラの下へと走るシーン。

それは鬼気迫るもの。演技とは思えない。

だが、どうなのだろうか。

さんざんに裏をかかれている。これも演技かもしれない。

けれど、このまま炎に飲み込まれれば、サクラは死なないまでも——女の子なのに……重度の火傷を負うかもしれない。

『仲間を守れない奴は屑だ』

そんな言葉が脳裏に過ぎったとき、ナルトたちを蹴散らして、カカシはサクラの下へと走っていた。

疾風にすら勝るその速度で、先に走り出していたサスケを追い抜いて、サクラを助ける。

ほっと一息吐いた。

そんなとき、サクラがにぃと笑ったのだ。

「残念賞。これもダミーだ」

ばちばちと耳触りで、なおかつ嫌な思い出が蘇りそうな音が耳に届く。

予想の内だ。

カカシはサクラに化けているナルトの影分身を放り捨てて、即座に引いた。

爆発。

そう——ここまでは予想通りだった。

とんとんと背中を誰かに触られるまでは。

「先生、つかまえたー」

にひひと笑う女の子が、後ろにいた。

目が合う。

何をされるかわからん！　そう思ってカカシは再び離れようと足に力を加えるが、跳ぼうとしても跳べない。足を強く掴まれている。

足元を見る。

（忍術の使い方……教えるんじゃなかったなぁ）

そんなことをカカシは考えてしまう。

つまり――

「土遁・心中斬首の術！」

カカシを地面へと誘う手に対抗し、力いっぱい踏ん張る。

この馬鹿力め！　そう叫びたくなるほどにナルトの力は強かった。

失念する。

近くにはサクラがいるのだ。

こっそりと印を組んでいる。

そして、ナルトのことを注視するカカシの視線の間に入り込んで、笑った。

「幻術・奈落見の術！」

夢の中へ落ちる。

こうして勝負は決着を見た。

◆

「どうかな。私の作戦通りじゃない？」
「俺の影分身のおかげだな。先生の不意打ち喰らったときの顔と言ったら！」
「フン、俺の演技のおかげだ。ナルトのしょぼい体術をトレースするのは大変だったぜ」

カカシが目を覚ましたとき、七班の全員は二つしかない弁当を分けあって食べながら、意地の張り合いをしていた。
身体を動かそうとするが、縄抜けができない特殊な縛り方で自由を封じられており、芋虫のように這いずるしかできない。
腰を見る。
そこには鈴はなく、円を作って弁当を突いている七班の真ん中に鈴は転がっていた。
カカシがもぞもぞと動き出したのをナルトが気づき、続いてサスケとサクラも気づく。にまぁと笑っているのがいやらしい。

「先生。俺たちの勝ちだろ？」
「チームワークばっちりだったんじゃない？」
「このトンカツは俺のだ」
「おい、サスケ！　今は弁当の具の取り合いをしてる場合じゃ……！」
「ずっと狙っていたんだ」
「分けあいの精神ってものが……ッ！」
「ちょ、ナルト！　そう言いながらなんで私のトンカツに箸が伸びてるのよ！」
「幻覚だな。幻術を用いたときの副作用じゃないか？」
「アカデミーで習う幻術に副作用なんてあるわけないでしょ……あー、もう！　あげるから喧嘩しないでっ！」

真面目な雰囲気でこっちを見たかと思ったら、弁当の具で喧嘩を始める。
なんだこいつら、とカカシは思う。

「まぁ、あれだな。トンカツは後だ。とりあえず……カカシのことをぶん殴らないと気がすまない。イルカ先生のことを馬鹿にしてくれた報いを受けろ」
「奇遇だな。俺も一発殴りたいところだったんだ。こいつのおかげで服はどろどろになるわ、あげくに焦げるわ……ろくなことがない」
「焦げたことに関しては自分たちでやったことじゃ……？」
「知るか」

芋虫状態のカカシにサスケとナルトがにじり寄る。サクラは止めようとするが、男の力に勝てるはずもなく、妨害できていない。
確実にどつかれる。
動けないカカシに遠慮をする気はないらしく、ナルトとサスケは大きく足を振り上げた。
ここから続くのは踵落としだろう。横腹を狙っているそれは凶器そのもの。

「ハハ、殴られたくないなぁ。それに、イルカ先生のは本音じゃないよ。ごめんごめん。許してくれ」

謝罪の言葉を言うが、カカシは揺らがない。
もともとナルトはカカシが挑発のためにイルカを侮辱したことに途中で気付いた。だから、怒りはそこまでないのだが――あくまでそこまで。やっぱりどつきたい。
サスケも同様だ。
正直なところ、服なんてどうでもいい。体術をあしらわれたとき

も一撃たりともまともに入れることができなかった。そのストレスを発散したいだけだ。
まぁその夢は叶わないのだが。
カカシも七班がさきほど浮かべていたような、いやらしい笑いを浮かべる。

「教えてやるよ。ナルトの言葉を借りるなら……ダミーだ」

ぼふん、というしょぼい音をたてて、カカシの身体は消え去った。
そして、木の上からカカシが飛び下りてくる。

「お前らがこっそり集まって作戦会議してるのは聞いてたからね。バレバレだよ」

実は作戦会議のときからカカシは全て聞いていたのだ。
こっそりと木の上で七班の作戦の詳細を全て盗み聞きし、影分身を一つ生み出し、そいつにずっと演技させていた。
作戦が上手く行っていると勘違いさせるために。

「くっ、ふざけんな！」
「まだ終わってねぇ！」
「盗み聞きなんて変態よ！」

一名だけ何かピントがずれているが、言っていることは似たような意味だ。
全員が苦無を取り出すと、投擲する体勢に入る。
掻き消える。
そう、カカシは上忍。
勝負にならないほどの隔絶した実力を持っている。それは最初からわかっていたはずなのに……。

目を見開いていたにもかかわらず、サクラの背後へと移動しているカカシ。
反応し、ナルトとサスケはサクラを守るように飛び掛かるが、一蹴される。
気づく。
協力しても勝てないという事実に。
恐怖のあまり硬直する。
絶対上位の存在に牙を剥いた。反逆も許さないと言われた。
それなのに――悔恨し、サクラは恐怖に目を閉じる。
だが、サクラの手の上に置かれたものは大きな手。
ぽふん。

「言っただろ。自分の利益に関係なくチームのために動けるかどうかが判断材料だって、お前らはちゃんと合格基準を満たしてる」
おそるおそる振り返ると、そこには嬉しそうに笑う上忍がいた。
「仲間想いかどうかはわからないけど、全員で協力して動ける。それだけわかれば十分だ……」
呟かれた言葉は何を思ってのことか。
優しさに満ち溢れていた。
「これにて演習終わりィ！　全員合格！　よォーしィ！　第七班は明日より任務開始だぁ！」
しんみりとした声音から一転し、カカシは演習場から去っていく。
その後ろ姿を見ながら、七班の三人はお互いに視線を向けて、苦笑する。

「……失敗したのに合格ってのは複雑な気分だな」
「作戦が……バレバレ」
「フン」

かなり悲しい気分だった。
いくら頭を使っても、結局は負けた。それだけが心残りだ。

「にしても、お前ら凄いよ。俺の試験を突破したのは、お前らが初めてだ。誇っていいよ」

カカシの慰めには意味はない。
負けたという事実は心に残る。
だが、それでも、これは始まり。
七班が協力して、初めて挑んだ困難はきっと意味あることなのだから。

「当然っ！」

サクラとサスケの背を思い切り叩き、ナルトはカカシの後を追う。

「痛ってぇな！」
「何すんのよ！」

サバイバル演習による試験が終了した。
これから七班がどうなっていくのか、わかる人はいない。
だが、きっと――

「でりゃぁっ！」
「ぐおっ！　サクラ！　女なのにラリアットってのは！　サスケ、そのポーズは何だ」

「千年殺しだ」
「ぎゃあああああああっ！」

それなりに楽しくやるのだろう。
カカシは楽しげに三人の遊びを見守りながら、そんなことを思った。

挿入話・ヒナタの悩み

昼間は一族の多くが修練に使う木造建築の道場は、広い。日向ヒナタにとっては広すぎた。

誰もいない真夜中は静謐が落ちる。

大きく開かれた扉からは下弦の月が視界に写る。自分の姿を暗示しているようで、心がざわついた。

――誰も私を見てくれないの。

小さな声がどこかから聞こえてくる。

まとわりつくソレがとても不愉快で、ヒナタはひたすら拳を振るった。

”柔拳”。

木の葉最強の一つと謳われる日向一門にのみ伝えられる体術――いや、この表現は正しくないかもしれない。伝えられるではない。日向一門にのみ使える体術と言うべきか。

何故なら柔拳を使いこなすためには日向の末裔にのみ顕現する白眼という血継限界が必須なのだから。

白眼。

名前の通り、白い瞳だ。あらゆるものを見通す特殊な瞳は、人体に流れるチャクラの経穴すらも肉眼で捉えてしまう。己がチャクラを経穴に叩き込み、チャクラの循環を人為的に阻害する。人体の内部を破壊することが極意の――拳術だ。

選ばれし者のみが習得できる最強の武門。それこそが柔拳。

だが、ヒナタには才能がなかった。

汗を滲ませながら振るう拳は――遅い。

――日向の面汚しが！

拳が、止まり、だらりと落ちる。
板張りの床に雫が落ちていく。力が抜けていくかのようだ。
しとしと。
雨が降り始めたのだろう。視界が滲むのはそのせいだ。
地震が起きたのだろう。立っていられないほどに足が震えるのはそのせいだ。
突風が吹いたのだろう。両腕で胸を抱きしめてしまうのは寒くなったせいだ。

――人は決して変わりはしない。

ある人の口癖。
その言葉が常にヒナタの心を縛っている。
可能性を決め付けて、限界を知る。それはきっと幸せとは遠いのだろうけど、苦しむことはない。自分の可能性を決め付けるという行為は、才能のないものや心の弱いものにとってはとても優しい。
進もうとするから傷つく。壁の高さに絶望する。
いつだって、そうだ。
努力しようとしたら壁がある。才能という名の巨壁が自分の道を遮っている。
だけど――

――初対面だろ？

思い出したいのはこの言葉じゃない。
けど、思い出すだけで視界が晴れていくのは何故だろうか。
くすくすと口から零れる陽気な声音は誰のものだろうか。

――通りで変な目してるわけだ。

違う。違う。違う。
思い出したいのはこの言葉じゃない。ほんわかと心が温かくなるけれど、こんな言葉じゃない。
現実に立ち向かって、努力して、倒れて、泣いて、悔しがって、それでも立ち上がって――誰にともなく呟いた台詞。たまたま耳に届いた彼の本音。それを思い出さなきゃいけないんだ。
あのときはそう――どんなときだったか。思い出せない……。
よろりとしながら、立ち上がる。
ふらふらと揺れる四肢は生命力を感じられず、そよ風が吹いただけで倒されそうだ。
ひた。ひた。ひた。
冷たい床を素足で踏みしめて、銀の月が照らす世界へと、ヒナタは歩み出た。

「……聞かなきゃ」

掠れた声は、風へ溶け込んでいく。

◆

木の葉が、風になびいた。ふんわりと漂う柔らかな香りに、サクラは思わず思考を止めていた。
我ながら細いと思うしなやかな足を抱きとめる人影を見て、ほうと息を吐く。
柔らかく、それでいて強く――抱きしめられた足は身動きを許さず、まるで月の光に狂わされたかのように身体が、熱い。
ひやりと冷えた地面に背中をつけて、冷たい双眸に近づくために起き上がっていく。
震える。

じんわりと汗が滲み出る。うなじにぴったりと張り付いた自慢の桃色の髪が鬱陶しい。
息ができないほどの過緊張に蝕まれながら起き上がると、常ならば無愛想な表情ばかりのサスケが、かつてないほどの優しげな微笑みを浮かべている。
心臓が、高鳴る。

「あ、くぅ――ふぅぅ……も、もうダメ……限界……」

もう、限界だ。バクバクと鼓動する心臓は、今にも口から逆流してしまいそうで。
熱さから逃げるために、少しでも冷やすために、サクラは地面へと勢いよく倒れていった。
もう動かないぞ。
怠惰な姿を思うさま見せつけるのは乙女という言葉からはほど遠い。
しかし、可愛い女の子ぶる必要はないのだ。
薄く鋭い銀月と、街灯で照らされる公園の中、サクラはとうとうブチ切れた。

「無理だって。初日から腹筋五百回とか無理だって！！」
「だってよ。どうする、サスケ」
「まだ頑張れるだろ？」

頭上ではナルトがににやにやと笑いながら座っており、サスケはサクラの足をがっちりと掴んで放さない。
もうやだ、頑張れない。ふるふると首を横に振って懸命に意志表示するが男二人は通じないようだ。
アカデミー内では『気が強い』やら『黙ってたら可愛い』などといろいろ言われたサクラではあるが、この二人にも適用されるとは

思っていなかった。仲良くなればなるほど、性格が悪くなっていくように思えるのだ。
ぶんぶんと手を振り回す。一発でも殴らせろ、という思いでナルトに放った拳は、あっさりと受け止められた。
この二人、自分よりも強いのだ。性質が悪い。

「元気そうだな。サスケ、足きっちり持ってるか？」

元気じゃないです、とサクラは言い返すが、その言葉は木の葉が擦れる音に掻き消されているのだろうか、二人は全く反応しない。

「任せろ」

何を任せると言うのだろうか。即刻足を放してくれるということだろうか。
もしそうならば、サクラは感激の涙を雨のごとく降らせながら、家へと向かって一目散に走り出す自信がある。体力馬鹿二人に付き合っていられるほど乙女の身体は頑丈にできていないのだ。
サクラの脳内をきっちりと把握しているのだろう。
受け止めた拳を握りしめたまま、にぃと口角を吊り上げて、手放した。
逃げしてくれるのだろうか。
一瞬でも期待した自分を殴り殺したくなる。そんな奴なわけないではないか。
ナルトは印を組むと、影分身を一人生み出した。
ぼそぼそと影分身に話しかけ、「おっけー」ととても良い笑顔を浮かべて、影分身が印を組み始める。
それはとても見覚えのある印だった。アカデミーで習う初歩中の初歩――変化の術。
何をする気だろうか。

じっと見つめてしまった。
銀月に照らされる金色の髪がよく生えて、流麗に印を組んでいく姿がとても美しい。さきほどまでの悪戯を忘れてしまいそうになるほどの幻想的な光景。
だが――幻想は泡沫となって消え去ることになる。
変化の術にともなう煙とともに出てきたのは――サクラのよく見知った虫だった。
わさわさ、わさわさ。
多足を動かしながら、びちびちと羽を動かす茶色い物体。
それを手に掴むと、ナルトはサクラの顔の横に、置いた。
そして、笑った。白い歯が印象的だったが、今はそんなのどうでもいい。
問題は――

「じゃあ、腹筋やろうか」
「ひぃぃぃ！　ゴキブリやめてぇぇぇ！」

にじり、にじり、近づいてくる。
恐怖。
茶の間で飛び掛かられたトラウマが鮮明に蘇る。
サクラの動きは実に速く、的確なものだった。
足が押さえられて逃げられない。ならば、腹筋で起き上がるしかない。
「しゃーんなろー！」と男らしい雄叫びとともに、サクラは腹筋をした！　これが四百四十九回目である。ぴくぴくと痙攣する腹筋は煉獄の如き苦しみを与えてくるが、今味わっている恐怖に比べれば随分とマシだ。
「失礼な。ゴキブリじゃない。ゴキブリに変化した俺の影分身だ。ほらほら、地面には俺が待ってるぜ？」

「さっさとやれ」とサスケがサクラの広大な面積を誇るおでこを突く。
それだけで弱り切ったサクラは地面へと舞い降りていくが――視界の端に写るゴキブリのせいで再び腹筋を繰り返す。

「いやぁぁぁぁ！」
「まだまだ余裕だったみたいだな。はい、後五十回」
「この鬼！　悪魔！　変態！」
「サスケ――サクラの言っている意味がわからない。何て言ってるんだ？」
「腹筋六百回やりたいです、だろ？」
「なるほど」

じゃあ六百回行こうか、とナルトが呟くのをサクラは確かに聞いた。
そんなものを望んではいないのに！

「言ってない！　言ってない！　言ってない！」
「はい。黙って腹筋～」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

七班のメンバーによるサクラ虐待――もとい、修行は順調に進んでいた。
とある公園の中での、他人から見れば微笑ましい、サクラからすれば地獄のこの光景。
ほんのりと明るいそこでは人はおらず、七班の三人のみがいただけ。そんな意味不明な修行の景色をヒナタはおろおろとしながら見守っていた。
こんな夜更けにナルトの家に行くのも常識としてどうかと思った

し、お互いの性別を考えるとさらに常識外れだということを知り、当て所なくヒナタはうろついていたのだ。すると、どこからか聞こえてくる聞き覚えのある悲鳴。いったい誰が何をしているのだろう、と思って来たら、これだ。

凄く楽しそうにゴキブリをちらつかせているナルトと、泣きそうになりながら腹筋をするサクラ、無表情なのに笑いを抑えているようにしか見えないサスケ――アカデミーで一緒だった、卒業して以来はぱったりと友好のなくなった七班のメンバーだ。ずっと友達のいなかったナルトが誰かと一緒に笑っている姿は嬉しく、同時にとても寂しくもある。

自分とは違って、上手くやってるんだ。

置いてきぼりにされたような感覚を覚える。なんだか悔しくて、楽しそうにしてる姿が羨ましくて、ヒナタは意を決する。

話しかけなきゃ。置き去りにされる前に。

ぎゅっと拳を握ると、ヒナタはナルトたちのほうへ一歩踏み出した。

「あの、ナルト君……何してるの？」

木の葉では珍しい、紺碧の瞳がヒナタに向けられる。

少しだけ考え込むように頭を捻らせて、「あー」とうめく。きっと名前を思い出していたのだろう。

「ん、あ、あー、ヒナタか。これはあれだ。腹筋だ」

かすかな吐息を漏らしながら腹筋を繰り返すサクラを指差す。

「ナルト――だんだんとサクラが虫の息になってきたぞ」

「あれ？　あー、やりすぎたか。じゃあ次は腕立て伏せだな」

「ふざけんなぁぁぁ！」

「おっと、怒ったぞ」
「サスケ君！　信じてたのに！　信じてたのにぃ！」
「フン、ついやっちまっただけだ」
「ついで済まされるものですか……腰がぁぁぁ」

サクラの大声に驚いたサスケが足を放した隙に、サクラは一気に立ち上がった。
腹筋を酷使しすぎた反動で腰に激痛が走り、立つことすらままならず、がくりと地面に膝をつくことになってしまったが……。
そんな醜態を見逃すナルトではない。
屈託なく笑うと、介抱するかのようにサクラの腰を撫でてやり、サスケのほうを見る。

「背筋もさせなきゃ腰に悪いな。サスケ、うつ伏せにして腰を押さえてやれ」
「そうだな……腰に悪いのはダメだ。サクラ、背筋をやるぞ」

サクラは気づいた。
こいつら、楽しんでやがる。
私が悲鳴をあげながら苦しむ様を見物することで、楽しんでやがる！
外道にも劣る畜生どもを成敗したくなるが、生憎と身体が動かない。不健康状態だ。
悪が栄えた試しなし、と誰が言ったのだろうか。目の前で立派に栄えているではないか。
無力な正義に意味はなく、にへらと笑って懇願することしかできない。

「待って。もう限界だって……」

自らの残された生命力が如何に残り少ないかを切々と訴えるが――

「お前の身体が心配なんだよ……」

サスケの一言で陥落した。

心配、と言われた。

意中の人に我が身を心配されたのだ。

何かが致命的に間違っている上に、盛大に勘違いをしているようではあるが、鼻がつきそうなほどに顔を近づけられて、眼を覗かれたとしたら――魅了されるのは無理はないのかもしれない。

気づけば唇は自分の意志に反して「サスケくん――私、頑張る」と呟いていた。

恋の魔法。

それは僅か数秒で解かれることとなる。

「頑張れ」

にやり。

愛情に溢れていた憂いは掻き消えて、悪戯が成功した憎たらしい悪ガキのように笑うサスケが、目の前にいた。

ハメ――られた。

うわぁぁぁぁん、と抵抗するが、既にうつ伏せになっていて、サスケが腰にのしかかっている。逃げ道は閉ざされた。

「で、どうしたんだ？　こんな時間に出歩くなんて危ないぞ」

背後で行われている阿鼻叫喚の地獄絵図を爽やかにスルーして、ナルトはヒナタに振り返る。

「う、うん。でも、ナルトくんたちこそ何でこんな夜更けに、こん

なことを……？」

「あー」とナルトがぼやく。

ナルトの癖だ。何かを誰かに伝えるときに情報を理論立ててまとめるときの癖。だいたいが考え事をするときに出る。

「任務で誘拐された男の子を助けるためにある屋敷に侵入して――そこでサクラの身体能力が低いせいで危機に陥ったわけだ。サクラを鍛えねば！　ということで、任務が終わってすぐに筋トレをしている」

「――足が遅いせいで追っ手に追いつかれたのは謝るわ。けど、腹筋は関係ないでしょ……」

「いつ休んでいいって言った？」

「痛いっ！？」

サクラが口を挟むが、その間に背筋の動作が止まったせいで頭をはたかれる。

ほどほどにしとけよー、とナルトは笑いながら言うが、止める気はないようだ。釣られて、ヒナタも笑ってしまう。口元を手で隠して、くすくすと。

「とまぁ、そんなわけで七班のメンバーが集まってサクラに付き合ってるわけだ」

「仲良いんだね……」

「まぁな。初めてできた友達だし」

「ナルトなんか、大嫌い！」

「休むな」

「あうっ」

漫才でもしているのかと錯覚してしまうほどのやり取りは、失礼

だとわかっていても笑ってしまうものだ。
鬱屈とした日々で忘れ去っていた笑顔を、ナルトと会っただけですぐ取り戻せたことに驚く。
才能がないことを突き付けられる毎日はヒナタが自分で思っている以上にストレスとなっている。
そう――

「で、どうかしたのか？　随分と顔色が悪いみたいだけど」

ナルトが気づく程度には、顔に出ているのだ。
急に心配されたことによりヒナタは焦る。そんなつもりはなかったのだから。
「え、その……」と煮え切らない態度をとるヒナタに、ナルトはがしがしと髪を掻き毟る。

「場所変えるか？　うるさいのもいるし」
「どういう意味よ」

地獄耳。うるさい奴はちゃんと聞いていた。

「喘ぎながら背筋している人が隣にいると話に集中できないだろ」
「私も話しに……」
「サクラ」

背筋地獄から逃げ出そうとサクラは画策するが、サスケの一言で硬直する。
限界まで首を捻って、サスケの顔を覗き見る。
月に照らされた整った顔立ちは冷めているようで――それでいて、緩んでいた。

「サスケくん――楽しんでない？」
「気のせいだ。さっさとやれ」
「う、うぅぅぅぅ！」

うめき声をあげながら背筋を続けさせられるサクラを、ナルトは優しげに見守っていた。
その姿が、ヒナタにとって、とても違和感を覚えるのだ。
アカデミーでは常に切羽詰まったような表情を浮かべて、余裕がなかった。ずっと何かに夢中になり、無駄な時間を徹底的に省く合理主義者だったように思える。
それなのに、今は――

「ナルトくん――少し、変わった？」

それとも、変えられたの？
心にかげさす嫉妬の情念が浮かんでは消えていく。

「そうか？」
「明るくなったような気がする」

少しだけ考えるような仕草を見せた後に、ナルトは無邪気に笑った。

「……そうかもな。アカデミーよりも毎日が充実してる。楽しいよ」

楽しいよ。
酷く胸を抉る言葉だ。
きゅっと服の袖を掴んで、瞑目する。
ヒナタは――

「場所、移動していいかな？　聞きたいことがあるの」
「俺が答えられることなら何なりと」

◆

先ほどの場所からは少し離れた、公園の片隅にひっそりと佇むベンチに、ナルトとヒナタは腰を下ろす。
息を深く吸い、吐く。
何度繰り返しただろうか。
聞きたいことがある。けれど、聞いていけないことのような気がする。
ヒナタは逡巡する。
ちらりとナルトの横顔を見た。
目が合うと、口の端を歪めるだけの不器用な笑みを返してくる。
それだけのことなのに――この人なら怒らないかも、と思ってしまう。
「失礼なのはわかってる。けど、聞かせてほしいの……」
ぽつり。
「ナルトくんは、何で頑張れたの？」
聞きたいことは、つまり――
「忍術の授業ではずっと最下位だった。いくら努力しても――どの科目も一位になれてなかった。私から見て、一番努力してるのに……結果が出ないのに何で頑張れたの！？」
風が、吹く。

ざわざわと木の葉がざわめき、もがれた葉が空を舞う。
ひらひら、ひらひら。
真剣な眼差しを向けて、ナルトに言った言葉のように、宙に浮かぶ。
いつ、落ちるのだろう。
ヒナタの瞳をじっと見つめながら、ナルトは黙り込んでいる。
そして、嘆息した。

「……自分が頑張れないから、俺の頑張る理由を聞いてやる気出そうってか？」

図星だ。
妙な罪悪感に蝕まれながら、ヒナタはびくりと身体を震わす。
再び、溜め息。

「参考にならないと思うぞ。俺が頑張っていた理由なんてチンケなもんだしな」

それが知りたいの。
ヒナタは震える眼を意志で抑えつけ、ナルトの瞳を見つめた。
物好きな奴だな、とナルトは呆れる。

「簡単に言えば、『見下されたくなかった』かな」

語られるのはナルトの思考。その根源。

「才能がないと言い訳をして、努力を怠る奴がいた。そういう奴は誰からにも期待されない。進もうとしていないんだからな。だけど、それより下もいる。努力をしていても結果を出せない奴――まぁ、俺だな」

「苦しくなかったの？」

ナルトは、空を見上げる。

下弦の月が雲に隠れて、暗く妖しく光る星たちだけが在った。

「苦しくなかったって言えば嘘になるな。辛かったし、悔しかった。けど、目標があるから頑張れたし、何より舐められるのが嫌だった。俺の頑張る理由なんてそんなもんだよ。根が単純だからな」

苦笑混じりに、ナルトは言う。少し恥ずかしそうだ。

みんなには内緒だぞ、と締めくくる。

沈黙が落ちる。

聞き終えた感想は、ある。早く言わなきゃ、と無意味に焦る。

そんなとき、

「で、お前は何に挑んでるんだ？　ぼろぼろに泣き腫らした顔してさ」

心の隙間に入り込んでくるような、その台詞。

見透かされている、と思った。

涙が出そうになるが、ぐっと堪える。

目をぐしぐしと手で強く擦り、無理やり笑顔を浮かべる。

「何に、かな。わからない」

声が、震える。

「お前には才能があるんだから、大丈夫だよ」

「私には、才能なんかない！」

叫ぶ。
日頃大人しいヒナタが、柄にもなく大声を張り上げた。
ナルトは少しだけ驚いたように身を引いている。
やってしまった、と後悔すると、ヒナタは項垂れる。
「――ごめんなさい。大声なんて出して……」
自分が悪い。
悩みを聞いてもらっているのに、逆ギレするなどと……。
「才能がない、ねぇ。木の葉最強と謳われる宗家の娘が、そんなことを言うのか」
攻め立てるようなその言葉。
「誰もが望んでも手に入れられない才能を持ってるのに。そんなことを言うのか」
持たざるものの代弁。
「ナルトくん……？」
何を言われているのか理解できなくて、理解したくなくて。
ヒナタは怯える。身体を竦めた。
「その目は何だ。才能だろ？」
「けど、私には……」
「柔拳が使えない。体術の才能がないからってか？　宗家の娘は言うことが違う」

ぎりり、と軋む。
何かが音を立てて崩壊していく。
不意に、ナルトがヒナタの手を掴んだ。
「え？」とかすかな声が漏れる。そんなことを気にしないのか、ナルトはまじまじとヒナタの手を見る。
「綺麗な手してるな」
急に、褒められた。
顔が真っ赤になっていることが自覚できるほどに、熱くなる。
勘違いだ。
「何を照れてるんだ。嫌味だぜ？」
そう、ただの嫌味。
「努力をしてて、そんなに綺麗な手なものかよ。反吐が出る。やることやってから弱音を吐け」
身体を鍛えているものならば、手が綺麗などということはない。
拳骨には切り傷がつくし、手にはタコができては潰れ、分厚い皮が出来上がる。見た目は決して良くはならない。
お前は努力なんかしていない。
ナルトはそう言っているのだ。
「私は――努力してる！」
「へぇ？　じゃあ見せてみろよ。お前の努力ってやつをよ」
息せき切って立ち上がり、ヒナタは叫ぶ。
自分のすべてを否定された。これまでの努力を全て否定されたの

だ。
ナルトも同様に立ち上がり、ヒナタの前に立ち塞がる。
「軽く捻ってやる」
侮蔑すら混じったその台詞。
心の支えにしていた人物の胸を抉るような言葉に――ヒナタは我を失った。
「う、うあぁぁぁぁっ！！」
混乱した頭とは違い、身体は修練の型通りに動く。
外部を壊す剛拳とは違う、柔らかな足運び。
関節を連動しての足から拳へと力を集約するものではなく、ただ、身体の運ぶだけ。運体。
強く踏み込むのではなく、リズムの隙間を掻い潜る歩法は相手の認識をずらし、容易に懐に入り込む。
そこは柔拳のテリトリー。
流れるような、力のない動作で拳は運ばれて、ナルトの腹に、触れた。
「良い拳してるじゃねぇか……」
「なんで避けないの……？」
歯を噛み締めて、ナルトはヒナタの攻撃を受けた。
ヒナタは動揺する。
思い切り、殴った。
柔拳は内部に損傷を与える武術。打撃のときに触れたナルトの――よく絞り込まれた身体を持ってしても、激痛が走るはずだ。内臓は鍛えられないのだから。

けれど、そんなことは億尾にも出さず、ナルトは歯を剥き出しにして笑うだけ。

「才能あるよ、お前。俺が保証してやる。俺に保証されたからって何の意味もないだろうけど――やるだけやってみろよ」

言葉が吐き出される口の端からは、かすかに零れる血の雫。

「あ、血が……血が……」

「気にすんなって。そこらのヘタレとは身体の造りが違うんだよ」

ドン、と胸を叩く。そのせいで咽ているのが何とも言えない。ヒナタを余計に心配させるだけだ。

ごほごほ、と息を吐きながら、ナルトは何かを思いついたかのよう。

「……あ、そうそう、ヒナタ。躓いたら自分にこう言い聞かせろ」

それはヒナタがもともと聞きたかった言葉。

「俺は天才だってな！　何度も呟くと自分が天才になったと錯覚できる。気休めだけどな」

陳腐極まりない『天才』という名詞。

だけど、わかりやすい。

自分の可能性を決めつけないためには、それが一番いいんじゃないか、とヒナタに思わせるくらいには――わかりやすかった。

俯き、震える。

「ちょっと！　なんでヒナタが泣いてるの？　ナルトォ……？」

ヒナタの状況を知ってサクラは走って来た。微妙に身体のバランスがおかしい。腰をかばうように走る姿はかなり情けないものがあった。

「何もしてない。ところで背筋はどうした？」
「終わったわよ！」
「次は腕立て伏せだ」

がしり、とサクラの肩に強く置かれる手はサスケのもの。
おそるおそる振り返り、サクラは情けない表情を浮かべる。

「サスケくん……？　私、もう、立つのすらキツイんですけど……」
「知らん」
「いやぁぁぁぁ！」

絶叫しながら引き摺られていくサクラは哀愁漂っている。
ナルトの視界に入ったサスケから悪魔のような尻尾が伸びているように見えたのは錯覚だろうか。

「――さすがにかわいそうだな。助けてやるか」

思わず呟いてしまうほどには、ナルトはサクラに同情していた。
そもそも元の発端は自分なわけだし……。
サクラたちのほうへ歩き出そうとしたとき、ヒナタのことを思い出す。

（そういえば、泣いてるんだっけ）

慰めるべきか、と悩みながらヒナタのほうを見ると、

「ナルトくん……ありがとう。ちょっと、元気出た」

ひまわりのように笑っているヒナタがいた。

目元が赤く腫れていて、やっぱり泣いていたのだろうけど、悲しみは見えない。

大丈夫だな、とナルトは思う。

「そうか？　それならいいけど……まぁ悩みがあればいつでも来いよ。話相手くらいにはなってやるからさ」

「うん。じゃあ、帰るね」

「帰るのか？　これからみんなを誘って一楽に行くつもりなんだけど……」

「修行――したいから」

視線が交錯する。

お互いに、はにかむ。

「そっか。応援してる」

「うん！　またね！」

「またな」

そうしてヒナタは帰路へとつく。

「サスケ！　サクラ！　一楽行こうぜ。今日は俺の奢りだ」

「あ、サスケくん！　ナルト、ナルトが呼んでる！」

「チッ、仕方ねぇな」

アカデミー時代では考えられないほどのナルトたちの明るい声を聞きながら。

波の国・その壱

1.

任務受付所。

古風というよりも古びたといったほうが正しいほどの家屋の中、それはあった。

『任務受付はこちらまで』と書かれた幕を下げているカウンターには受付の忍――受付管理忍（かんりにん）が着座しており、受け付けた依頼をA～Dの難易度に振り分けて、任務に適した忍者たちを指名していく。

管理忍たちの中で、一際目立つ笠を被った老人がおり、ナルトたち七班の任務をどれにしようかと頭を悩ませている。笠のせいで陰となり、顔は見えないが、その手は長い年月を生きてきた大樹のように、年輪が重なっている。細く、薄く、力の感じられない老人は――しかし、頼りなさとは無縁の存在。

この老人こそ、木の葉の里における最高権力者。現火影の猿飛その人であった。

火影はパイプを咥えて、煙を吹かし、七班の任務履歴を見ていた。

「さて！　カカシ隊第七班の次の任務は……と、ふむ、前回からCランク任務につき始めたのか？」

目に止まったのはソレだ。

まだ下忍になって間もないというのに、Cランク任務でも危険な部類に入る『敵地への潜入任務』をこなしている。しかも、人質の奪還も同時にこなさなければならない。その任務をほとんど上忍の手を借りずに達成してしまっている。

「えぇ、こいつらDランク任務だと俺がいなくても任務こなしちゃ

うんで……。Cランクくらいじゃないと俺としてもやることないんですよ」

アカデミー時代、落ちこぼれと謗られていたナルトが、任務で活躍したと書いている。仲間とも上手くやっているようだ。

「ほらほら、私のこと褒めてるわよ」

「はいはい、さすがはサクラ様だな。我らがリーダー！　サクラ様！」

「正面突破で囮を務めたのは俺だ」

「な、何よう！」

「いい加減にしとけ、コラ」

「はーい」

子供が三人並んで茶化しあう。それを先生に咎められる。

ありふれた光景ではあるが、ナルトにとってはそんな日常すら手に入れがたいものだったことを、火影は知っている。それなのに――手に入れたのか。

歳を経たせいか、涙もろくなりつつあることを自覚しつつ、火影は慎重に任務を選ぶ。

手元にある数多くの中から任務を選ぶのはそれなりに難しい。だが、慣れた手つきで素早く資料を展開し、入念にチェックしていく。

これだ。

そう思えるものが目に止まった。

「では、次もCランクの任務をやってもらう……ある人物の護衛任務だ」

護衛任務。

潜入任務よりは幾分か楽ではあるが、それでも下忍にとっては難

易度の高い任務だ。
依頼人を四六時中守らなければならない。敵はどこにいるかわからない。極限状態に追い込まれる。
いつ来るかわからない脅威による圧力に負けない忍耐力と急な騒動に対しても落ち着いて対処できる精神力、判断力が必要になってくる。

「へぇ？　連続でCランク任務か。俺たちついてるな」
「連続でしんどいのについてる？」
「俺たちの実力が認められてるってことだろ？　出世頭じゃねぇか」
「そうなのかなぁ？」

サクラが疑問を持つが、ナルトは断言する。
子守や買い物のお使いなどの退屈で死にそうになる任務よりは、いくらか危険のあるCランク任務のほうがマシだ。んー、と微妙な顔をしながら細い首を傾げる。

「で、どんな奴の護衛なんだ？」

サスケが火影に鋭い視線を向ける。
そわそわしているのが見て取れる。護衛任務という響きに身体が疼いているのだろう。
火影はにこやかに笑い、依頼人との仲介を担当する仲介忍を呼び寄せる。

「そう慌てるな。今から紹介する。入って来てもらえ」

任務受付所の隣にある急な依頼を持ち込んできた人を待たせるための部屋。
木造の分厚い扉が床と擦れる不愉快な音を立てて、開いた。

「なんだァ？　超ガキばっかじゃねーかよ！」

出てきたのはうさんくさい爺さんだった。

すぼめられた双眸は七班を見下ろしており、吐く息はとても、臭い。片手には一升瓶が携えられていて、大きな背嚢を担いでいる。一見して物乞いに見えないこともない。

ぷっはぁ。

一息に酒を飲み干すと、思い切りゲップを放つ。下品極まりないその動作に、サクラは思わず顔を顰めてしまう。ナルトやサスケも同様だ。

これを守らなきゃいけないのか。

考えるだけで、少し切なくなる少年少女たち。

そんな態度を見破っているのだろう。爺さんはだんだんと不愉快な感情を顕にしていく。

「とくに……そこの一番ちっこい目つきの悪いクソガキ。お前、それ本当に忍者かぁ！？　お前ェ！」

誰のことだろう、とナルトは一瞬考え込んで、両隣を見る。

サスケとサクラは少し高い位置からナルトのことを見下ろしていた。

つまり、

「……あぁ、俺のことか。忍者か？　って聞かれてもな。忍者に依頼する場所に普通のガキがいるはずがないだろ？」

今日は上下ともにお気に入りの迷彩服だ。センスがズレているのかな、とナルトは思案する。

確かに迷彩服はおかしいのかもしれない。しかし、ウチハの絵を

プリントしているサスケよりは幾分かセンスがマシだという自負もあるし、つい先日は「格好いい服着てるわね」とサクラに褒められたばかりなのだ。
いや、逆にこうは考えられないだろうか。ダサいとかではなく、忍者らしくないということかもしれない。
ならば、どんな服装が忍者らしいのだろう？
ナルトの思考は完全に迷走していた。
そんな困った子を放置して、依頼の話が進んでいく。
ぶつぶつと呟くナルトを呆れるようにサクラとサスケは見守るが、放っておく。後で説明すればいいことなのだから。

「フン！　わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃわい。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらう！」
「すぐに出発するそうだ。荷造りが終わり次第、任務開始だ」
付け加えるように火影が補足する。

「わかった」
七班のメンバーは声を揃えて返事をした。

◆

木の葉の里と外界を遮る天高く聳える門扉。
地響きが起こったかのような大地を揺るがす騒音を立てながら、開かれた。
「これが外か」

呟き――ナルトは一歩、踏み出した。
そこには世界がある。
硬く閉ざされた籠の中ではなく、外。視界いっぱいに広がる道は果てが見えず、林立した木々の数も数えきることができないだろう。
天を仰ぎ、大きく息を吸う。
いつだってご機嫌な太陽が、今日は自分を祝福するかのようにいつも以上に輝いているように見えた。
浮き立つ心は抑えられず、思わず口笛を奏でてしまう。
日頃からどこか冷めているナルトらしくなく、楽しげに振舞う姿に違和感を覚える。

「珍しく浮ついてるわね」
「外に出るのが初めてだからな。ちょっとだけ楽しみにしてる」

サクラの言葉に機嫌よく答える姿は、どこか幼さを残しているように見えた。
大人びた言動が目立つナルトだからこそ、微笑ましく感じる。そう言えばこいつって同い年なのよね、と変なところで納得するサクラがいた。
にやにやと頬を綻ばせている姿は、少し不気味だ。屈託なく笑いながら、ナルトはサスケににじり寄っていく。

「なぁサスケ。お前何持ってきたんだ？」
「何って？」

妙に浮かれているナルトの言動の意味をわかりかねて、サスケは問い返す。

「おやつだよ。おやつ。何か持ってきたんだろ？」
「……コアラのマーチだ」

「へぇ、俺はポッキー持ってきたんだ。後で分けようぜ」
「あ、私も入れて。ほら、バナナ。バナナ持ってきたの」

遠足気分だ。
小さな背嚢を担いでいる。その中にはお菓子も含まれているのだろう。
どうしたもんだろう、とカカシは三人を見下ろすが、まぁいっか、と帰結する。無駄に緊張されるより、適度にリラックスしている今のほうが余程良い。
だが、依頼人のタズナからすれば不安で仕方なくなる。
「おい！　本当にこんなガキで大丈夫なのかよォ！」とつい口が出てしまうのも仕方ないだろう。殺伐とした雰囲気を予想していたのに、和気藹藹とした子供たち。命を狙われる立場としてはもう少しシャキっとしてほしいと願うのはとても普通だ。
そして、依頼人を宥めるのは年長者の仕事だ。

「ハハ……上忍の私がついています。そう心配いりませんよ」
「そうだぜ。無駄に緊張しても結果がついてくることはない。疲れるだけだ。大きく構えてろよ」
「ガキが生意気なことを言う……」

ポッキーを齧りながらそんなことを言うナルトを、タズナは睨みつける。
仮にも命のやり取りをしたことがあるナルトは、一般人の怒気など軽く受け流し、お菓子をつまんでいた。
浮かれているのはわかるけれど、態度が悪すぎる。おそらくだけど、依頼人に馬鹿にされたことを根に持っているのだろう。
怒り心頭でイライラとし始めたタズナ。サクラはぎくしゃくとした空気を敏感に察知する。
ガキね。

子供っぽいナルトの姿に苦笑しつつ、サクラは空気をやわらげるためにタズナに話を振ることにした。

「ねぇ、タズナさん……タズナさんの国って”波の国”でしょ？」

「それがどうした」

不機嫌な声色。

機嫌を治すことは容易ではないことを確認し、サクラはカカシを話に巻き込むことに決めた。目が合った瞬間に、俺は嫌だよ、と言わんばかりに首を振ったことなど無視だ。

「ねぇ、カカシ先生……その国にも忍者っているの？」

「いや、波の国に忍者はいない。だけど、たいていの他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在し、忍者がいる。その中でも”木の葉”、”霧”、”雲”、”砂”、”岩”は”忍び大国”とも呼ばれてる。

で、里の長が”影”の名を語れるのもその五カ国だけでね。その”火影”、”水影”、”雷影”、”風影”、”土影”の――いわゆる五影は全世界各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者たちだ」

七班の三人は少しだけ考え込み、疑問を持つ。

ナルトの口角は引き攣り、サスケは鼻息を鳴らし、サクラは、

（あのショボイジジイがそんなにスゴイのかなぁ……なんか胡散臭いわね）

などとかなり失礼なことを考えながら、そんなことはおくびにも出さず「へー、火影様ってスゴイんだぁ！」と感嘆してみる。

「……お前ら、火影様のこと疑ったろ？」

バレバレであった。
特にサクラは顕著で、びくりと身体を震わせる。愛想笑いに近い作り笑いは凍りついてしまった。
やっぱりね、とカカシは嘆息する。普段の火影の姿を見ていてそこまで凄いと思えないのはカカシも同感だ。目の前で実力を見たことがないと、あれは信じられないだろう。

「ま……安心しろ！　Ｃランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ」
「じゃあ外国の忍者と接触する危険はないんだァ」
「もちろんだよ、アハハハ！」

カカシとサクラの談笑を聞いているタズナの顔色が、変わった。
罪悪感の滲む――罪人のような不吉な色。
ナルトとサスケは気づき、違和感を持つ。だが、とくに追求すべきことはないので、勘違いか、と勝手に結論する。
何より、もっと気を払わなければならないものが出てきたのだから。
水溜り。
延々と続く交易路は整備された土の道なのだから、水溜りがあること自体はおかしくない。
だが、ここ数日、雨など降っていないのだ。
七班の三人は笑いながらも視線で確認し合い、頷く。
水溜りを通り過ぎたときに、それは起こった。
水たまりから、大きな鉤爪が目立つ、歪な人影が二つ現れたのだ。
「なに！？」
カカシはその二人の鉤爪を繋ぐ鎖に絡めとられて、身動きがとれ

なくなる。
それは一瞬の出来事だった。
「一匹目」
斬殺。
いや、それは正しくないかもしれない。より的確に表現するならば、細切れにされたというべきだろう。
肉片になるほどに鉤爪で切り裂かれたカカシは、間抜けな表情のまま、地面へと倒れ伏した。
だからこそ、おかしい。
「サスケくん！　ナルト！　卍の陣よ。タズナさんを守るわ！」
「オッケー」
「了解」
敵から見れば一番手強いと思われる忍者を殺したのに、残るガキどもは焦る様子すらなく、むしろ冷静に事に当たっている。
タズナを中心に、ナルトたち三人は防御の構えをとる。中央にいる依頼人を敵の攻撃から守る防壁陣。
関係なく、敵二人は襲い掛かってくるわけだが。
よく修練をされたことがわかる俊敏な動き。鉤爪からは何かが滴っており、おそらく毒物だろうことも容易に見て取れる。
そして、狙いは――
「二匹目」
タズナへ向かう敵が二人、サスケとナルトがが蹴り飛ばす。
逆方向に蹴り飛ばされた二人は即座に体勢を立て直すが――

「サスケくん！　突っ込まないでっ！」
「……そんなこと言ってられるか」

サクラの制止も聞かず、サスケは自分が蹴り飛ばした敵へ向かって疾走する。
敵も速かった。
しかし、サスケのほうが数段速い。
鉤爪を振り下ろす――サスケからすれば止まって見えた。
踏み込み、距離を一瞬で潰す。
そこからはただの作業だ。
肩へと苦無を突き刺して、相手の攻撃を妨害。そして、空いている手で再び苦無を取り出して、首を掻っ切る。
血飛沫。
鮮烈な紅色で染められる景色は壮観だ。
敵からすれば仲間の死亡。
何の感慨も湧かないのか。冷徹なまでに表情を動かさず、敵はタズナへと向かっていく。

「ナルト！」
「全く……サクラ様は人使いが荒い」
「うっさい！　さっさとやる！！」

サクラの命令に、渋々と言ったようにナルトは印を切る。
敵は印を切るナルトに警戒したのか、逡巡する。全く慌てる素振りのない七班に対し、ここで初めて脅威を抱く。
それが、穴となる。
勝負を終えたサスケのことを忘れていたのが敗因だ。

「バーカ、俺は囮だよ」

そんな声。
そう、気づけば敵は身体の自由を封じられていた。
一瞬の迷いを覚えたときに身体が硬直した。その隙を狙ってのサスケの放った苦無に巻き付けられたワイヤーに身体の自由を奪われていたのだ。
大きく口を、開く。舌を、伸ばす。
それの意味することは……

「あんたにまで死なれたら聞きたいことも聞けないじゃない。死なれたら困るのよ」

冷徹に言い放たれる言葉。
そして、口に入れられた異物。
それはナルトの拳で。

「幻術・奈落見の術」

敵は、夢に堕ちた。
圧倒的な戦力差。
死に果てた敵と、悪夢にうなされる敵――どちらも共通していることがある。
霧隠れの忍者がつける額当てをつけていたのだ。
吐き出された吐息は誰のものか。
敵の忍者に噛みつかれた唾液塗れの拳をハンカチで拭きながら、ナルトは言葉を漏らす。

「で、忍者と戦闘はないって……誰が言ってたんだ？」
「さぁな。記憶力には自信がなくて、いまいち覚えてない」

ナルトとサスケのやり取り。

それは嫌味だ。静観していた――見方によってはサボっていた上忍への当てつけ。

「誰も俺の心配してくれないのね……」

答えたのはカカシだ。

肉片のように見えたのは変わり身に使われた丸太の残骸。

生きていたと知って驚いたのはタズナだけであり、七班のメンバーは顔色一つ変えない。

「私たちが三人がかりであれだけ罠にかけようとしても引っかからないんだもん。これくらいで死ぬなんて思えないわよ……」

「演技が下手すぎる」

「同感だ」

「……へこむよ？」

ある意味では信頼とも呼べるものなのだが、カカシは素直に悲しくなった。

胸に去来するこの想いは何なのだろう……。

最初はあれだけ可愛かった三人が――あれ？　可愛かった姿を思い出せない。よくよく考えれば最初からこんなものだった。

夢に見ていた先生生活。それは案外、世知辛いものなのかもしれない。

「で、先生……話が違うみたいだけど。忍者との接触はないって言ってませんでした？」

現実の厳しさに悟りを開きそうになっていたカカシを現世へ戻したのはサクラだった。

ぼんやりと空を見上げていたことから一転して、急に真面目な顔

へと豹変する。

「それは俺も聞きたくてね。タズナさん」

「何じゃ！」

間。

相手の心を読むかのように、カカシはタズナの瞳をじっと見つめて――

「ちょっとお話があります」

反論は許さない、との意味を込めて、語調を強く、言った。

◆

公道の両端に生い茂る木々に、さきほどの敵の片割れは縛りつけられていた。

自害する気も失せたのか、項垂れるようにしている姿は哀れを誘う。

しかし、ナルトたちからすれば命を狙ってきた敵である。同情の余地はない。全員で囲み、万が一にでも逃亡を許さないという意志を持って、尋問を行っていた。

「こいつら霧隠れの中忍ってとこか……いかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ」

「何故、我々の動きを見切れた？」

それがわからない。

完璧に水溜りに変化していたはずだ。見た目でバレたとは思えない。

だが、それこそが見つかった原因なのだ。
「数日雨も降っていない今日みたいな晴れの日に、水たまりなんてないでしょ」
うんうん、とナルトやサスケ、サクラも頷く。
全員に発覚している不意打ちなど不意打ちではない。罠へと飛び込むようなものだ。
気づいていなかったのはタズナだけ。
「あんた、それ知ってて何でガキにやらせた？」
タズナの疑問ももっともだ。
もし、仮に――ナルトたちがあっさりと敵に負けたら？　最終的に被害に合うのは自分の命。守るべき対象を放置して、自分の部下に事を当たらせる。それはとても危険なことであり、依頼人であるタズナからすれば不愉快なことであるには違いない。
だが、
「私がその気になればこいつらくらい瞬殺できます。ですが、知る必要があったのですよ……この敵のターゲットが誰であるのかをね」
「どういうことだ？」
「狙われているのはあなたなのか。それとも、我々忍のうちの誰かなのか……ということです」
つまりは、こういうことだ。
「我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず……。

忍者が襲ってくるとなると、Bランク以上の任務だ。依頼は橋を作るまでとの支援護衛という名目だったはずです。
敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定されたはずです。なにか訳ありみたいですが、依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね」

お前のことは信用できない、とカカシは言っている。
当然だ。
情報は命を左右する。それを意図的に隠す。許されることではない。
そのせいで危険に陥るのは依頼人だけではなく、真実を知らされていなかった忍者も同様だ。

「任務のランクなんかどうでもいい。気にいらないのは依頼人が嘘を吐いているという一点だ」

ナルトも、カカシと同意見だ。

「あんた……まだ何か嘘ついてるんじゃないだろうな？」

吐き捨てるような言葉には多量の毒が含まれていた。
致命的なのは、依頼人との信頼関係が結べないということ。一度でも嘘をつかれたら、自然と思ってしまう。
まだ何か隠していることがあるんじゃないだろうか？
そうなると、もうダメだ。命を賭けて守れなくなる。

「そうね。依頼人との信頼関係すらまともに構築できないような任務は危ないわ。サスケくんはどう思う？」
「――他国の忍者との戦闘に興味はある」
「バトルジャンキーかよ」

「お前だって同じのはずだ。見てたぞ」

サスケは、確かに見ていた。

わざと囮になるという危険な役を、ナルトは――

「――笑ってただろ？」

「さて、ね」

言葉を濁す。

他国の忍者との戦闘に興味がないと言えば嘘になる。

だが、ナルトにはそれ以上に大切なものがあった。

「……先生さんよ。話したいことがある。依頼の内容についてじゃ」

三人の会話を黙って見ていたカカシは、タズナに意識を向ける。

「あんたの言う通り、おそらくこの仕事はあんたらの任務外じゃろう。実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている」

「超恐ろしい男――誰です？」

ふてぶてしいという他ないほどに面の皮が篤そうなタズナが、心底怯えた表情を見せる。

脂汗が滲み出る渋面は、恐ろしい男がしでかしたことでも思い出しているのか。恐怖の色が濃く浮き上がっていた。

「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃろう……海運会社の大富豪、ガトーという男だ！」

その言葉に、聞き覚えはある。

「あのガトーカンパニーの！？　世界有数の大金持ちと言われる……」
「そう……表向きは海運会社として活動しとるが、裏ではギャングや忍を使い、麻薬や禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りといった悪どい商売を生業としている男じゃ……。
一年ほど前じゃ……そんな奴が波の国に目をつけたのは……財力と暴力をタテに入り込んできた奴はあっという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったのじゃ！
島国国家の要である交通を独占し、今や富の全てを独占するガトー……そんなガトーが唯一恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ！」
「……なるほど。で、橋を作ってるオジサンが邪魔になったってわけね」
「じゃあ、その忍者たちはガトーの手の者……？」

サクラとサスケも頷く。
だが、この時点で不思議に思う事がある。
ガトーは波の国からすれば害毒だと言ってもいいだろう。ならば大名などの支配層からも忌み嫌われている。
それならば、お金を出し渋るということが考えられない。ガトーがいるほうがよほどに損をすることになるのだから。
「波の国は超貧しい国での……大名ですら金を持ってない。もちろんワシらにもそんな金はない。高額なBランク以上の依頼をするような……」

それが、現実。
出し渋り理由は簡単だった。
懐に金がない。それ以上に明快な答えはないだろう。
そして。

「まぁ、お前らが任務をやめればワシは確実に殺されるじゃろう。だが、なーに！　お前らが気にすることはない。ワシが死んでも、十歳になるカワイイ孫が一日中泣くだけじゃ！」

タズナは笑いながら、言った。

「あっ！　それにわしの娘も木の葉の忍者を一生恨んで寂しく生きていくだけじゃ！　いや、なにお前らのせいじゃない！」

相手の同情を引くために、あえて軽快に笑ってみせた。

サクラやサスケ、カカシなどの表情が曇っていく。

だが、一人だけ絶対零度の如き冷たい視線をタズナに向けている奴がいる。

「あぁ、俺たちのせいじゃないな。お前たちが無力なせいだ。それに、恨むならガトーを恨め。筋違いだ。先生、帰ろうぜ」

ナルトは静かに怒っていた。

タズナの言葉は、ナルトの逆鱗に触れていたのだ。

「……ナルト？」と急に機嫌が悪くなったナルトに話しかけるサクラだが、そんなものを相手にせず、タズナを睨みつける。

「なんで俺が命を賭けなきゃいけないんだ？　こんな見ず知らずの爺さんのために、なんで命を張らなきゃいけないんだ。あまつさえ見たこともない、聞いたこともない娘や孫に恨まれるなどと言う……何の駆け引きだ？　下らない。虫唾が走る」

「ちょっと！　ナルト、言い過ぎよ！」

サクラの制止も意味はなく、怒りは冷めることはない。

紺碧の双眸は泣きそうな色を浮かべながら、サクラの姿を捉えている。
ドキリ、と胸が高鳴ったのは何故だろうか。
「言い過ぎなのか？　サクラ、俺たちはこの爺さんのせいで一度死に掛けてるんだぞ？　下手をすれば、さっきの霧隠れに殺されてるんだぞ？　それをわかっていて、言っているのか？」
「……それも、そうだけど」
ナルトの言葉は、正論だ。
否定することはできない、
何より――
「俺は、反対だ。こんな胸糞悪い爺さんのために使う命はないし、何より――俺の大切な友人がこんな爺さんのために死ぬかもしれないと思うだけでぞっとする」
反対する理由は友達を想ってのこと。
自分の命を使うのも嫌だし、友達の命を使うのも嫌だ。
その感情を理論武装し、正論を言っている。
ナルトは怖いのだ。
自分たちを騙す、信頼できない依頼人のせいで命を危険に晒すのが。晒されるのが。とてつもなく恐いのだ。
誠意が、感じられない。
言っている意味を正しく理解できるサクラは――
「サスケくんはどう思ってるの……？」
「俺は自分の力を試したい。そこの爺さんなんてどうでもいい」
悩む。

サスケはどちらでもいいと言う。
しかし、サクラは――助けてやりたいと思ってしまった。
「サクラは、どうなんだ？」
「私は……」
言葉にできず、言い淀む。
きゅっと唇を引き結び、視線を泳がせる。
そのときだ。
黙って話を聞いていたタズナが、地面に膝を着いた。
「……確かに、わしの態度が悪かった。すまん。訂正させてくれ」
額を、地に擦りつける。
「わしを……わしの家族を……わしの国を……助けてはくれんか。頼む」
さきほどまでとは違う。心からの懇願。
ナルトは唾を吐き捨てる。
相手が謝罪し、赦しを請うてきた。これ以上責めることはできず、しかし、心の中に怒りは消えることはない。
どうすればいい。どうしたらいい。わからなくなる。
むかむかした気持ちは顔に表れ、人相が悪くなっていく。
「ナルト、お前らしくもなく熱くなりすぎだ。頭を冷やせ」
ぽふん、と大きな手が頭に下ろされた。
「ま！　仕方ないですね。乗りかかった船ですし、国へ帰る間だけ

でも護衛を続けましょう」

ぱぁっ、とサクラの表情が明るくなる。サスケは戦いに飛び込めることを喜び、ナルトは舌打ちをする。

膨れ上がった感情を持っていける場所がない。

「……恩に、着る」

感謝の言葉。

反して、ナルトの心はささくれ立っていた。

波の国・その弐

2.

濃霧漂う河川を、船に乗って横断する。
何かから隠れるように、船についたエンジンを使わずに櫂で漕ぐのはどうしてだろうか、ナルトはふとそんなことを思うが、ここはすでにガトーの領域。波の国の国境線。
既に、敵地なのだ。
つまり、敵がいる。いつ難敵が来るとも知れず、普通に考えれば先ほどの中忍よりも更に強い忍者が襲ってくることは容易にわかる。
それなのに、あえて危険を冒す選択をしたカカシのことが不思議であった。

「よーしィ！　わしを家まで無事送り届けてくれよ」

陸地についたタズナの第一声に「はいはい」と呆れたようにカカシは返す。
濃霧は抜けて、視界が晴れ渡る。やや湿度が高く感じるのは道の脇に川があるからだろうか。
さらさらと流れるものは透明度が高く、水底まで目に写る。見ているだけで熱くなっている頭が冷めていくようだ。
そして。

「……先生」
「ナルト、お前も感じるか」

サスケとナルトはホルスターに手を当てて、いつでも苦無を取り出せるように身構える。

不穏な視線を感じたのだ。
身体中に突き刺す、気持ちの悪いソレはこちらに対して明確な敵意を持っている。
「え、え、ナルト――どうしたの？　サスケくんも……」
サクラはわからないながらも、現状を把握する。
つまり。
「お出迎えだ」
「だから、嫌だっつったんだよ……」
道は川と木々に挟まれている。
視界を遮る草藪から、突如として、巨大な何かが飛来して来たのだ。
それは回転しながらナルトたちに襲い掛かるが、七班は素早く回避する。タズナはカカシが引っ張って、助けた。
そのままの勢いで木に突き刺さったそれは、名状しがたい。あえて言うならば、鉄塊だろうか。段平にも見えなくはないが、やはり、鉄の塊のようにしか見えない。
そして、分厚い幅広の刃の上には痩身の――上半身裸の、怪しげな男がいた。
筋骨隆々というわけではないが、鍛えこまれた四肢。細く長い身体は力強さとともに、しなやかさを感じさせる。まさに、機能美だ。
美しき肢体を存分に露出する――変態と形容するしかないその男は顔の下半分を布で隠しており、奇怪さを引き立たせている。
誰だ、こいつ。
七班の全員は思ったし、タズナも思った。尋常な輩ではないだろう。

「へーこりゃこりゃ、霧隠れの上忍――桃地再不斬君じゃないですか」

カカシは、知っていたようだ。

少しだけ緊張した面持ちから、敵の実力を予測する。

ナルトは気づく。俺たちが相手にできる敵じゃないな、と。

サスケとサクラも気づいているのだろう。

じりじりと後ろ足で退却しながら、タズナを背に守っている。

カカシは、笑う。

「下がってろ、お前ら。こいつはさっきの奴らとは桁が違う……こいつが相手となると……このままじゃあ、ちょっとキツイか……」

片目を覆っている額当てに手を当てる。

「写輪眼のカカシと見受ける。悪いが、じじいを渡してもらおうか」

「卍の陣だ。タズナさんを守れ。お前たちは戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ」

放たれる言葉はこれだけだ。

「再不斬……まずは、俺と戦え」

額当ての裏から出てきたのは車輪のような模様が浮かぶ瞳だ。血継限界と呼ばれる特殊な瞳。

「ほー、噂に聞く写輪眼を早速見れるとは……光栄だね」

写輪眼の特性――それはサスケもよく知ること。

「写輪眼――いわゆる瞳術の使い手は全ての幻・体・忍術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つという……
写輪眼はその瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の一つだ。しかし、写輪眼の持つ能力はそれだけじゃない」
「ククク……ご名答。ただそれだけじゃない。それ以上に怖いのはその目で相手の技を見極め、コピーしてしまうことだ
俺様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、携帯していた手配帳（ビンゴ・ブック）にお前の情報が載ってたぜ……
それにはこうも記されてた。千以上の術をコピーした男――写輪眼のカカシ」

そんなにスゴい忍者だったの！？　とサクラは驚いてしまう。
強い忍者だというのはわかっていたが、いつも『イチャイチャパラダイス』などというエロ本にうつつを抜かしているような男――それがカカシだ。それなのに他の里の忍者にすら広く知れ渡る実力を持つという……。
まじまじとカカシを見てみた。やっぱり信じられない。サスケも同じく、だ。
うちはの一部の家系にしか表れないそれは――うちはと名乗らないカカシが持っていていいものではない。
正統血統であるサスケは疑惑の瞳をカカシに向ける。
だが、カカシは意図的に無視しているのか、決して視線を合わせようとしない。
「さてと、お話はこれぐらいにしとこーぜ。俺はそこのじいさんを殺んなくちゃなんねぇ」
再不斬は七班を見下ろした。
タズナを守るようにナルトとサクラ、サスケが三人で立ち塞がり、カカシが一番前で構えている。

譲る気は、なさそうだ。

「つっても、カカシ――お前を倒さなきゃならねェーようだがな」

鉄塊を木から抜き放つと、再不斬は川の上に飛び降りる。

不思議な現象。

再不斬は水の中に沈み込むことなく、水の上で平然と立っていた。

驚く七班のメンバーを置き去りにして、事態は進む。

次々と切られる印。練り込まれるチャクラは膨大なもの。行使される忍術は――

「忍法・霧隠れの術」

足元に流れる清流から霧を生みだす忍術――【水遁・霧隠れの術】。

五感の中で最も比重の高い、視覚。それを遮られる恐怖とはどれほどのものか。

しかし、それは敵も同じこと……などということはない。

「まずは俺を消しに来るだろうが……桃地再不斬――こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術(サイレントキリング)の達人として知られた男だ

気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。俺も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない。お前たちも気を抜くな！」

無音殺人術。

かすかな音すら残さずに敵に近づき、急所を狙う――忍者が使うに相応しい技術。その達人。

位階が違う。

『八か所』

ぼんやりとした――どこから発されているのわからない声が、耳に届く。

『咽頭・脊柱・頚動脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓……さて、どの急所がいい？』

くつくつと笑う声がこだまするも、位置を特定することができない。

位置を気取られずに喋る特別な声帯法だろう。相手に恐怖のみを与える。

つまり、急所を潰されて殺される姿を想像させるのだ。少しでも隙が出れば恩の字程度の考えの下に行われた駆け引きであるが、効果覿面である。

（ス、スゲェ殺気だ！　これならいっそ死んだほうが楽なくらいに……ッ！）

冷や汗に塗れていることを、サスケは自覚する。

自分よりも圧倒的に強い。凄惨な殺気だけでそれは理解できる。

何故なら、死ぬ瞬間を想像してしまった。

脳内では再不斬の鉄塊で叩き潰される哀れな自分の姿が鮮明に映し出されている。

恐い。

身体が震えるほどに、恐い……。

「サスケ、安心しろ。お前たちは俺が死んでも守ってやる」

響いた言葉は、胸に落ちる。

「俺の仲間は絶対に殺させやしなーいよ」

にこやかな笑みとともに、安心を与えられる。

大丈夫だ。

不思議とそう思わせてくれる、普段は頼りなさの目立つ上忍の姿。

『それはどうかな……？』

斬撃。

突如カカシの背後に現れた再不斬は、カカシへと斬りかかり、カカシはあっさりと両断される。

何かが地面に滴る音。

「終わりだ」

血。

いや、それは違う。血は透明ではない。赤いのだ。

ならば、これは何だ。

両断されて、跡形もなくなった。水へと変わって地面へと落ちたカカシは何なのだ。

そして、鉄塊を振り下ろした体勢のまま、再不斬は凍りつく。視線は首元へと置かれる苦無へと向かっている。

「水分身の術……まさかこの霧の中でコピーしたってのか！」

斬られたカカシは水分身（ニセモノ）だった。

本物は再不斬の後ろに立ち、悠然と苦無を押しつけている。

勝った、七班の全員はカカシの強さに戦慄した。

「動くな……終わりだ」
「ククク……終わりだと？　分かってねェーな。サルマネ如きじゃあ……この俺様は倒せない……絶対にな！　しかし、やるじゃねェか。あの時、既に俺の【水分身の術】はコピーされてたってわけか」
分身のほうにいかにもらしい台詞を喋らせることで、俺の注意を完全にそっちに引きつけ、本体は【霧隠れ】で隠れて、俺の動きを窺っていたって寸法か」

再不斬は吠える。
現状を認識する理解力を持っていないのか、狂っているのか、それとも――

「けどな……俺もそう甘かねーんだよ」

再不斬も水となり、消えた。

「そいつも水分身か！」

背後に感じる死への導き。
カカシは見ずにしゃがみこむ。
一瞬の差。
カカシの頭上を鉄塊が通り抜けた。
剣閃の後に巻き起こる斬風はすさまじく、カカシの髪をなびかせる。
そして、地面へと這うように腰を落としたカカシへと襲いかかるものは――再不斬の蹴りだった。
体勢は崩れていて、対応できない。
両手を交差させて防御するも、完全に衝撃を殺すことはできず、水の中へと吹き飛んでいく。
追うように再不斬が地面を踏み締めるが、身に走る激痛。

痛みの根源である足元を見ると――

「まきびしか……くだらねぇ」

せめてもの手向けか。カカシの放り投げたまきびしが地面に散らかっていた。

ちょっとした時間稼ぎ程度にしかならないが、この間に体勢を立て直そうとカカシは、予想外の事態に陥ることになる。

「な、なんだ……この水、やけに重いぞ」

「フン、馬鹿が」

泳ぐことは得意だ。それなのに、泳げない。

水に囚われる。

再不斬は水の上へと立ち、印を組むと、カカシへと手を翳した。

「水牢の術」

「しまった!?」

「ハマったな。脱出不可能の特製牢獄だ……お前に動かれるとやりにくいんでな」

【水遁・水牢の術】――川の水を球状に固定し、対象のものを束縛する忍術。

球状の牢獄を固定するために翳した片手の自由を奪われるが、問題はないと判断しているのだろう。

再不斬からすれば、敵はカカシだけだったのだ。

「カカシ、お前との決着は後回しだ。まずはあいつらを片付けさせてもらうぜ」

言葉とともに生み出されたのは水分身。
にやりと嗜虐的に嗤うと、水分身はナルトたちへと向かっていく。
「額当てまでつけて忍者気取りか。だがな……本当の忍者ってのはいくつもの死線を乗り越えたものを言うんだよ。
つまり、俺様の手配書に載る程度になって初めて忍者と呼べる。お前らみたいなのは忍者とは言わねぇ」

疾走。
オリジナルよりも幾分も劣ってなお、速いと言える速度は普通の下忍では対応できないものだろう。
だが、生憎と――七班は普通ではない。
他の里で知れ渡るカカシをして『優秀』だと太鼓判を押す、特別な下忍だ。
再不斬の水分身が大きく振り上げて、緩慢に振り下ろした段平を、ナルトが受け止める。
真剣白刃取り。
おせぇよ、と呟いたのは誰に向けてのことか。反応するようにサスケは地面を踏み締めると、飛翔する。
弾丸の如く飛び出したサスケが向かうは水分身。
距離を縮めるような瞬間的な加速。
敵の懐で急停止し、停止したエネルギーを腰の回転で消さずに、身体へ溜め込んで――振り上げた利き足へと体重移動していく。
流麗な軌道は素早く進み、再不斬の顎へと突きささる。

「誰が遅いって？」
「水分身の動きだよ」

一瞬で、蹴散らす。
水分身など相手にならぬ、と結果で示す。

少しだけ身構える再不斬であるが、ここから続く展開は実に予想外のものだった。

「取引だ」

放たれる言葉はナルトのもの。

「この爺は渡すから、そこのカカシを返してもらえねぇか？」

「ナルト！？」

「……ククク、アハハハハ！！　ガキ！　言ったことは訂正だ。お前は忍者だよ。現実をよくわかってる。だがな――」

客観的に見て、的確な行動だ。再不斬は心から称賛する。

驚くカカシを見れば嘘をついているようにも見えず、心からの取引なのだろう。

しかし、甘い。

交渉とは立場が同等でこそ成り立つし、何より、相手の人間性というものを掴んでいなければならない。再不斬の性格をよくわかっていなければならない。

「――そんなこと、俺様がすると思うのかよ？」

つまり、戦闘狂の片鱗を見せる再不斬にそのような交渉が通じるわけがないという現実。

だが、再不斬も甘かった。

ナルトが、そのようなこともわからない奴だと判断したことが何よりも誤りだし、何より――敵のブレインを見誤ったことこそが最大の間違い。

「思うわけないでしょ」

黙っていたサクラが口の端を吊り上げる。
その表情が物語っている。かかったわね、と。
瞬間、足に違和感を覚える。
見ると、水の中には金髪のガキが漂っていて、水面からは小さな手が生えていて……力一杯、再不斬の足首を握りしめていた。
ようやく、気づく。
交渉は時間稼ぎだったのだと。

「即興忍術！　水遁・心中斬首の術！！」
「ガキ！！」

足へと注意を向ける。
ぎりぎりと握りこまれるそれは馬鹿力という他なく、抵抗しなければ今にも水中へと引き摺りこまれそうだ。
だが、それは囮。

「どこ見てんだ」

前を見れば、そこには印を組む生意気そうな黒髪のガキ。
見覚えのある印は攻撃的なもの。
背筋に悪寒が走る。

「火遁・豪火球の術！！」
「チィッ！！」

急遽【水遁・水牢の術】を解き、その場から離脱することを決める。
足を思い切り引っ張り、水面からナルトを引きずり出す。
人質代わりにするために、首根っこをつかんで陸地へと移動した。

だが――耳に聞こえる音は実に不吉なものだ。
ばちばち、ばちばち。
見下ろすと、ナルトはにやにやと笑っている。人質になったはずなのに、笑っている。そして、手に持つものは――
（起爆札――バンザイアタックか！？）
投げ捨てようとする。だが、しがみついて離れない。
意識が起爆札へととらわれた。
それが、間違い。
「さて、問題。水に濡れた起爆札は爆発するでしょーか？」
ぽんっ、と呆気なく煙となり、起爆札ごとナルトは消えた。
走る激痛。
腕を見ると、数本の苦無が突き刺さっている。血が流れ、だらりと腕が落ちてしまう。
突き刺さった角度から見ると、投げたのは――サクラとサスケだ。
「影分身……だと！？」
ナルトはフェイク。自分が使った水分身と同じことをやり返されたのだ。
殺してやる……。
どす黒い殺意が溢れていく。
だが、再不斬の敵はそれだけではない。
水牢の術が解けた。つまり……。
「さーて、カカシ先生……頼むぜ？」
「サクラ……作戦見事だったぞ」

陸地へと、カカシが上がる。
身震いするように水滴を飛ばしながら、誇らしさを宿す瞳を七班のメンバーに向けていた。
「先生が捕まってどうしようかと思ったわよ。まぁ、ナルトの演技が上手かったってのはあるけどね。けっこう本音入ってそうだったけど……」
一番無害だと思っていたチビっこい女が考えた作戦。
不覚をとった。
「……優秀な手駒を持ってるじゃねェか」
負け惜しみではなく、純粋な好意の言葉だ。
さすがはカカシの部下ということだろうか。
「自慢の生徒でね。さて、言っておくが、俺に二度同じ術は通じないぞ。どうする？」
再び両者は水の上へと舞い降りる。
静寂。
だが、次々と手は印を結んでいく。
全く同じ動きをするカカシと再不斬が、印を組み終えるのは同時だった。
「水遁・水龍弾の術！！」
ある程度距離の離れた両者から放たれた水遁は、水を龍と化すもの。

数本の首を持つ龍が礫となって、敵を襲う。
炸裂。
ぶつかりあった術の威力は同等で、結果は引き分けということだろうか。
巨大な水流は爆発し、雨となってナルトたちのいる場所へと降り注ぐ。

「あの量の印を数秒で……しかも、それを全て完璧に真似てやがる」
「何なの……これって忍術なの！？」
「さぁな。とりあえず、俺たちとはレベルが違うってことだろ」

激流に飲み込まれたにも関わらず、カカシと再不斬はそのままの位置で対峙していた。
再不斬は手を掲げる。カカシも同時に、掲げた。
不気味だ。
後に続いてくるのではなく、ほぼ同時。
もはやこれは真似などではないのではないだろうか。
嫌な想像が膨らんでいく。再不斬は、平常ではなかった。

（こいつ……俺の動きを完璧に……）
「読み取ってやがる」

再不斬の思考に、カカシが言葉を合わせる。

（なに？　俺の心を先読みしやがったのか！　くそ、こいつ……）
「胸糞悪い目つきしやがって、か？」

苛立つ。

「フッ、所詮は二番煎じ」

「お前は俺には勝てねーよ。サルやろー！」

尽く、言葉を遮られて、続けられる。

極めて不愉快だ。

「てめーのそのサルマネ口、二度と開かねぇようにしてやる！」

掲げた手を下ろし、印を組む。

次々と組まれていく印は膨大な量で――しかし、間違うはずもない。身体に染み込んでいる。

だから、手が少し止まってしまうのは、別の原因だ。

（あ、あれは！）

カカシの後ろに、自分がいる。

幻術か？　そう思うが――どうなのだろう。

自分よりも早く印を組んでいく自分の幻を真似るようにカカシは続き、そして。

「水遁・大爆布の術！」

巻き起こるのは洪水と言うほかないほどの奔流。

自分が印を組んでいるよりも早く、真似をしていたカカシが術を使う。

どういうことだ！

再不斬は目の前を大きく遮る水波よりも、そちらに思考を奪われていた。

回避の動作が遅れる。

爆流に飲み込まれた再不斬は、陸地へと運ばれて、大樹にぶつかるまで止まれなかった。

ずきずきと鈍痛がするのは、背中。木に思い切り打ちつけた背筋だ。

「ぐっ……」

苦痛の吐息が零れる。

「終わりだ」

カカシは木の枝から自分を見下ろしている。

再不斬はカカシを見上げ――

「何故だ。お前には未来が見えるのか」

「あぁ、お前は死ぬ」

首に棒手裏剣が刺さる。

カカシが投げたものではない。カカシの苦無はまだ手にある。

ならば、他の者がやったことになる。

カカシはナルトたちのほうを見るが、全員が首を振る。つまり、七班のメンバーではない。

「フフ、本当だ。死んじゃった」

聞こえたのは柔らかな音色。

言葉とともに現れたのは、白い仮面をつけた少年だった。

黒い着物を纏ってる身体は小さく、ナルトたちと同年齢のように思える。

降り立った少年を不気味そうに見る七班を置いて、カカシは再不斬の生死を確かめるために脈拍を測った。

零。

つまり、死んでいる。

「ありがとうございました。僕はずっと、確実に再不斬を殺す機会を窺っていたものです」

顔を隠している少年は、カカシに近づいてそう言う。

仮面は――カカシの見覚えのあるものだった。

「確かその面――霧隠れの追い忍だな」

「さすが、よく知っていらっしゃる」

「追い忍？」

サクラが疑問の声を上げる。。

「そう、僕は”抜け忍狩り”を任務とする霧隠れの追い忍部隊です……あなた方の闘いもここで終わりでしょう。僕はこの死体を処理しなければなりません。何かと秘密の多い身体でして……」

「気に食わないな、お前。どうにも辻褄が合わない。一人で勝てない敵を、何で一人で追ってるんだ？」

しかし、ナルトは抗議する。

納得できないのだ。少年の言葉は穴だらけ。どこから問い質せばいいのかわからないほどに、矛盾している。

何よりも不思議なことは――

「それに、死体を持って帰る？　ここで燃やせばいいだろう。何なら手伝ってやるぞ。何せ、ここには火遁が得意な奴がいるんだからな」

「確かにその通りね。不可解だわ。何で死体全てを持ち帰るの？殺した証明にしても、首だけでいいじゃない」

サクラも同調するが、しかし、カカシが首を振る。
「行かせてやれ」と赦しの言葉を得て、少年は自分よりも頭一つは大きな再不斬を肩に抱え、森の中へと消えて行った。

「行かせてよかったのか？　あれはどう考えても敵だぞ。サスケもそう思わないか？」
「敵だろうな。だけど、カカシの現状を考えると……逃がすのは妥当な判断だと思う」
「何でよ？」

ばたり、と何かが倒れる音がする。
おそるおそるサクラは後ろを振り返ると、ぴくぴくと痙攣しながら倒れ伏すカカシの姿があった。

「えー！？　なんで！？」

サクラは動揺する。なんで倒れたのかわからない。もしかしたら毒かも！？　などと考える。
ナルトが近づいていって、カカシの身体を調べて、安堵の息を漏らす。
瞳孔も開いておらず、湿疹もない。浅い知識ではあるが、毒物の類ではないと判断する。

「命に別状はなさそうだ。過度の疲労だろう……俺が背負ってくよ」
「ハハハ！　苦労かけたのぉ！　ま！　わしの家でゆっくりしていけ！」
「うおお……丁寧に運んでくれ」

タズナの言葉に全員が頷き、波の国へと歩き出す。

少しばかり振動がつらいのか、カカシが抗議の声をあげるのが微笑ましい。
そして。

「先生がお急ぎらしい。走っていくぞ」
「え、先生――揺れのせいで悶絶しかけてるわよ！？」
「急いだほうがいいな。緊急に医者に見せる必要がある」
「サスケくんまで！？　ちょっと待ってよー！」

ナルトとサスケは走り出した。
サクラも悪ガキ二人を急いで追い掛けるが、カカシを背負っているナルトにすら追いつけない。
アカデミーでは決して鈍足と言われることはなかったが、すばしっこいクソガキたちからすればとてつもなく遅いのだ。
ちくしょうううう！　と叫びながらサクラはタズナに背を向け走り去る。

「元気じゃのぉ……」

波の国はもうすぐだ。
霧が晴れた視界は、とても明るかった。

波の国・その参

3.

ペンキが剥がれ落ちた家は、風が吹くたびに耳障りな音が鳴り響く。

鬱屈とした空気が立ちこめているタズナの住まう町の中では比較的まともな木造建築ではあるが、それでもみすぼらしい。町の現状がよくわかる――如何にガトーに搾取されているのかが手に取るように理解できる。とてつもなく貧乏で、未来の見えない、絶望色に染め上げられた町だった。

生きながらにして死んでいる。町についたときのナルトの感想だ。

貧乏は貧乏でも、未来があれば目に光は宿る。光の種類もいろいろあるが、まとめてしまえば野望のようなものだ。絶対に金持ちになってやる、などとわかりやすい反骨心などを持つ輩が少ないながらもいるものだ。しかし、この町にはいない。屍のようなものばかりだ。

「大丈夫かい？　先生！」

そんな中、きっちりと希望を持っている女がいた。荒んだ町には似合わないほどに陽気な女性の名前はツナミ。タズナの娘である。

顔は似ていないようだが、性格はきっちり引継いでいるようで、死人のような町人とは違い、生命力に満ち溢れている。

彼女はカカシをベッドの中に運びこむと、おかゆを差し出しながら、熱を測った。

「いや……一週間ほど動けないんです」

倒れ込んだまま申し訳なさそうに答えるのはカカシだ。
七班の生徒――主にナルトやサスケ――に脇をくすぐられたりなどと執拗な嫌がらせを強靭な精神力で耐え抜きながらおかゆを食べている。少しでも早く回復するためには栄養が必要なのだから、遠慮することはない。
「なぁーによ！　写輪眼ってスゴいけど、体にそんなに負担がかかるなら考えものよね！！」などとサクラもカカシに攻撃する。少しだけ傷ついたように顔を伏せて、「誰も俺に優しくしてくれないんだな」と不貞腐れ始めているが、誰も慰めようとはしない。日頃の意趣返しである。いつも遅刻をしてくるカカシに対してかける恩情など、七班のメンバーは一欠片たりとも持ち合わせてはいなかった。

「でも、ま！　今回あんな強い忍者を倒したんじゃ。おかげでもうしばらく安心じゃろう！」
「それはないだろ……倒したけど、逃がしたしな」
「その通りだ。死体処理班ってのは……ナルト、お前が言ったようにその場で死体を処理するものだ。証拠は首だけでいい。それに――」
「棒手裏剣――千本か。あれは鍼灸術にも使われるとアカデミーで習ったな」
「そうか。仮死状態になるツボね。詳しくは知らないけど、首はそういうツボが多いって話を聞いたことがあるわ」
「最悪だな……」

ナルトの言葉にサスケとサクラは頷いた。敵だと疑っていたものが確証に繋がる。
「つまり、どういうことなんじゃ！？」とタズナは現状を理解できていない。理解が遅いのではなく、知識が足りていないだけ。つまり、結果だけを教えればいい。

「おそらく、再不斬は生きている」

小さな家にこだまするのは最悪の現実。

強敵である再不斬は生きている。なおかつ、仮面を被った仲間がいる。身のこなしからして、タダモノではないことがわかる。最悪に輪をかけて最悪にしたようなものだ。七班のメンバーの顔色が少しだけ悪くなる。冷静に考えれば、どれほど危険な立場に追いやられているのかが理解できるからだ。

「考えすぎじゃないのか？」

「考えて困ることはないし、対策はできるだけするべきだ。何より、カカシがここから動けないんじゃ、俺たちは帰れない。だから、嫌だって言ったんだよ」

タズナの言葉にナルトは答える。そして――

「その言葉だと……ナルトは付き合うつもりはあるわけだな」

カカシに心情の変化を見抜かれる。

激しく舌打ちするが、にこにことカカシは自分を見てくる。それがとてもむかついたので、ナルトはカカシの横腹に親指を突き刺した。体術における『鉄指』という技。効果としては――超痛い。

がくりと前屈みに倒れ込みそうになるカカシを冷徹に見下ろしている姿はとてつもなく恐ろしい。だが、カカシは怒らない。額に青筋と脂汗を浮かべながら、痛がっていることをなかったことにする。

「……ま！　再不斬が生きてるにせよ、死んでいるにせよ、ガトーの下にさらに強力な忍がいないとも限らん」

より最悪の事態を想定する。

「先生！　つまり、何が言いたいの？」
「お前たちに修行を課す」
「私たちが今ちょっと修行したところでたかが知れてるわよ？　相手は先生が苦戦するほどの忍者なわけだし……」
「サクラ――その苦戦している俺を救ったのは誰だった？　お前たちは急成長しているよ」

カカシの前に並んで座っている三人を見て――サクラのほうをじっと見つめる。

「とくに、サクラ！　お前が一番伸びてるよ」

褒めたつもりだった。しかし、サクラはとても嫌そうにそっぽを向いた。
照れているわけではなく、心底嫌悪感を剥き出しにしているのだ。それは何故だろうか。
きっと原因は両脇で笑う少年二人だろう。にやにやと笑いながら「腹筋の効果だな」「いや、背筋だ」などと小声で囁いているのだ。公園で毎日繰り広げられた地獄の筋肉トレーニングを思い出させられ、急に筋肉痛に襲われたかの如く顔を引き攣らせる。口から漏れ出すのは苦悶の呻きだ。

「……嬉しくないです。で、あんたらは笑うな！　鬱陶しい！！」
「どうしたんだ、お前ら？」

サクラの不機嫌になる原因がわからず、カカシは疑問符を浮かべる。夜な夜な公園にてサクラが泣き顔になりながら筋肉トレーニングを課せられていたなど知るよしもないカカシは、本気でわからない。

「いや、サクラを鍛えていた日々を思い出しただけだ。な、サスケ」
「あれは楽しかったなぁ」
「……どちくしょう！」

やっぱりわからないが、なんとなくサクラが玩具にされているのだろうことはわかった。仲が良いなぁ、と微笑ましくなる。

「お前らの言っていることはわからんが、仲間内での修行はいいものだ」
「よくない！」

抗議の声は無視。

「ま！　俺が回復するまでの修行だ。お前らだけじゃ勝てない相手には違いないからな」
「でも、先生。再不斬が生きてるとして、いつまた襲ってくるかもわからないのに修行なんて……」
「その点についてだが、いったん仮死状態になった人間が元通りの体になるまで、かなりの時間がかかることは間違いない」
「その間に修行ってわけか。この任務は嫌だが、修行は大歓迎だ。面白くなってきたぜ」

任務自体には興味はないが、基本的にナルトは修行などが大好きだ。時間さえ空いていれば全て修行に当ててしまうほどに。だから、修行自体をすることに不満は全くなく、サスケも同様だ。一番嫌そうにしているのはサクラである。
もし、先に修行を二人がクリアしてしまったらどうなるだろうか。きっと悪魔のような笑みを浮かべながら、自分の修行を喜んで手伝ってくれるだろう。スパルタなどという言葉すらも優しく感じるほ

どの地獄の特訓メニュー。それらを自分たちは軽くこなしてしまうのだから性質が悪い。体力馬鹿二人は自分にも同じハードルを用意してくれる。死んでしまえ、と心の中で何度祈り、毎日きっちりつけている日記に何度も書いたことがある。死んでくれないのは何故だろう。不思議で仕方ない。祈りは神に届かないのだろうか。

アンニュイな気分になったせいで溜め息が漏れ出る。

そんなときだ。小さな子供が家に入り込んで来たのは。

「面白くなんかないよ」

第一声がそれ。おそらくナルトに対しての言葉なのだろう。

枯れ果てた、生気の感じられない子供はおそらく六歳前後ということだろうか。とても小さな割には、何かを悟ったかのような、何にも期待していない瞳が酷く印象的だった。

「おお、イナリ！　どこへ行ってたんじゃ！」

「お帰り、じいちゃん……」

「イナリ、ちゃんと挨拶なさい！　おじいちゃんを護衛してくれた忍者さんたちだよ！」

ツナミの息子なのだろう。とてもよく似た顔立ちがしている。だからこそ、目に宿る力のなさが対比となって浮き彫りになる。

うんざりとしたように虚ろな瞳を、イナリはナルトたちへと向けた。実に面倒臭げである。

「母ちゃん、こいつら死ぬよ……ガトーたちに刃向かって勝てるわけがないんだよ」

達観した口調でのその言葉は、胸にずしりと圧し掛かる。

何よこのガキ、と内心サクラは思ったりもしたが、大人の余裕で

何とか口に出さずに済ませたのだが……

「……目が死んでるな。戦う前から心が折れてる。負け犬の目だ」

キツイ一言だ。

町の現状を見たからこそ、イナリの心が折れている理由もなんとなくわかってはいる。それなのに、責め立てる。大人気ない。

「子供相手に何言ってるのよ！？」とサクラはナルトを止めようとするが、肩を掴んだ手を振り払い、ナルトはイナリへと近づいていき、しゃがみこむ。

視線を同じ高さに合わせ、じっと瞳を見つめた。

「子供とか関係ないだろ。男なのに……やられっ放しで情けなくないのか」

イナリの瞳が揺れる。

拳は力を込めて握りしめられて、震えている。

初めて、瞳に色が宿る。

怒りだ。自暴自棄な、投げやりな怒り。

息は荒くなり、空気を暴飲する。叫ぶ前の一歩手前。

「僕が頑張ったら何かが変わるのかよ！？」

「どうせ頑張れない負け犬にその言葉は無意味だな。お前は変われない。進もうともしない奴に未来なんてものは訪れねぇんだよ」

「お前っ……！　くそっ……！！！」

「吼えるならガトーにしろ」

涙を浮かべながら、イナリは二階へと駆け出していく。

後ろ姿を見届けるナルトの顔は、物憂げなものだった。何かを思い出しているのか、抑えきれなかった感情を吐露したことを恥じる

かのように、髪を掻き毟る。

「……言いすぎだ」

サスケの言葉に舌打で返し、どっかと地面へと座り込んだ。おろおろとしながらサクラはナルトに話しかけようとするが、全て無視。どうしようもない奴だな、とサスケは溜め息を吐くと、イナリの後を追う。

狭い階段は古びていて、登るたびに足元が軋む。耳朶を打つのは階段が軋む音だけではなく……

「父ちゃん……うっ、ぐう……」

誰かの泣き声。

失われたものに縋る小さな子供の悲鳴だった。

遠い過去――忘れ去ろうとしても心から消えない悲劇に想いを馳せる。

「フン」

サスケはイナリの後を追うのを止めて、一階へと戻った。

◆

次の日、七班のメンバーは今、タズナの家の裏手にある森の中へと場所を移していた。

カカシが満足に動くことができないので、夜が明けてから修行をすることになったのだ。カカシが松葉杖で移動に時間がかかるというせいもある。

「では、これから修行を開始する」

修行――自分の力を高めるために行うことだ。

ナルトは修行が大好きだ。自分が強くなるのは大好きだし、今はみんなで修行をすることがとても楽しい。競い、高め合う関係というものは遠い場所にあったのに、今はすぐ傍にある。実感するたびに、嬉しくなる。決して表に出すことはないが……

「やってもらうことは、木登り――といってもただの木登りじゃない。手を使わないで登る」

「どうやって？」

「ま！　見てろ」

カカシが近くにある木に、足をつけた。

勢いもなく、ただ平坦に、木の幹を歩いていく。

「登ってる……」

「足だけで垂直に……」

異常なことだった。

重力を完全に無視しているとしか思えない行為は現実としてありえない。だからこそ、驚いてしまう。ありえない、と。

「まぁ、こんな感じだ。チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。チャクラは上手く使えばこんなこともできる」

あっけらかんとカカシは木の枝にぶら下がりながら、言う。

ぶら下がると言っても木の枝の裏に足をつけているだけで、まるで枝から生えているかのようだ。

ナルトたちは思う。スゲェ！　と。

久しぶりに尊敬の眼差しを向けてくる七班の視線を受けて、カカシはこっそりと喜んでいた。あまり尊敬してくれないのである。こういうふうに憧れの視線を送られるとむず痒く思う反面、とてつもなく嬉しい。先生になってよかった！　だが、決して表情には出さない。常に浮かべている飄々とした表情のまま、カカシは平静を装っていた。

「ちょっと待って！　木登りを覚えて何で強くなれんのよ！」

呆気にとられていたが、だんだんと冷静さを取り戻し、サクラはカカシに問いかける。

木登りはすごい。だが、強くなるとは思えないのだ。まぁ、森で戦う場合などには必須スキルのようにも思えるが……次の敵は森で戦うわけではない。

何故、このような修行をするのか――目的は何か。そういうことをきっちり説明していないと修行の効果も半減だ。

「この修行の目的は第一にチャクラの調節を身につけることだ。練り上げたチャクラを必要な分だけ必要な箇所に……これが術を使うにあたって最も肝心なことなんだ。

案外、これが熟練の忍者でも難しい……。

この木登りにおいて練り上げなくてはならないチャクラは極めて微妙……さらに足の裏はチャクラを集めるのに最も困難な部位とされている。

ま！　つまりはこの調節を極めれば、どんな術だって理論上は体得可能になるわけだ！」

「便利なもんだな。もっと早くに教えて欲しかったくらいだ」

ナルトの一言に少しだけ頬が引き攣るが、マスクの下なので隠れて見えないことが幸いだった。

ごほんと、咳払いをする。

「……で、第二の目的は足の裏に集めたチャクラを維持する持続力を身につけることだ。

様々な術に応じてバランスよく調節されたチャクラをそのまま維持することはもっと難しい……。

その上、忍者がチャクラを練るのは、絶えず動き続けなくてはならない戦闘中がほとんどだ。

そういう状況下、チャクラの調節と持続はさらに困難を極める。

だからこそ、木に登りながらチャクラのノウハウを体得する修行をするってワケ！」

なるほど、と一同が納得する。

つまり、チャクラコントロールを上手くできるようにして、あらゆる術に対しての適性を高めるとともに、無駄なチャクラ消費を抑えることを目的とした修行だということ。

「とまぁ、俺がごちゃごちゃ言ったところでどーこーなるわけでもないし、身体で直接覚えてもらうしかないんだけどね」

苦笑し、カカシは苦無を取り出すと、三人の目の前に投擲する。

地面へと突き刺さった苦無を不思議そうに見る三人。

「今、自分の力で登り切れる高さの印として、その苦無で傷を打て。そうやってだんだんと上へと傷をつける」

「……やってみるか」

一番最初に挑戦したのはナルトだった。

地面の苦無を引き抜くと、助走をつけずに木に足をつける。

吸着。

すんなりと木へくっついた足を確認すると、一歩一歩上へと登っていく。
案外簡単じゃねぇか。
そんなことを思いながら進んで行ったのだが、この時に気付く。チャクラの調節と持続を同時に行うのが如何に難しいかということを。
だんだんと木への吸着力が失われていき、地面へと落ちる。即座に苦無で木に傷をつけて、自分の今の実力を刻み込む。
だいたい半分だ。
後少しじゃないか、と思いながら隣を見ると、サスケも同じような位置に傷をつけてから地面へと落下している。
だが。

「案外簡単ね」

サクラは木の枝に座り、ナルトたちを見下ろしていた。
汗一つかかず、ぶらぶらと足を揺らしてながら、実に楽しそうだ。優越感が身体全身から迸っている。
「サクラ！」とナルトとサスケは驚きの声を放つ。笑みが深くなった。にやぁ、と可愛らしい顔を邪悪な笑みに歪めている。心底楽しいのだろう。

「あっれー？　二人とも腹筋がどーのこーのと言ってたわりには情けないんじゃない？　あっ、木登りすら満足にできないの？
やっだー、そんな程度のレベルなのに私にイジワルしてたわけ？
本当、足手まといは困っちゃうなぁ……」

意趣返し。
普段さんざん自分の貧弱さを追求してくる二人に対しての嫌味だ。
にこにことといっそ爽やかに見えるように、なおかつとてつもなく

憎たらしく見えるように、純白の歯を見せつける。
ナルトとサスケは地面からサクラを見上げていたが、途中で俯いた。苦無を持つ手が震えている。

「……お前、そこで座って待ってろ。すぐ行くからよ」
「同感だ。どうやら腹筋を千回やりたいみたいだからな。とっ捕まえてやる」

地獄の底から響いてくるようなくぐもった声音。サクラは負け惜しみと判断した。

「やーいやーい、ここまでおいでー」
「うぜぇっ！」

助走をつけて木に向かって、走る。
ナルトとサスケはやはり真ん中くらいで再び落下してしまう。そのたびにけらけらと陽気に笑う女の子の声。
その姿を覗く小さな影があった。
少し離れた木の幹に隠れて、こっそりと見ている。

「あんなことしても無駄なのに……」

呟かれた言葉は、どこか悔しげだった。

◆

鮮烈な夕焼けの光を柔らかく受け止めてくる木の葉。木漏れ日として差し込む赤色はサクラの横顔を淡く照らしていた。
ざわざわと囁く木の葉が擦れる音に隠れて、苦痛の吐息を漏らしている。とても、儚げだった。

その姿を見守る二人の少年――ナルトとサスケは優しい手つきで足を絡め取っている。
悔しそうに、心底悲しそうに、束縛された両足を見つめる乙女は今にも泣きそうだ。ごめんなさい、と何度も呟いている。だが、二人の悪魔は決して許すことはないだろう。

「サスケ、後何回だ」
「五百回までは数えていたんだが、それ以上はちょっと……覚えてないなぁ」
「じゃあ後五百回な」

悪魔の囁きにサクラは硬直する。

「うわぁぁぁ！　なんで二人ともすぐに登れちゃうのよぉぉぉ！！！」

そう、ナルトとサスケはあれから一時間ほどで木を登り切ってしまった。すぐにサクラは撤退しようと試みたが、足の速さでは当然勝てず、数分も経たずに捕まってしまった。
それからはそう――リベンジタイムである。
角と尻尾が生えているのではないか、というほどの邪悪な笑みが視界に飛び込んでくる。とても生き生きとしているのが激しくむかつく。

「なんでって……なぁ？」
「やる気を出してくれたサクラのおかげだな。感謝してる。恩返しをさせてほしいんだ」
「嘘だっ！　だって笑ってるもん！　腹筋はもう嫌だぁぁぁぁ！」
「姫は腕立て伏せが所望だとよ」
「言ってない！　言ってないから！　ちょっと！　サスケくん、無

駄に良い笑顔浮かべないでよっ！」

いつもの修行風景を知らなかったカカシは、なんでサクラが嫌そうにしていたのかをようやく理解する。

こういうことね……そりゃ嫌だわ。

まぁ挑発したサクラにも責任はあるとカカシは思うので、あえてそこらへんはスルーして、七班のメンバーに問いかける。「お前ら……なんですぐできちゃうの？」と。

答えはすぐに返って来た。

「あー？　チャクラコントロールとかの練習はみんな一緒にけっこうやってたからな。そりゃできるだろ」

「任務終わった後に、全員で集まって勉強会をしていたからな……地獄だったぜ」

「サスケくんって座学苦手だもんね」

「腕立て伏せやるぞ」

「ごめんなさい！　私は筋トレが苦手でしたっ！」

清々しいまでの明快な答えにカカシは頬が綻ぶのを禁じえない。

毎日任務の後に修行をするなど、普通はできない。疲れているから。だが、それを当たり前のように行う部下。とても、誇らしいと思う。

「全く……じゃあ、次の段階へと進む。正直ここまで簡単にクリアされるとは思ってなかったけど、そうだな。忘れてたよ。お前らは毎日成長してるんだったな……」

「水の上を歩く修行でもするのか？」

「よくわかったな」

「だって、先生が歩いてたし」

理解力がある。努力も怠らない。才能もある。
きっと、自分よりも強くなるだろう、そう考えただけで、カカシは嬉しくなる。

「なるほど、まぁ日も暮れたし今日は戻って休むぞ」

だが、無理をさせるのは良くない。
カカシはさりげなくサクラへの助け船を出すとともに、本日の修行終了を告げた。

◆

焼肉。それは戦場だ。
鉄板の上でじゅうじゅうと美味しそうに焼かれていく牛肉や豚肉たちを、狩人の如き鋭い視線を持って射抜いている。
焼け終わった。完璧な焼き上がり具合を微妙な音の変化で判断したサスケは即座に肉を取ろうと箸を伸ばすが、それよりも早く、まさに神速と比喩するしかないほどの速度で持って、ナルトに横から奪われてしまった。

「待て。その肉は俺が育てた」
「焼肉に育てたもクソもあるかよ。早いもの勝ちだ」
「ナルト、お前……ッ！」

交錯する視線。相手を睨みつけるだけで殺せそうなほどの濃密な殺気が込められたそれは、食卓には似合わない。
毎度のことではあるが、大皿からみんなで取り分けるような食事のとき、二人は争っていた。いい加減慣れっこではあるが、タズナの家。つまりは他人が食卓を囲っている。
仲間二人のくだらない喧嘩のせいで自分まで同じレベルだと思わ

れるのが我慢できず、サクラはとうとう口を出した。
「あー、もう！　喧嘩しない！　毎回毎回、少しは学びなさいよっ！」
やいのやいの、と結局は同じレベルで言い争いに発展する。その間にもきっちり肉を掠めとっていくのは流石は忍というべきか。油断も隙もありはしない。
「いやぁー！　超楽しいわい。こんなに大勢で食事をするのは久しぶりじゃな！」
タズナは笑ってそう言うが、サクラはいい加減恥ずかしさが頂点に達している。
「付き合ってらんないわ……」と嘆息して立ち上がると、部屋の隅へと歩いていく。少し、気になっていたものがあるのだ。
壁に立て掛けられた写真。イナリが食事中ずっと見ていたもの――それが、気になっていたのだ。
「あの～なんで破れた写真なんか飾ってるんですか？　イナリ君、食事中ずっとこれ見てたけど……なんか写ってた誰かを意図的に破ったって感じよね」
「夫よ」
写っている中に答えたツナミと同年齢の男はいない。つまり、破かれたところに夫がいたのだろう。
そして――
「かつて……町の英雄と言われた男じゃ」

タズナの言葉に反応するようにイナリはがたりと音を鳴らして席を外れる。
曇った表情を浮かべたまま、いそいそと部屋から出て行った。まるで、逃げるように……。
「……父さん！　イナリの前ではあの人の話はしないでといつも……！」
ツナミは烈火のごとく、怒る。だが、タズナは全く気にしていない。
「何か訳ありのようですね」
「イナリには血の繋がらない父親がいた。超仲が良く、本当の親子のようじゃった……あの頃のイナリはほんとによく笑う子じゃった……」
想いを馳せる。
昔のことを思い出しながら、イナリのことを語る……そして、突然に沈痛な面持ちとなった。
「しかし……イナリは変わってしまったんじゃ。あの事件以来……！」
イナリの変わる前、変わった瞬間、その話を――タズナはすることに決めた。

波の国・その四

4.

イナリには父親がいない。
そのせいか、内気になり――その性格が災いして、虐められていたのだが……しかし、ある男に助けられてから、変わった。

「名をカイザと言い、国外から夢を求めてこの島に来た漁師じゃった……それ以来、イナリはカイザになつくようになった。
まだ物心のつかないうちに本当の父親を失ったせいもあるんじゃろうが……いっつも金魚のフンみたいにくっついて、まるで本当の親子のように……
そんなカイザが家族の一員になるのにそう時間はかからなかった」

タズナは一息吐くために、お茶で喉を潤した。
瞑目。
皺がれた瞼の下では何を思うのか。苦渋の表情を浮かべる。

「そして、カイザはこの街にも必要な男じゃった」

川の堰が開いたときの話だ。
町は洪水に飲み込まれる一歩手前というほどの危機状態に陥った。
荒れ狂う河川を宥めるためには、激流の中へと入り込み、ロープを端まで伝わせられることが必要とされた。
カイザは、命を懸けて、それに挑んだ。
無謀だと人々は口を揃えて言うが、

「父ちゃんはイナリのいるこの町が大好きだからな」

そう言って、飛び込んだ。
結局は町は守られた。
一人の男の手によって……。

「それからじゃ……国の人々はカイザを英雄と呼び、イナリにとってカイザは胸を張って誇れる父親だったんじゃ。
しかし、ガトーがこの国に来て……」
「ある事件が起きた」

そうじゃ、とタズナは重々しく頷く。
見ると、身体は芯から震えている。
顔は蒼白になり、歯はかちかちと音を鳴らす。
怒りと恐怖をない交ぜにした……そんな表情だ。

「カイザはみんなの前で、ガトーに公開処刑されたんじゃ」

タズナはその光景を思い出しただけで、身震いしてしまう。
あまりにも残酷な光景だった。

『自分にとって本当に大切なものは――この二本の両腕で守り通すんだ！』

そう言っていた英雄は二本の腕を切り落とされて、町の人々の前で――イナリの目の前で、殺された。
今も幼いが、当時はもっと幼かったイナリのことを思うと、タズナは心が張り裂けそうになる。

「それ以来、イナリは変わってしまった……そして、ツナミも、町民も……」

静寂。
何を言えばいいのかわからず、七班全員は口ごもる。
安易な慰めの言葉をかけられるような甘い悲劇ではない。目の前で肉親を奪われるというのは、あまりに衝撃的だ。
失ったことのないサクラにはわからない。
そして――

「わからないことがある。何で変わるんだ？」

ナルトにも、わからない。

「イナリも、町の人も……人に寄りかからなきゃ生きていけないほどに弱いのか？　それは他力本願すぎるんじゃないのか？」

無関係だ、とナルトは断じる。
カイザがいなくなったから心が折れたのか。それとも、カイザのように殺されたくないから、心が折れたのか。
似ているようで、意味は全く違う。

「おんぶに抱っこされないと立つことすらできないのか？　ただの言い訳じゃねぇのか？　怖いんだろ。殺されるのが。素直に認めろよ。殺されるのが怖いから反抗できませーん！　ってよ。そっちのほうがよっぽど潔い」

恐怖に押し潰されたことに言い訳をして、美談に仕立て上げているようにしか、ナルトには思えなかった。
肉親が殺されるのは悲しいだろう。悔しいだろう。しかし、そこから立ち上がらない理由とは、また別だ。座り込んでいたら、また失うことになる。だからこそ、立ち上がるべきだ。

ある意味でナルトの思考は正しい。だが、だからこそ、他者の心を抉ることになる。

「お前、それ本気で言ってんのか？」

「あ？　本気に決まってんだろ」

俯いたまま、サスケは震えた声音で問いかける。ナルトは平坦な声音で答えた。

がたりと椅子が地面へと勢いよくぶつかる。

「サスケくん！？」

多くの皿が並べられた机の上は踏みしだかれて、黒髪の少年が乗りかかっていた。

振り上げられた拳は、金髪の少年の頬に食らいついている。

殴った。

激情に己が身を委ねた結果、サスケはナルトに殴りかかった。

突き刺さった拳に反抗するかのように、ナルトは首に力を入れて踏ん張って、サスケのことを睨み返している。サスケも、ナルトを睨みつけている。

うずまく視線にはあらゆる感情が込められており、制御しきれない負の感情は今にも爆発しそうだ。

「見損なったぞ。人の痛みすらわかんねぇのか……お前は！」

「……俺がわかることは――座り込んだままじゃ何も変わらないっていう純然たる事実だけだ」

「表出ろ。ぶっ飛ばしてやる」

「いいぜ。よくわかんねぇけど、売られた喧嘩は買ってやる。鬱々とした悲劇のヒロインの話聞いて、こちとらむしゃくしゃしてんだ」

輝割れる。
これまで積み上げてきた絆に、亀裂が走る。
そんなのは嫌だ。絶対に嫌だ。
サクラはカカシに止めてくれるように目で訴えるが、首を振られるだけだ。
「止めるべきじゃない。大事なことだ」
何が大事なことなのか……サクラにはわからなかった。

◆

空に浮かぶ星たちは分厚い雲に覆われて、街は灰色に染め上げられていた。
それは郊外でも同じことで、家から漏れ出る人工の光だけを頼りに対峙していた。
闇の中でもなお輝く黄金と、闇に溶け込む漆黒。
光と影は相対する。
身体を解すように柔軟運動をするナルトは、思い切り膝を伸ばしていて、サスケはそんな姿を見下ろしている。
屈んだまま見上げたら、そこには冷たい双眸の中に悲しみを宿したサスケがいる。何をそこまで悲嘆しているのか、ナルトには理解できない。
立ち上がり、見据える。
紺碧の双玉は揺れていて、しかし、強靭な精神力で押さえ込まれる。
嘆息する。
「いきなり殴ってきて……何だよ、お前。悲劇のお姫様に恋でもしたのか？」

「お前だってわかるだろうが！　孤独の傷みってやつをよ！　失った傷みをよ！　お前だって一人だっただろうが！！」

サスケの怒りをぶつけられるたびに、ナルトの心は冷めていく。

「そんなに興奮するなよ。孤独の傷みってのは……わからんでもないけどよ。わからないことはある。なんで負けるんだ？　親の死と自分の敗北は無関係だろ？」

「なんでお前はそんなふうに考えられるんだよ！」

サスケが何に対して怒っているのか。

同情しているのか。そうとは考えられない。サスケの人間性から考えるに、そんなに熱い奴ではない。

ならば、何か。

思考する。

そして、思い出す。

木の葉の里で有名な『うちはの悲劇』を。

得心する。

つまり。

「あぁ、そっか。そうだな。お前も親を……ってか、家族を失ってるんだよな。イナリと自分を重ねたのか？」

柳眉を逆立てる。

冷たく整った顔立ちが朱に染まる。

「わっかんねぇなぁ。お前とあいつは違うだろ？　お前は立ち上がってる。あいつは座り込んだままだ。全然違うように思えるけどなぁ」

「黙れっ！」

開始の合図などなく、サスケはナルトに対して走り出した。
数歩分はあった距離は一足飛びで潰されて、気づけば懐にいた。
実に速い。自分ではそこまで速く動けない。清清しいまでに、身のこなしを視認することができなかった。
体勢を低く。迫り来る拳は避けられない。ならば、避けなければいい。感情任せの攻撃は力強さはあるが、正確性がない。どこを狙ってくるかは理解できていた。体重を乗せて、拳に頭突きを合わせる。
鈍い音が脳内に響く。
苦痛に呻くサスケの顔を覗き込む。

「お前も、イナリと同じように泣いたことがあるわけだ？」
「ぐっ……」
「自分を否定されたみたいで、むかついたのか？」
「黙れっ！」

再び襲い掛かる拳は、避けられるものだった。しかし、あえてナルトは避けなかった。
頬を貫く痛みが走る。
吹き飛ばされるほどの衝撃。だが、地面に足を食い込ませ、穿ちながら……耐え抜いた。
膝が折れる。しかし、ここで倒れるわけにはいかない。根性のみで両脚を支えて、どす黒く変色した頬に手を当てる。

「なるほど、そうか。お前もイナリと同じだ」

呟かれる言葉は確信に近い推測。

「うちはを皆殺しにした裏切り者を殺したい。うちはの一族を復興

したい。失ったものにしがみついているだけなんだな」

「失うものがないお前に――何がわかる！」とサスケは叫ぶ。

だが、ナルトは最初から一貫して言葉を紡いでいる。つまり。

「わかんねぇって何度も言ってるだろ……おいそれと自分の感情を他者が理解してくれるなんて、俺は期待したことすらねーよ……。

自分を無条件で肯定してくれる存在――家族がいなかったからな」

湿った空気に重く響く言葉は、誰に向けたものなのか。

ナルトには、家族がいない。だから、失うことすらなかった。最初から無いのだから。

「聞くけどよ。お前に、俺のことがわかるのか？　けっこう辛いぜー？　イルカ先生と出会うまでは、俺と喋ってくれる奴なんてほとんどいなかったんだぜ？」

からからと笑うように吐き出される言葉は、心をざわつかせる。

乾いている。何もかもが、存在していない。最初から他者に対して、希望を持っていない。

ナルトは、孤独だった。

「アカデミー内でも俺の扱いがどんなのだったか……お前も見てただろ？　誰も助けてくれない。結局、自分を救うのは自分の力だけなんだよ」

停滞することに意味はない。

変えたいと願うならば自分が動くしかない。現実はいつだって残酷で、容赦のないものだ。

だからこそ、ナルトは結論する。

「へこたれて何か得をするのか？　誰かが助けてくれるのか？　少なくとも、俺に救いの手を差し伸べてくれたのはイルカ先生だけだったし、それだって、俺が努力してなけりゃ見向きもしなかっただろうぜ。荒んでどうする？　あれは甘えだ。庇護者がいるからこそ出来る余裕の表れなんだよ」

だからこそ、言う。

お前ら甘ったれの考えは、俺にはわからんと。

他者を突き放すようなその言葉はとても冷たく、ある意味では……真理だ。

ナルトが短いながらも歩んできた人生の中から掴んだもの。それは、重い。

「弱者は変われないと言うのか」

サスケは俯いたままだ。ナルトと視線を合わせようともしない。

「変われない。変われるのは自分を信じて行動を起こせる奴だけだ」

「いちいち正論だな、お前は……人間、そこまで割り切れるもんじゃねぇんだよ！」

「ぐぅっ……」

お互いの腹に拳が突き刺さる。殴りかかったサスケに、ナルトがカウンターを合わせたのだ。

そこからはただの喧嘩。

修練で覚えた型など度外視した、大振りの殴り合い。

避けない。

全部喰らって、その分だけ殴り返す。

意地の張り合いだった。

そして、勝ったのは……
鳩尾に抉り込まれた拳のせいで、ナルトは膝を着く。
口から吐瀉物を撒き散らしながら、痛みに悶えながら――それでも、澄んだ目でサスケを見上げていた。
蹴り飛ばす。

「ナルト！」

地面へと転がったナルトを、サクラは慌てて寄り起こす。
非難するようにサスケに目を向けるが、ぼろぼろに汚れたサスケのほうが……

「お前のことを友達だと思ってた俺が馬鹿みたいだ……じゃあな」

溢れ出す何かを無理やり擦りつけて、サスケは森へと歩き出す。
拗ねた子供。
サクラはそんな印象を覚えた。
そして、自分の腕の中で震えるナルトを見る。
「痛ってぇ……」と漏らしながら顔を腕で覆う姿は、サスケとそっくりだ。

「ナルト、今の言葉は本音なの？」

カカシが何で止めなかったのか、サクラはようやく理解した。
だからこそ、言うことにする。

「アカデミーの卒業の日、私とあんたは喧嘩したわよね。あのときね。サスケくんにあんたの陰口言ったの。
親のいないあんたはろくな育ちができてない馬鹿野郎だって……
そのとき、サスケくんは私に何て言ったと思う？」

知るかよ、と掠れた声が耳に届く。
「孤独はとても辛いんだって。そんなことすらわからない私はうざいんだって、言われたの。だから、私も言うね」
沈黙。
少しだけ、間があって……。
「あんた、うざいわ」
耳朶を打つ言葉は、そんなもの。
「……そうかい」
ナルトの瞳は水滴で滲んでいた。
◆
朝靄が浮かぶ森の中には、朝焼けが霞んで見えるものだ。
重くのしかかってくる水滴は身体を蝕み、腐葉土の上で寝転がっているだけで寒くて、震えてくる。
けど、どの面下げて家へと戻れと言うのか。
「……何てこと言っちまったんだ、俺はっ！！」
思い出しただけでも死にたくなる。
サスケは昨日、キレた。ナルトの言葉に堪忍袋の緒が切れたのだ。だから、殴った。本当にそれだけのことだった。
感情に任せて行動した代償は大きく、サスケは一人の友人を失っ

た。いや、唯一の友人と言ってもいいかもしれない。毎日顔を突き合わせて、笑いながら一緒に修行をした相手など、ナルトくらいだったから。

最初は勝負をしても相手にならなかった。体術にしても、忍術にしても、真っ向勝負をすればサスケがいつも余裕で勝っていた。

しかし、悔しさに顔を歪ませながら、次の日は戦い方を変えてきて、自分の体術を真似してきたり、弱点を研究してきたりしてきて、勝率はだんだんと五分五分になりつつある。つまり、ナルトはいつも諦めない姿勢を貫いてきた。

だからだろう。この町に来てからずっと機嫌が悪いのは……わかっているのだ。ナルトの嫌いな人種ばかりがいる――行動を起こさない奴らばっかりで辟易していて、それで、あんな辛い言葉を吐いていたことも。

そして、最初から最後までイナリに対して『そのままじゃ何も変わらない』と言っていただけなのだと。要するに『変われよ』と言い続けていただけなのだ。

冷静になって考えてみれば、不器用な言葉を吐いていただけで、確かに思いやりはあった。それに気づかなかった自分に対して苛立つし、そんな不器用な言葉しか言えないナルトにも腹が立つ。

「……わかりにくいんだよ」

視界が滲む。ぽとぽとと水滴が落ちて、頬を濡らす。

誰に見られるわけでもない。久しぶりに、泣くのもいいかもしれない。

サスケがそんなことを思ったときだ。

「どうして泣いているんですか？」

後ろから声をかけられた。

仮にも忍であるのに、背後に人が立っているなど……驚きのあまり、サスケは飛び退った。

「テメェ、誰だっ！」

背後に立っていたのは腰ほどまで伸ばした絹のような黒髪の柔らかな微笑の似合う少年であった。

困ったように「薬草を取りに来たものですけど」と言いながら、サスケの足元を見ている。サスケも足元を見ると、そこには――

「貴方の足元に押し潰されているものです」

何だか悪いことをしたみたいな気分になって、サスケは薬草拾いの手伝いを申し出た。

腰を落としたまま薬草を採取し、少年が持っていた大きな籠に詰め込んでいく。

緩やかに過ぎていく時間。

どちらも喋ることはないのに、とても落ち着く。ゆったりとした一時だ。

「すみません、手伝わせちゃって……」

構わねぇよ、とサスケは頭を振る。

薬草を採取するのは気が紛れたし、何かに没頭すると考えなくてすむ。

だが。

「友達と喧嘩でもしたんですか？」

突然言われた言葉は、サスケの思考を酷く乱した。

「……！　あんな奴、友達でも何でもねーよ」
「随分と仲が良かったんですね」
にっこりと笑って言われた言葉は、絶対にサスケの言っていることを聞いていない。
仲がいいわけがないだろが！
切々と如何に仲が悪いか、ナルトがどんな奴かを説明するが。
「目元腫れてますよ。一晩中泣き明かしたんじゃないですか？」
無駄に終わる。
「話なら聞きますよ。薬草拾いを手伝ってくれた御礼に……」
「心を抉るようなことを言われた。そいつの言うことがいちいち正論でむかついて、だから殴った」
「――わかりやすいですね」
「笑ってんじゃねーよ……」
不貞腐れたようにサスケは薬草を放り出して、地面へと座り込む。
くすくすと頬を綻ばす少年の手伝いなどもうしない、と心に決めて地面へと寝転がった。
朝靄はとっくに消えていて、晴れ渡る空は昨日と違って陽気な気分にさせてくれる……こともなく、サスケの心はどんよりと曇り空だ。隣で笑う奴がいるから、そのせいもあるだろう。
「それくらいの年齢の男の子だと喧嘩で殴りあうくらいはするでしょう。貴方も随分と殴られたようですし」
「俺のほうが殴った！　俺は負けてねぇ！」
「勝ち負けの問題なんですか？」

立ち上がり、自分の強さを叫ぶが、少年の言葉に罰が悪くなって、拗ねる。
胡坐をかいてそっぽを向く様は、ただの捻くれた子供だ。

「……違うよ」

ぽつり、と呟かれた言葉はとても小さい。

「じゃあ、喧嘩したことを後悔してるんですか？」
「……別に」
「わかりやすいですね。顔に書いてますよ。後悔してるって」
「してねーよ！」

語調が荒い割には、サスケは妙にしかめっ面だ。
途切れるように終わる言葉にも力はなく、大量の空気を吐き出しているだけのようにも思える。
後悔、している。
仲直りもしたい。
そんなことを考えている自分も認めたくはない。
見透かしているかのように、少年はサスケの揺れる眼を見つめている。再び、サスケは目を逸らした。くすり、と笑われるのも無視だ。

「謝ればいいじゃないですか。相手の子も悪いんでしょうけど、君も悪いんでしょう？　貴方から殴ったのなら、貴方が謝るべきです」
「謝りたくねぇ」

当然だ。自分は悪くないのだから、謝りたくない。
無理やりそう思い込む。

「意地っ張りだなぁ。そのことを後悔する日が来るかもしれませんよ」

どういう意味だろうか。まるでもう会えなくなるかもしれないような言葉。

心に、染みこむ。

「君にとって……その人は大切な人ではないんですか？」

「大切な人……？」

問い返すと、少年は何かを思い出すように空を見上げた。

「いつ、二度と会えなくなるかわからないです。もしかしたらこれで終わりかもしれません。永遠に仲違いしたままかも……ね」

話しすぎましたね、と舌をぺろっと出して眉を下げる。

「何にせよ、後悔しないように心がけたほうがいいでしょうね」

「後悔……」

「人は本当に大切なものを守りたいときに、強くなれるものなんですから」

直感する。

嫌な予感が心に走る。

だが、それは見て見ぬ振りで……

「……お前、もしかして。いや、何でもない」

「では、お先に失礼しますね。また、どこかで会いましょう」

「あぁ……」

また会うことになるだろう。おそらくは、敵として。
何故自分の悩みなどを聞いたのかはわからない。信用させるためかもしれないし、不意打ちするためだったのかもしれない。
だが、そんなことは脳裏から放り出す。
今はただ、荒れ狂う悔恨を抑えるために、感情を吐露したかった。

波の国・その伍

5.

タズナが建設中である橋の下にはとても大きな川が流れている。その幅は実に三百メートルはあろうか。水深も実に深く、多くの船が行き交っている。木製の船を櫂で漕ぐ人力のものもあれば、帆を立てて風力で動くものもあり、エンジンを積んで機械で滑走するものもある。それらのほとんどはガトーカンパニー製のものであり、流通の要を背負っている。

そんな中、川の端の方では水遊びに興じているのかと見紛うほどにずぶ濡れになっている三人の少年少女がいた。ナルト、サスケ、サクラである。

カカシの指導の下、水上歩行の行――つまりは、チャクラを利用して水の上で立つこと――をしているのだが、上手く行かずに水の中へと落ちていくのである。

こういう修行のとき、会話が尽きないほどに楽しみながら行うのが常なのだが、今日はそうでもないようだ。

水の上で危なげに揺れながら立っているナルトは、ちらりとサスケの顔を覗き見る。自信に溢れた顔つきはどこへ行ったのか。親に叱られた悪餓鬼のようにしょぼくれている。一歩踏み出そうとして、躊躇して、俯いた。髪をがしがしと掻き毟り、修行へと集中しようとする。しかし、できない。こんなことは初めてだ。

眼尻はうっすらと赤く腫れていて、微妙に鼻声だ。ずずっ、と鼻水を吸い込んで――チャクラの調節を間違えた。

ぽしゃん。

いっそ間抜けな音を立てて、ナルトは水の中へと落ちていく。が、落ちるのは下半身だけで済んだ。何故なら、サスケが一瞬で近づいて、ナルトの手を掴んだからだ。

「大丈夫かよ？」
「お、おう……サンキューな」

引っ張り上げて、再びナルトは水の上に立つ。
そのときに気づいたのか。サスケは頬を朱に染めると急いでナルトの手を放し、鼻息を鳴らす。

「勘違いすんなよ。俺はお前を許してねぇからな」

距離を取る。
許していない、という言葉に目を見開き、口を開く。音にならない声は空気に溶け込み、誰にも届くことはなかった。
逡巡する。
少しだけサスケの方へ手を伸ばしてしまうナルトだが、ぐっと堪えている。
謝りたくない。
自分は悪くない。
わかっている。サスケも悪くないのだ。
誰も、間違っていないのだ。
強いて言うならば、幼いイナリを厳しい口調で弾劾してしまったことだろうか。サクラの言う通り、大人気なかったと思う。思い出せば、あのときは八つ当たり気味だったというのもあるし、何でそんなことになったのか。それは自分が一番わかっている。
嫉妬したのだ。
親がいるという事実が羨ましかった。誇り高い父がいることも妬ましい。失ったことに対しては同情するが、死に様を考えれば誇ることこそあれ、失望する理由がわからない。さらには、あんなふうにヒステリーを起こしていても大事に保護してくれる家族がいる。自分に甘いのに、周りはイナリを守ってくれる。ナルトには手に入

れられないものを持っているのに、不満を吐き出すその神経に、ナルトは激しく腹が立ったのだ。
そのせいだろう……柄にもなくサスケに対して不幸自慢などしてしまったのは。わかってもらえないと理解していることを吐き出すのは、卑怯だとナルトは思う。ナルトは、卑怯な手を使ったのだ。さらにはサスケの過去を暴き、馬鹿にした。感情を制御できなかったというのもあるし、自分と同じだと思っていたサスケが自分と違うということを知ったから、そのせいで――爆発した。
やり直したいと思う。
靄がかった視界にサスケを収める。
そろりそろりと水上を歩いていき、サスケの隣へ行く。
サスケがナルトを横目で見た。

「何だよ？」

温度のない声が空気を震わせる。
突き放すかのような、親しさの感じられないソレは、容易くナルトの心を折った。

（俺は……こんなにも弱いのか）

強くなりたいと願い続けて、そのために自分を高め続けた。
昔よりは強くなれた――そんなことを考えていたこともある。けれど、現実はそんなもの。友達との仲直りすら満足にできない弱者であることを思い知らされた。

「……なんでもない」

曇った眼は気づけない。サスケの瞳がかすかに揺れていることに。
すれ違いは、終わらない。

「……先生、なにあれ」

片足で水面に立ちながら、サクラは不思議そうに呟いた。

仲直りまだしないのかなーと楽観的に見ていたのだが、全くしない。ナルトなら自分から謝ると思っていたのに。

「男だからな。意地ってものがあるんだよ」

カカシの言葉は難しく、サクラの心には響かない。

意地っ張り。ただの馬鹿じゃないの？　そんなことを思いながら、修行は続けられていく。

その間に、何度も同じやり取りがナルトとサスケの間で行われた。

もどかしい。

日が暮れるても、互いの距離は埋まらない。

◆

タズナの家の中では、慎ましやかながらも豪勢な食事が振舞われていた。

それを食すのは川での修行によりどろどろになった七班のメンバーと、タズナの家族だ。

無言でぱくぱくと食べているのは初日とは全く違い、温度に欠けるもの。無言で、居心地が悪そうにひたすら飯を掻き込んでいる。

窓から見えるのは下弦の月。

電灯でうっすらと照らされる食卓は、自然の光が灯される外よりも薄暗く見え、重い空気がのしかかっていた。

サスケとナルトは隣で座っているにも関わらず、決して目を合わせようとはしない。仲違いしたままだ。

嘆息しながら見守るのはカカシとサクラ。
根が深い。
自分たちが作り上げてきた生き様を真っ向から否定し合った。どちらかが先に折れればすぐ仲直りするのだろうが、それでも、信念を曲げることができない不器用な二人は、決して自分から謝ろうとはしない。
黙々と食が進んでいく。
そんなとき、椅子を乱暴に押しのけて叫んだ子供がいた。

「なんでそんなになるまで必死に頑張るんだよ！　修行なんかしたってガトーの手下には勝てないってのに！
いくら格好いいこと言って努力したって、本当に強い奴の前じゃ弱い奴はやられちゃうんだ！」

イナリである。
泥まみれになった不潔な二人に対して――サクラは結局一度も水の中に落ちることはなかった――感情をぶつける。

「負け犬のくせによくわかってるじゃねぇか」

ぽつりと呟いたのはナルトだ。ぎろりとサスケが睨みつけているが、そんなものは無視している。
イナリは、怯む。
静かに怒るナルトの視線を見て、怯えたのだ。深く――底が見えない瞳の中は、イナリにとって恐怖の象徴。
何を考えているのか、わからない。
だが、止まれないときもある。
ナルトたちの努力をする姿は、努力していない自分を無言で責め立ててくるようで、イナリは――

「お前ら見てるとムカツクんだよ！　この国のこと何も知らないくせに出しゃばりやがって！
お前にボクの何がわかるんだ！　つらいことなんか何も知らないで、いつも楽しそうにヘラヘラやってるお前とは違うんだよぉ！」
「何言ってるんだ？　お前のことなんかわからないし、わかったなんて一言も言ってないだろ。それに、いつ俺がお前を助けるなんて言った？　勘違いも甚だしいな」

返答は、意外なものだ。
助けてくれない……？　聞いていない。イナリはそんなもの、聞いていなかった。

「俺以外の奴はどうだか知らないけど、俺はお前を守る気なんかねぇよ」

ナルトも席を立ち、呆然と立ち尽くすイナリのほうへと歩いていく。

「ナルト！　お前……っ！」
「サスケ、少し黙ってろ」

止めようと立ち上がるサスケの肩に手を置いたのは、カカシだ。
振り払おうとするが、強靭な力で抑え込まれて、動けない。
その間にもナルトはイナリの近くへ行き、腰を下ろして視線を合わせている。
じっと見つめる眼は逃げようとするイナリの姿を捉えて離さない。
「そのままじゃお前……一生変われねぇぞ。ちっとは根性出してみろ」

涙が浮かび、震えだすイナリのことを、決して逃がしはしない。
「話は聞いた。目の前で父親殺されたんだろ？　むかつかねぇのか。やり返したいって思わないのか。勝てない敵には挑まないのか。そりゃ利口な考えだけど、お前のやりたいことは何なんだ？」

心を引き裂く。
今までの自分を全否定する言葉は、ことごとくイナリの精神に入り込んでいく。
「俺はお前のことなんかわからないから、これは推測でしかないけどよ。言葉の端々から感じるよ」

何をだよ、イナリは呟く。
目を逸らし、ナルトの方を決して見ようとはしない。
だが、顔を両手で挟まれて、無理やりナルトに目を合わせられた。
偽りは許さない。

「ガトーの手下に勝ちたいんだろ？　本当に強くなりたいんだろ？　それなのになんで行動しないんだ？　少しずつ始めればいい。できることからこつこつ積み重ねていけばいい。何もやらないより随分マシだし、運が良ければ今すぐにでも勝てるかもしれない」

頭が痛い。
胸がばくばくと鼓動する。
お前のやりたいことは何だ。
反芻する。
「ボク……は……」

涙は頬を伝って、地面へと落ちる。
ぽとぽと。ぽとぽと。ぽとぽと。

「本当に大切なものは自分の両腕で守る――良い言葉だな。お前の父親はたぶん、格好良く死んだんだろうよ。で、お前はどうしたいんだ？」

やりたいことは――

「知らないよっ！！」

イナリはナルトの手を振り払うと、背を向けて走り出した。
煌々を夜空を照らす月や星は、いつだって道を照らしはしない。
うすぼんやりと照らすだけだ。

「知らないと何も始まらねぇんだよ」

寂れた家の中、木霊する言葉は――穏やかに染みこんで行く。

◆

轟々と風が吹き荒ぶ。
身体を打ち付ける暴風が今は心地よく、桟橋に座り込んで、サスケは月を見上げていた。
思い出すのは『うちはの悲劇』と呼ばれる記憶。
失われた家族を殺した唯一の兄。いつも金魚のフンのように付いて回って、上手く言いくるめられて家へと帰されていた忘却の彼方にある幼き日の思い出。終幕は、血染めで終わったわけだが。
楽しき日々に塗り潰されて、思い出は消えていく。今は昔ほど、兄を殺したいという感情は失われている。

殺さなければならない、という確信はある。だが、感情が伴っていないのだ。
全ては、ナルトのせいであり、サクラのせいだ。
楽しすぎる日常が自分の憎悪を掻き消していく。それでもいいんじゃないか、と思う自分が怖い。
そして、もしこのまま仲違いしたままならば、きっと憎悪は戻ってくるんじゃないか、という不確かな希望が胸の内にあるという事実が、たまらなく恐い。
俺は、どうしたいんだ。それがわからない。わからなければ、先へと進めない。
皮肉なことに、ナルトの言葉のせいで、サスケの心は乱されていた。

「くそっ、あいつは何が言いたいんだ……」

呟いた言葉が、足音と重なる。ぽきりと枯れ木を踏み折った音。
振り向くと、いつものような曖昧な笑みを浮かべる白髪の男がいた。

「隣いいか」
「カカシ……」

許可を待たず、カカシは桟橋に座り込む。
サスケと同じように月を仰いで、ぽりぽりと髪を掻く。弄ぶ。
何かを、言い澱んでいた。
沈黙。
居心地が悪くなる、肩にずっしりと圧し掛かるような静寂は息が詰まりそうになり「何の用だよ」とサスケが言おうとしたときのことだ。

「ナルトのこと……許してやれ。お前だってさっきの話を聞いてわかってるだろ？　最初からあいつの態度は一貫してる。言葉が不器用なだけでな」

風が、凪いだ。

衣服が肌蹴そうになるほどの風は止んだのに、それなのに、身体が震えるのは何故だろうか。

とても、寒い。

「サスケの言葉は聞いてたよ。『失うものがないお前に――何がわかる！』って……それこそ、お前がわかってない証拠だろ？」

「何が言いたいんだ……？」

わからない。

カカシの言いたいことを、わかりたくない。

「ナルトの言葉をちゃんと覚えてないのか？」

意思に反して、サスケの優秀な頭脳はナルトの言葉を思い出す。

『俺の大切な友人がこんな爺さんのために死ぬかもしれないと思うだけでぞっとする』

任務を必死に断ろうとしていたナルトの言葉を鮮明に思い浮かぶ。

あれほど他人に対して攻撃的なナルトは久しく見ていなかった。

イルカのことを侮辱されたとき以来ではないだろうか。

結論は、簡単に出た。

つまり。

「失うものはあるんだ。お前たちの命だ」

失いたくないから、必死に修行をしている。
「――任務を嫌がった理由も、渋々付き合っている理由も、全部お前らを失わないためなんだよ」
「だけど……」

わかってはいた。
実のところ、心のどこかで理解していた。
けれど、熱を持った脳髄は否定しようと試みる。

「あいつが昨日、泣いてたこと知らないだろ？　お前に友達じゃないって言われて、こっそり枕を濡らしてた」

ナルトが、泣いていた。
自分も、泣いていた。

「水に落ちかけたとき。お前に助けてもらえて……凄い嬉しそうにしてた」

知っている。助けた本人なのだから、知っている。
頬を緩ませてにへらと笑った姿を一番近くで目撃したのはサスケなのだから。

「あいつも後悔してるんだよ。何度も何度も謝ろうとしてたのは、お前だって気づいてるだろ？　ずっと、一人だったんだ。お前とサクラは、やっとできた友達なんだ」
「カカシはナルトの味方かよ！」

ままならない感情は、咆哮となって鳴り響く。

「……俺は七班全員の味方だよ」

にこやかに微笑むカカシの姿が――

サスケは鼻息を鳴らすと、家へと戻っていく。

カカシは一人、桟橋で佇み続けた。

◆

時を同じくして、ナルトは川の上で修行に勤しんでいた。

衣服は綺麗に畳んで川辺へと置き、トランクス一丁の姿は何故だか哀れを誘う。だが、本人は全く気にしておらず、よく鍛えられた引き締まった肉体を余すことなく外気に晒している。

月明かりに照らされた黄金の髪と相まって、まるで昔ながらの姫を助ける冒険譚に出てくる騎士のよう――というわけではなく、ただの悪ガキにしか見えない。必死に足掻く姿は、品はない。だが、高潔さはあった。自分に厳しいという高潔さが。

またもやチャクラの制御を疎かにしてしまって、水の中へと落ちてしまう。だが、救いの手が差し伸べられた。

腰まで水に浸かっているので見上げることになる。そこにいるのは桃色の髪が似合う、呆れた表情を浮かべるサクラがいた。

だらしないわね、と呟くとナルトを水から引き上げる。

違和感。

何でサクラがここにいるのだろう、と助けられながらナルトは考えた。

「……何か用か？」

川辺に移動して、座ってから語りかける。

服着なさいよ、と少しだけ恥ずかしそうに言うサクラに「俺は気

にしないぞ」と伝えるが、「私が気になるのよ！」と言われて、渋々と服を着替える。身体を拭かないまま着替えたものだから、ぺっとりと肌に張り付く衣服がひどく鬱陶しかった。

「ちょっと話があって……ね。座りなさいよ」

反対することを許さない雰囲気。

仕方なく川辺に座り込むと、サクラも隣に腰を下ろす。

何だろう、と少しおろおろしながらサクラを見たり、月を見たり、川に浮かぶボートを見たりと、ナルトは珍しく落ち着きのない態度を見せる。

頭を、鷲づかみにされる。

何だぁっ！　と驚く暇なく、無理やりサクラの顔へと視線を固定された。

そして。

「まずは……ごめん！　昨日は頭に血が昇っちゃって、ひどいこと言ったから」

「はぁ？」

「あんたがうざいって」

ぴりぴりとした空気を発散していたサクラが、急に謝って来た。

あまりに予想外の出来事に、ナルトは目を白黒させながら、何も考えずに返答している。ほとんど条件反射に近い。

「あ、あぁ……気にしてねぇよ」

「嘘。今すごい嬉しそうな顔してるわよ？」

自分の顔を手で触れてみる。すごく、にやけている。

ちょっとだけ考え込んで、嬉しい理由を考えてみると、すぐに答えに行き着いた。とても簡単なものだ。

「……そうかもな。俺、サクラのこと好きだし。謝られて悪い気分にはならねぇよ」

静寂。

頬を朱に染めながら、あたふたと「告白！？　で、でも……私はサスケくんのことが……！」などとサクラは慌てている。何をそこまで驚いているのかナルトの理解の外である。

「何で真っ赤になってんだ？　友達なんだから好きに決まってるだろ」

友達なんだから好きに決まっているだろう。

「そういうことね……変な期待させないでよ」と残念そうに俯くサクラの気持ちがナルトにはわからない。

この男――こと恋愛感情については全く理解できないのだ。誰かに惚れたことがないのだから、当然ではあるが。

だからこそ、照れているサクラのことに気づかない。

「……？　声が小さくて聞こえねーよ」

「あんたは言葉の使い方が下手過ぎなのよ！　いちいち直球過ぎ！　変なところでは気が回るくせにさ！！」

思い切りデコピンを喰らって、ナルトの頭は弾け飛ぶ。

とても痛い。

目の端から涙を浮かばせながら、潤んだ瞳でサクラを見る。

「イナリくんに期待してるんでしょ？　発破かけてるみたいだし」

そんなことはない。ナルトはイナリに対して応援したつもりなどなかった。
思ったこと言っているだけである。

「サスケくんもあんたと同じ気持ちなのよ。サスケくんの方がイナリくんの気持ちのことがわかるでしょうけどね
ま！　私にはイナリくんの気持ちがわかんないんだけどね！　両親いるし、友達もいるから……想像するしかできないのよ。
それでも、凄く悲しくなるってことくらいはわかるわ……。
あんただって、イナリくんの気持ちわかるでしょ？」
「……わかんねぇよ」

負け犬の気持ちなど、わかるはずがない。
ナルトの心は折れたことなどないのだから。折れる余裕など与えられなかったのだから。

「わかりたくないだけなんじゃないの？　イルカ先生を失ったら、どう思う？　悲しくならない？　心が折れない？　私はあんたたちが死んだら、とても辛くて動けなくなると思うわ」

失ったことはない。守りきった。イルカのことは、自分の力で守りきった。
だが、先に守られたのは――

「意地張ってないでさ。謝っちゃおうよ。サスケくんだって、あんたに謝りたがってるんだから。聡いあんたのことだから、気づいているとは思うけどね。
殴ったのはサスケくんのほうが悪いと思う。けど、心を傷つけたのはあんたが先よ？　無自覚に、だけどね」

「知るかよ」
「私に言えることなんてそれくらいよ。じゃあ、帰るわ。修行もほどほどにね」

言いたいことだけ言って、サクラは帰っていった。ナルトにはそう思えたのだ。
何が言いたかったのだろう。
わからないナルトは再び服を脱ぎ散らかすと、畳みもせずに川へと飛び込んだ。
水面に片足で立ちながら、考える。
もし、サスケが死んだらどうだろう。サクラが死んだらどうだろう。イルカが死んだらどうだろう。カカシが死んだらどうだろう……。
とても悲しいとは思う。殺した奴を殺そうとするかもしれない。泣き塞いだりはしないと思う。けれど、もし殺し終えたら……？動かなくなるのではないだろうか。動けなくなるのではないだろうか。
難しい。
ナルトは考えるのを止めた。

「お前、何でそんなに頑張れるんだよ！」

集中力を乱されて、また水へと落ちる。
完璧な不意打ちは思考を止めた瞬間を狙うかのように与えられる。
川から頭だけ顔を出してみると、川辺には拳を震わせるイナリがいた。頑張れる理由を聞きたいらしい。
今日は修行を随分と邪魔される日だな、と思いながら、ナルトは川辺へと泳いでいく。

「あー？　頑張ることに理由なんていらないだろ」

川から揚がり、身震いして水滴を弾き飛ばす。隣にいるイナリも水滴を浴びるが、萎縮することなく、ナルトを見据えている。

「うるさい！　僕が質問してるんだ！」

「藪から棒に……まぁ、いいけどよ」

ナルトは地面へと尻をつき、隣をとんとんと手で叩く。イナリは座ろうとはしないので、苦笑することに終わるが。

「自分の非力さに涙したことって……あるか？」

思い出すのはアカデミー時代のこと。

強ければ迫害されなかった。優秀であれば馬鹿にされることもなかった。協調性があれば輪の外に弾き出されることもなかった。

ナルトには全部なかった。

だからこそ、努力して全てを手に入れようと誓ったのだ。

「悔しくてさ。苦しくてさ。辛くてさ。悲しくてさ。そういう経験を糧にして、気づいたんだ。強くなったら、そういう出来事は起こらないって」

けれど、容易に手に入るものではなく、自分の時間を全て捧げても、才能のある奴には追いつけない。

「――だから、努力する。強いて言うならば、理由なんてこんなもんだ」

ならば、もっと努力する。もっともっと努力する。そうすればいつかは追いつけると信じて。

それがナルトの信念であり、生き様だ。
イナリはどうだろうか。

「……僕は、負け犬なのかな」

泣きそうな声が耳朶を打つ。

「さぁな。少なくとも、サスケはそうは思ってないみたいだったぞ。俺の顔を見ろ。お前のことを馬鹿にしたら思いっきり殴られてな。痛いの何のって……それに、サクラにも説教されてさ。ぼこぼこだよ。泣きそうだぜ……」
「サスケって黒髪の兄ちゃんのこと？」
「あぁ、あいつはお前に期待しているみたいだ。俺よりも強いサスケがな」

おかげで喧嘩に負けた、と笑いながらナルトは言う。
腫れた頬も、まだ痛む腹も、全部が全部、痛い。イナリのために拳を振るったサスケのせいで、とても痛い。

「僕も、強くなれるのかなぁ……」

からからと笑うナルトのことを見上げながら、イナリは望む。
強くなりたい、と涙で濡れる瞳は語っていた。
じっと見つめても、イナリの眼は逸らされることなく、ナルトの瞳を射抜いている。
にやりと笑う。

「なれるよ」
「けど、昨日僕は変われないって言ったじゃないか！」
「昨日のお前は変われなかっただろうな。けど、今日のお前は変わ

れるよ」

強くなりたい、と望むのなら強くなれる。ナルトの持論だ。

昨日までは不貞腐れていたガキだったが、今は前を見ている。進もうとしている。強くなれないはずがない。

「強くなりたいんだろ？　願って行動すれば、絶対に結果は出る。お前よりは強い俺が保証してやる」

「どうやったら強くなれるの？」

認められた、と喜んだイナリは自分より強い奴に教えを請う。

それが間違いだったと気づきはせずに。

「そんなに強くなりたいのか？」

「うん！」

「じゃあ、腕立て伏せ百回だ」

ナルトは、厳しい。自分にだけではなく、他人にも厳しい。思いやりがないとよく言われる。

自分ができるのなら、他人にもできる、と決め付けてしまうからだろう。

「え、できないよ……？」

「じゃあ、お前は変われないな」

「や、やる！」

強くなれないと断言されて、イナリは腕立て伏せを始めた。

「よし、頑張れ！　できるまで修行ついでに監視してやる！」

終わったのはそれから一時間後の話。

イナリは腕がぱんぱんに腫れあがり、ナルトはイナリの腕立て伏せが終わるまで水面に立ち続けたので、チャクラが枯渇してしまった。

二人とも、ただの馬鹿である。

波の国・その六

6.

朝の陽光が霧を切り裂き、ぽかぽかと暖かに照らしてくれる。
タズナの家の外、朝日に目を細めながら、ナルトを除く七班のメンバーとタズナは、仕事道具を持って出かけようとしていた。

「じゃ、ナルトをよろしくお願いします。限界まで体力を使っちゃってるから、もう動けないと思いますんで……」
「にしても、何があったんでしょうね。仲良くイナリ君と二人で寝ているなんて……」
「仲が良くなったんじゃろう……。金髪のガキはずっとイナリを応援するような言葉を言っていたからのぉ」

年の功というものか。タズナにはおおよその概要はわかっていた。
イナリとナルトがぼろぼろになって一緒に帰ってきた。しかも、どちらも身体中が筋肉痛だ。何をやっていたかを考えるだけで微笑ましく感じる。
強くなりたい。
そんなことを言っているイナリを見たのは初めてであり、ナルトたちの修行をしている風景を見て、考えを改めたのだろう。
孫は強くなる。
そう考えるだけでタズナは老体に鞭打つことが楽しくなってきた。

「じゃ！　超行ってくる」
「ハイ！」

ツナミに手を振りながらみんなが出発してから少しして、ナルト

が眠そうに眼をこすりながら寝室から起き出してきた。
ナイトキャップが微妙にずれているかなり間抜けな状態で、しかも太股にはイナリがしがみついている。「兄ちゃん……ねむい」と言いながらぶらさがっているせいでズボンはだんだんとずれていく。

「何時だ。先生たちは？」
「あ！　ナルト君、もう起きたの？　今日はゆっくり休めって先生が……」
「俺を置いていったのか……酷いな」

今日が再不斬が仮死状態から回復するのにかかるとされた一週間の最後の日である。つまり、今日からいつ襲われてもおかしくないということだ。それならば、戦力は一人でも多いほうがいい。
イナリを放り出し、身体の調子を確かめる。
筋肉痛は残っていない。チャクラも満タン。思考も鮮明だ。何も問題はない。
むすっとしたままイナリはナルトを見上げてくるが、デコピンを喰らわす。弾きとんだ。

「俺は行くから、お前は寝てろ。んじゃ、ツナミさん。行ってきます」
「はい、いってらっしゃい」

いってぇぇぇ、と泣き叫ぶイナリは無視して、ナルトも急いでサスケたちの後を追った。
そのことを後で悔いるとも知らずに……

◆

努力すれば報われる。

そう信じてやってきたのだろう男たちの末路は肉塊だった。
何も成し遂げられず、後世に思いを伝えることもなく、路傍に倒れて朽ち果てて行くだけ。
その生に意味はあるのだろうか。その死に意味はあるのだろうか。
意味を求めることに意味はなく、単純な事実として、男たちは死んだ。存在が消えた。もう立ち上がることはなく、目を開くこともない。
夢を繋ぐための架け橋。
タズナたちが命を賭して積み立ててきた命の結晶。
それさえできれば、それさえあれば、きっと変わる。変われる。
日々の変革をもたらしてくれると信じていた希望の象徴。
穢された。
血で黒く染め上げられた。肉がぬらめいて混沌としているそれは、とてもではないが希望とは言えない。死は、いつだって絶望の象徴だ。
不謹慎ながらも、カカシは橋の上で散らばっている元人間だったものを見て『パンドラの箱』の物語を思い出した。
９９％の絶望の中に１％の希望がある。その内の１％こそが絶望なのだ、と。何故なら、希望がなければ絶望に出会うこともないのだから。人々は希望があるからこそ、手を伸ばす。
伸ばした手は、届かなかったが。
タズナの膝が、折れた。
死した仲間たちを抱え上げては、涙をこぼす。
わしのせいだ。わしが作ろうなんて言ったから。
悔恨の言葉が流れては風に消える。別れの時間。だが、現実は無慈悲なものだと相場が決まっている。別れる余裕など、与えてはくれない。
晴れた視界が曇り始める。
霧だ。

「ね！　カカシ先生……これってあいつの霧隠れの術よね」

サクラの言葉にカカシは頷く。

ほぼ間違いなく、タズナの仲間を殺した――そして、自分たちを殺そうとする敵がやっていること。

ぼやけた視界にかすかに写るのは顔の下半分を布で隠した大刀を担ぐ鬼人と、感情を隠すかのように仮面で顔を覆う少年だった。

鬼人は印を組む。

何度か見た覚えのある印は――水分身の術。

十を超える再不斬の分身はサスケたちの周囲を囲む。

逃げられない。

サスケは、震えた。身体を突き動かす衝動を抑えられない。

以前は水分身相手にカカシを除く三人で対処した。

あの時は、まだ弱かったから。

だけど、今は――っ！

「久しぶりだな、カカシ。そこの憎たらしいガキも、一丁前に武者震いしてるじゃねぇか。勝てるつもりでいるのか？」

「やれ、サスケ」

修行の成果を全て、出しきる。

足の裏にチャクラを溜め込み、解放。

視界が歪む。

何もかもがスローモーションに見える。

再不斬の水分身の動きなど、遅すぎて欠伸が出てきそうだ。いや、欠伸が出ても問題ないほどに、彼我の差は大きかった。

苦無を取り出す。

首を掻き切る。

十を超える水分身を切り裂くのに、3秒もかからなかった。

ばしゃあっ。

分身は水となって、地面を濡らす。
「強敵出現ってトコだな、白」
「……そうみたいですね」
再不斬の言葉に仮面の少年――白は同意する。
「あのお面の子も再不斬と仲間だってこと隠すつもりはないようね。本当、ふてぶてしい！」
「アイツは俺がやる……下手な芝居しやがって……俺はああいうスカしたガキが一番嫌いだ」
「サスケくん、鏡を見たほうがいいわ。そうすると一番嫌いなガキが写るわよ」
「……どういう意味だ？」
「意味なんてわかんなーい」
てへっ、と舌を出しながらとぼけるサクラに意地悪をしたい衝動に駆られるが、サスケは強靭な精神力を持って耐え抜いた。そんなことは後でもできる。今は、目の前の敵のほうが大事だ。
「末恐ろしい少年ですね。いくら水分身がオリジナルの十分の一程度の力しかないにしても、あそこまでやれるとはね」
「だが、先手は打った。行け」
白は、駆け出した。サスケも同時に駆け出す。
交差する瞬間、サスケは目を見開いた。
見切る。
頭を狙う苦無の一突きを首を捻るだけで回避し、体勢を低く、踏み込む。
懐に入ったところで膝が襲いかかる。速度が乗っている今、回避

するのは難しい。だが――生憎とサスケは普通ではない。それに、このパターンでの膝蹴りはナルトとの修行のときに何度もお見舞いされている。そのたびに昏倒しているのだ。馬鹿でも対策を思いつく。

打ち上げられる膝の横に肘打ちを与えて、軌道を逸らす。

「なっ！？」

苦無で突いたせいで上体は流れており、膝を上げたせいで片足立ち。いわゆる、死に体。対するサスケは肘打ちをした反動すら利用して、攻撃へと移ることができる。圧倒的優位。

チャクラで地面へと吸い付く。そして、爆発するかのように跳ね上がる。加速度的に増した速度から打ちだされるのは顎へと向けた掌底。

下から突き出すように打ちこまれたそれは、白はバク転をする要領で辛うじてかわす。だが、それすらもサスケの予測の範囲。

避けられるように攻撃をした。

一歩で距離を潰す。

そして、着地した右足へ、思い切り振り下ろすようにローキックを放つ。

自分の体重が乗ったときに、相手の攻撃を合わせる。カウンターの要領だ。

つまり、ダメージが倍増する。

白は歯を噛み締める。

足の激痛は意志の力で抑え込み、再びサスケに苦無で斬りかかる。

これも、予想内。

サスケは苦無で受け止めた。

ぎりぎり、ぎりぎり。

金属同士が軋み合う不協和音が耳朶を打つ。

◆

「すごい……」

サクラは戦闘の凄まじさに見とれていた。

自分ではできない高速戦闘。圧倒するサスケの姿。素直に格好良いと思える。

ナルトとサスケの修行での演舞は何度も見たことはあるのだが、あれはお互いの手を知り尽くしてるから、ここまで軽快な戦闘にならないのだ。どちらも頭が良いから、騙し合いが占める領域が多くなる。だが、これは純粋な肉弾戦――心が、昂る。

知らずして、頬は朱に染まり、汗がにじみ出ていて、手を握りしめていた。興奮する。

だが。

「サクラ！　タズナさんを囲んで俺から離れるな！　アイツはサスケに任せる」

「うん！」

今は実戦。気を抜いてはいけない。

サクラはサスケの戦闘から目を放すと、タズナの護衛へと意識を傾けた。

◆

膠着状態。

苦無での押し合いをしたまま、サスケと白は睨み合っていた。

歯が軋むほどに力を込めながらの意地の張り合い。退くことは、ない。

そんなときだ。

「君を殺したくはないのですが……引き下がってはもらえないのでしょうね」
「アホ言え……」
「僕は貴方のスピードについていけない。けれど、僕は既に二つ先手を打っている」
「二つの先手？」
「一つ目は辺りに撒かれた水……そして、二つ目に僕は君の片手を塞いだ。したがって、君は僕の攻撃をただ防ぐだけ」
「片手で印だと！？」

片手での印。
サスケはそんなものをアカデミーで習うことはなかったし、今まで見たことすらない。
未知の術。
言葉尻でわかることは、水を利用するという特性だけ。
用心深く周囲を窺う。足元にある水溜りを注視する。いつでも離脱できるように足にチャクラを込める。

「秘術・千殺水翔！」

水が宙に浮かび、無数の氷の刃となってサスケに襲い掛かる。
冷やりとしたのは氷によって急速に気温が下がったからか、それとも恐怖のためか、それとも――自分が熱くなったからか。
刃がサスケへと向かって、飛びかかる。
避ける隙間さえ与えない弾幕攻撃に晒されて、サスケは穴だらけになる。
さて、ここで問題が起こる。
仮に、印を片手で組むとしよう。その間、力が均衡するはずがない。思い切り力を込めているサスケと、印を集中力を割く白ではど

うしても差が出る。
それなのに、何故か均衡していた。理由は簡単だ。
敵が術を発動する一瞬、それは発動する。
「水遊びか？　蒸し暑いからちょうど良い感じだな。で、先手が何だって？」
串刺しに刺されたサスケは、何故だか白の後ろで嗤っていた。
どきりとする。確実に殺したはずなのに、それなのに生きている。
からん、と乾いた音がした。
死んだのはサスケではなく、ただの丸太。変わり身の術。初歩中の初歩。
気が、抜けた。そんなことも見抜けなかった自分に呆れ果てた。
隙。
サスケは決して見逃さない。
背後からの上段蹴り。頭を狙ったそれは屈むだけで避けられるが、上段蹴りの軌道を無理やり変えて、屈んだ顔へと叩きこむ。いわゆる、変則的な下段蹴り。
避けたと安心したところへ思い切りぶつけられたそれは白を吹き飛ばす。地面を跳ねるほどの衝撃。数度跳ね、受け身を取り、白はよろりと立ち上がった。
「自信満々で挑んだ相手に一蹴された気分はどうだ？」
鼻息を鳴らしながら、自分こそが自信満々になっていることに気付かず、サスケは白を挑発する。
「全く……うちのチームを舐めてもらっちゃ困るねぇ。サスケは木の葉の里のナンバーワンルーキーだし、サクラは里一番の切れ者……そして、今はいない奴はオールラウンダータイプで……里一番性

格が悪い、演技派忍者のナルトだ」
「先生、それ褒めてないと思います」

少なくともナルトのことを褒めているかは微妙だ。結構な悪戯をされているので、カカシとしてもナルトのことは素直に褒めたくはない。ガキっぽい、とサクラに思われることも気にせずに、堂々と里一番性格が悪いと言いきった。
笑みを深くしながら、くつくつと笑う再不斬はかなり異様だ。自分の部下が劣勢なのにも関わらず、負けるはずがないと信じ切っている目。

「……白、わかるか。このままじゃ返り討ちだぞ」
「えぇ、残念です」

白は印を組む。
先ほどとは違い、両手で。
何をするのか見極めるためにサスケはじっと見据えていたが、間違いだ。
印を妨害すべきだった。

「秘術・魔鏡氷晶！！」

サスケを囲うように氷の鏡が浮き上がる。しかし、その鏡にサスケは写らない。何も、写らない。
戸惑いながら分析をするサスケを置いて、白が鏡へと触れる。鏡の中へと、入り込む。
意味が、わからない。
いくら思い返しても自分の知識にこんな術はなく、同系統の術すら思い浮かばない。そもそも、氷とは何だ。術は五系統しかないはずだ。『火』『風』『水』『土』『雷』しかないはずだ！　それな

のに、何なのだこれは！

「じゃあ、そろそろ行きますよ」

言葉とともに、鏡から浮き出てきたのは、先ほどの比べ物にならない数の氷の刃。鏡で囲われているせいで逃げ道もない。

降りそそぐ。

逃げ道はなく、せめて急所を外すように避けるしかできない。

苦無で叩き落とすために、サスケは防御の構えを取った。

だが。

「土遁・土流壁！！」

刃は全て、橋から急にせり上がった石の壁の中へと埋もれて、再び橋の中へと消えた。

周囲全てによく見知った金髪の奴がいて、囲うように地面へと手を翳している。全方位からの攻撃を防ぐために土遁を用いたせいだろう。基本的に土遁は地面へと手を触れなければならない。

格好良い登場の仕方しやがって、とサスケは呟いてしまい、そいつはサスケを見ると、照れ隠しの笑みを浮かべた。

「よぉ、ちょっと遅れた」

「ナルト……ッ！」

声が出る。

喧嘩をしているのに助けられたことで動揺してしまったのか、声が出てしまった。

ナルトはにっこりと笑って、瞬間、表情を消す。

「とりあえず、こいつ片付けようぜ。その後、仲直りだ」

「あぁ……！」
「にしても、この術は何だ？」
「知るかよ……！　というか、何で中に飛び込んできたんだよ！」
「お前がピンチだったんだ。無我夢中で飛び込むに決まってんだろ」
当然なのか？　と疑問を覚える。ナルトはそういうタイプではないことを、サスケは重々承知している。
「戦闘中にお喋りですか。随分と余裕ですね」
「一対二なのに余裕なお前のほうがすげぇよ」
「……行きます」
今度は印を組む時間すら与えず、連続的に白が攻撃を放つ。
ナルトとサスケはぎりぎり急所を外しながら全ての攻撃を回避していくが、ところどころに裂傷を負っていく。避けきれない。
だが、冷静さは失わない。
分析する。
「氷から氷に飛び移ってるのか？」
ぽつりと呟くと、攻撃が止んだ。
「この術は僕だけを写す鏡の反射を利用する移動術……僕のスピードからすれば君たちはまるで止まっている……がはっ！！」
不意打ち。
わざわざ術の説明をしてくれている白の後ろに潜ませていた影分身による、頭を狙った膝蹴り。
わかったことが一つ。
鏡の中にいても、思い切り殴れば吹き飛ばされて出てくるという

こと。
急いで捕まえようと二人で試みるが、白のほうが速かった。すぐに鏡の中へと戻ってしまう。
「お前、馬鹿だろ？　俺がいつ本体だなんて言ったよ。ご大層に術の自慢なんてしちゃってまぁ……」
あえて嘲笑する。挑発とも言う。
少しでも相手が怒ればいいな、という程度の意味のないものだ。
「くっ！　影分身を使えるんでしたね、貴方は！」
「ご名答。化かしあいは得意でね」
そして、この会話すらも時間稼ぎと陽動だ。
「火遁・豪火球の術！！」
これもまた不意打ち。
白の潜む鏡に打ちつけられるサスケの身長の二倍はあろうかという火の球は轟々と燃え盛る。
全てを飲み込まんばかりの豪華は――しかし。
「無駄です！　そんな火力では氷の鏡は溶けませんよ！　そして、後ろからの攻撃も無駄です」
「ぐぅっ！」
まだ潜ませていた影分身は殴られ消える。
ナルトは騙せたと思っていたので、思い切り舌打をした。見切られたら悔しいものだ。

「君たちは……強い」

白の言葉は、唐突だった。

「まぁな」と自信満々に胸を張るサスケに、「当然だ」と吐き捨てるナルト。態度は違うが、言っていることが同じなあたり、似たもの同士なのかもしれない。自信家だ。

「出来るなら君たちを殺したくないし、君たちに僕を殺させたくもない。けれど、君たちが向かってくるなら、僕は刃で心を殺し、忍になりきる。

この場所はそれぞれの夢へとつながる戦いの場所。僕は僕の夢のために、君たちは君たちの夢のために……。

恨まないでください。

僕は大切な人を護りたい。その人のために働き、その人のために戦い、その人の夢を叶えたい。それが僕の夢。

そのためなら、僕は忍になりきる。貴方たちを殺します」

訥々と語られた言葉は平坦なのにも関わらず、強い意思が宿っていた。

負けない、負けてたまるか、という剥き出しの意志が宿っていた。

そんなものをぶつけられたら、ナルトとサスケも男の子だ。ムキになってしまう。意地になってしまう。お前に負けるか、と強気にならないといけなくなったしまう。

宣戦布告。

つまり、そういうこと。

喧嘩を売られたのなら、買うという旨をわかりやすい形で伝えるのが作法だ。

ナルトは親指で首を掻っ切るジェスチャーをして、サスケは親指を地面へ指差した。

「今すぐ忍を廃業して詩人になったらどうだ？　ファンになっちゃうぜ」
「他人に夢を預けるあたりが感動ものだ」
喧嘩が、始まる。殺し合いの喧嘩が。
「にしても、お前はむかつくなぁ……誰かのために人を殺す、か。自分のために殺すと言えよ。全部を全部、他人のせいにしてるんじゃねぇ。人を殺すことを美談にしてるんじゃねぇ。だいたいが、汚いことだろう？　夢のため、とか笑っちまう。我欲のために訂正しろ。そっちのほうが相応しい」
「君は――厳しい考え方をしてるね」
「来いよ。潰してやる」
咆哮する。
男は苦無を手に持って、未知の敵へとぶつかることを良しとした。

◆

カカシと再不斬が対峙する。
本気を出した白を眼の端に移しながら、再不斬は嘲笑する。
「お前らみたいな平和ボケした里で本物の忍は育たない。忍の戦いにおいて最も重要な”殺しの経験”を積むことができないからだ」
それは的外れなものだった。
ナルトは命の駆け引きを卒業試験のときにやっているし、サスケは家族を失ったことにより、殺される覚悟が身体に染み付いている。もともと素養はあったのだ。
サクラは――

「生憎と、うちのメンバーは殺しを何度か経験していてね。そこらへんの機微をよく理解している。殺さなければ殺される、という事実をね」

忍の任務で重要なのは”殺し”の経験。そんなことはカカシだってわかっている。

だから、潜入任務などという危ない任務を選んだのだ。

こいつらなら、もう大丈夫だろう、という思いを持って。信じたと言ってもいい。人を殺す罪に潰されない、と。

「ま！　あの正体不明の血継限界は怖い。というわけで、一瞬で終わらせてもらうぞ」

「クク……写輪眼……芸のない奴だ」

額当てで隠す写輪眼を、カカシは見開く。

恐れのない目で、再不斬は写輪眼を睨みつけた。

「俺は既にお前のその目のくだらないシステムは全て見切ってんだよ。この前の戦い……俺は馬鹿みたいにお前にやられてたわけじゃない。かたわらに潜む白にその戦いの一部始終を観察させていたわけだ」

「それって――負けたことには変わりないんじゃない？」

空気を読まないサクラの一言で場が凍りつくが、気を取り直して再不斬は口を開く。

「……で、既にお前の写輪眼の対抗策は練り上がってるんだよ」

対策――それは。

「忍法・霧隠れの術」

視界を白く染め上げる濃霧。要するに、見られなければいいわけなのだから……。

なるほど、と呟きながら地形を覚えるためにカカシは周囲を見渡したとき、目に写った光景は……血塗れのナルトを抱えて泣き叫ぶサスケの姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9554n/

ナルトが馬鹿みたいに前向きじゃなかったら？

2010年10月22日00時26分発行